

インフィニット・ストラトス ～ダークサマー～

kageto

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作とは一風変わった一夏の物語。

皆様の支えもあって2015/11/15をもって完結しました。

作者は原作流し読み、コミック未読です。

設定に穴があるのはそこそここのところで見逃してください。特に法律関係。

2014/10/29 第02話を改訂。捏造度を下げました。

2014/10/30 性格改変のタグを追加しました。

2014/12/07 第16話から第20話までまとめて投稿しました。

2014/12/08 日間ランキング2位をいただきました。感謝です。

2014/12/13 日間ランキング1位をいただきました。読んでくださる皆さんに深い感謝を。

2014/12/24 第21話から第30話更新

2015/02/21 夏までの更新停止を決定

2015/03/28 勢いだけで更新再開

2015/09/26 お気に入り登録数2500人突破。感謝です。

2015/11/15 完結

読んでくださった皆様に、最大の感謝を

目次

第23話	84
第22話	79
第21話	75
番外編01	69
第20話	65
第19話	62
第18話	59
第17話	57
第16話	53
第15話	49
第14話	43
第13話	40
第12話	37
第11話	33
第10話	29
第09話	26
第08話	23
第07話	19
第06話	16
第05話	12
第04話	8
第03話	6
第02話	3
第01話	1

第40話	165
第39話	161
第38話	158
第37話	153
番外編06話	148
番外編05話	146
番外編04話	143
第36話	141
第35話	138
番外編03話	134
第34話	130
番外編02	127
第33話	123
第32話	118
第31話	115
なかがき	113
裏03話 第30話	109
裏02話	107
裏01話	105
第29話	103
第28話	100
第27話	97
第26話	95
第25話	91
第24話	87

最終話

A
n
o
t
h
e
r

E
p
i
s
o
d
e

172 168

第01話

はめられた。この数ヶ月繰り返した心の中で呟いた言葉をまた呟く。そもそも、受験当日の朝だ。前日に確実にセットしたはずの携帯のアラームがなぜか切れていて、目覚ましの時間がずれていた。バスは不自然な事故（未だに原因不明）による渋滞に巻き込まれ、3分前に滑り込んだ会場には遅刻者に対応するはずの受付の人間が居らず、教室もなぜか奥まった部屋で、普通だとわからないところになっており、探し回って入った部屋にこれまたなぜか、待機状態のISが鎮座していて、またまたなぜか一枚だけ異様に磨かれたタイルに足を滑らせてISに触れてしまったら、さらになぜか男である俺に反応してISが起動したと。そのタイミングで奥から研究員が出てきて俺を確保。手際がよすぎるんだ。クソ。はめられた。

「……………くん……………ちかくんっ!!……………織斑一夏くんっ!!」

思考の海から呼び戻される。なにやら呼ばれたらしい。スツと視線を上げて目に入ったのは胸。この角度から見ると顔より先に胸つてどうよ?だがまあ、俺も男だ悪い気はしない。それにこの人。山田先生は嫌いではない。むしろ好感が持てる。人間的に。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる?怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

「いえ。すいません。考え事をしていたので順番に気が付きませんでした。自己紹介ですね。わかりました」

立ち上がり、机の横に立ち回れ右。振り返った視界には女子だけ。ああ鬱だ。

「織斑一夏です。よろしく」

ここまで言ったときに教室のドアが開いた音がする。

「今教室に入ってきた、恥知らず常識知らずコンビの片割れにはめられてここに入学することになりました。ISに興味はありません。乗りたくもありません。むしろここにいてすみません」

背後で振りかぶる音がする。タイミングを合わせて振り向く。地球の1センチ前に出席簿が停止する。

「だれが恥知らず常識知らずコンビだ」

「織斑先生。叩くなら角を使って振り抜いてください。せつかく眼球が直撃するように振り返ったんですから。先生の膂力なら失明して入院。教師による暴力を隠したい学園側に、俺の自主退学を認めさせるための交渉のカードになるんですから。後、恥知らず常識知らずコンビは織斑先生と、そこで我関せずという雰囲気を出している篠ノ之箒の姉である篠ノ之束ですよ。まさか自覚なかつたんですか？この家事無能者。女ならせめて部屋の片づけくらい最低限出来るようになれ。この腐海製造機。あと、忘れないうちに伝えておきます。あなたを保護責任者から外すための話し合いの場を弁護士を交え設けます。後日、日時を弁護士を通じて連絡しますので予定を空けてください」

改めてクラスメートに振り返る。

「と、いうわけで。こいつらにはめられてIS学園に入学する破目になりました。織斑一夏です。好きなことは平穩。嫌いなことは厄介ごとと、行き過ぎた女尊男卑。退学するまでの短い間ですがよろしくお願いします」

第02話

さて、一時間目のIS基礎理論が終わり、心の中で一息つく。いくら意欲がないとはいえ課された義務をきっちり果たしておいてよかつたと思う。参考書を読み込んでおかなければ、授業についていけなかつたろう。

ちなみに、IS学園は入学式から授業がある。名前こそ学園だが、その実は教育機関。政府直轄施設に近い。無駄はないということだろう。学内の案内はないらしい。放課後に散策しよう。

にしても、この空気は失敗したと思う。自己紹介の内容が内容だけにどう接していいのか攻めあぐねているらしい。

現在の風潮は女尊男卑。ISという世界を揺るがす新技術が女性にしか使えないということもあり、この数年であつという間に男の地位は落ちていった。コレだからあのアーパーは。

とにかく、女尊男卑の風潮のご時世で、先ほどのような態度をとる男などほとんど居ないのだ。高校に入ったばかりの年齢だと、それこそ初めて見たといったところだろう。

「……ちよつといいか」

突然話しかけられた。が、振り向くことはしない。記憶の中と比べて、幼さはなくなっているが、聞き覚えのある声だ。

「おいっ」

反応が無いことにしびれを切らしたのか、先ほどより、声に怒気が含まれる。

「数年ぶりに会った幼馴染が声をかけているんだ。それなりの態度があるだろう！」

その言葉に、遠巻きにこちらを伺っていた女子達から、俺を非難するような囁きが聞こえてくる。

はあ。と、深くため息をついてから、声の主、篠ノ之箒に視線を向ける。相も変わらずのポニーテールに、鋭さの増した雰囲気。俺が座っていて、あつちが立っているという構図からか、あつちの偉そう

なこと。

「俺の中では、『軟弱だ』といって無理やり自身の家の剣道場に引つ張っていった無理やり鍛錬に参加させたり、用事がある時であろうと『サボるとはどういうことだ』と言って強制的に予定キャンセルさせて鍛錬に参加させたり、自分に都合が悪くなると竹刀振りかざして暴力に走るようなやつは幼馴染とは言わないんだが。それを踏まえた上で、誰が幼馴染だど?」

「私に決まっているだろう!」

言い切りやがったよ。こいつ。

「幼少から剣道やってるようなやつ竹刀の一撃を防具なしで受けるど、当然骨に罅が入ってたわけだが」

「それこそ鍛錬が足りないからだろう」

そこまで言うと、先ほどまで俺に非難の視線を向けていた女子達の視線があつちに移る。

「それにだ、俺はお前ら一家のことを知り合いと認めるのも不愉快なくらいに嫌いなんだ。幼馴染と認めてやるものか」

大体だ。

「娘が無理やりに連れてきているのを知っているのに、こちらの言い分を聞くことなく鍛錬を小学生に強要する父親に、明らかに打撲レベルの怪我をしているのに、子供同士のじゃれ合いで済ます母親。自分が、今の世界がつまらないからといって、好き勝手やっていいと思つて実行するアパー姉。こちらの都合も何もかも無視してくる暴力妹。どれだけ俺が被害をこうむつたと思つてやがる」

「つ……なつ。うつ、うるさい!私ほそんなこと知らん!!」

遠巻きだった女子達が、目に見えて篠ノ之から距離をとる。

「つまり何が言いたいかというのだ。他の女子達はともかく、お前は俺に関わるな篠ノ之箒」

俺の宣言とも言える言葉に、周りの女子達が一斉に頷いた。

この後、固まっている篠ノ之を他所に、俺はクラスの女子達と新学期ならではの交流を楽しんだ。

いくら学園に強制的に入れられたことが不満だからって、楽しんだらいけないわけじゃないだろう？
だって女子だらけだぜ？

俺だって男の子だもん

第03話

「—であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、梓内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ—」

HRの時のどもり方からは信じられないほど、スラスラと教科書を読んでいく山田先生。やはりあの胸はすごい。

休みの間に読んだ参考書の内容と、山田先生の語る、授業内容を比較して板書をとりつつ、気になった事、というより気がついたことがあつたので手を上げる。

「あ、はい。どうしました？もしかして解りにくかったりしました？」
明らかにうろたえる山田先生をほほえましく思いながら、気が付いたことについて聞いてみる。

「わからないというわけではないんですが、『国家の認証が』というところなんですが、このIS学園つてそのシステムを縮小していますよね？基本的運用は学園の許可が必要で、違反すると罰が与えられる。校則にありましたよね」

途端に、山田先生の表情がぱあつと笑顔になる。

「よく気がつきましたね！ええ。はい。そうですよ。IS学園における、ISの使用に関するシステムは、今説明していたところを、ほとんどそのまま使っています。これはですね、皆さんが今後、学園を卒業して世界の各地でISに関わっていく際に、常識的にこのシステムを理解できているようにという事で用いられています」

山田先生は手にしていた教科書を教卓に置くと、教室全体を見渡すようにして続けた。

「ISというものは、まだ歴史の浅いものです。皆さん、銃火器は所持したらいけないとか、麻薬は栽培から使用まで禁止されているとかは、当たり前前のように知っていますよね。ですけど、ISは皆さんが生まれた後にできたものです。つまり、当たり前前というにはまだ程遠いんです。かく言う私達教師陣も、ISに関しては、わからない事や覚え切れていないこともあつたりします。ですので、このシステムを

学園で日常的に運用することで、私達に慣らす。という側面もあります」

山田先生はにこりと笑うと、話の締めに入った。

「私達教師陣も学ぶ側です。皆さんに教えていくことで学んでいます。この教室に居る全員。この学園に居る全員が、これからのISという分野の担い手です。一緒に学んで成長していきましよう」

気が付いたら、俺を含めてクラスのほとんどが拍手していた。それほどすばらしい言葉だと思う。

「あ、あの！拍手なんてされたら照れちゃいますよ」

顔を真っ赤にして、わたわたとしている山田先生は、アレと比べて常識人なのだ、心に刻んだ。

何かあつたら、山田先生に相談しよう。

第04話

「ちよつと、よろしくて?」

二時間目の休み時間。先ほどの授業での山田先生の姿が、すばらしかったと、近くの席の女子達と話していたところで、いきなり声をかけられた。

ちなみに篠ノ之は、先刻の件もあつてか、元からの気質からか、机に座つて一人、だんまりを決め込んでいる。

まあいい。とにかく声をかけてきた相手に体ごと向きを変える。その相手は、金髪の素晴らしい女子だった。ちよつときつめにも思える、つりあがつたブルーの瞳でこちらを見下ろしていた。

なんで俺に声をかけてくる。『ヤカラ』は皆偉そうに見下ろすのかね。

しかもこの女子、金髪を下品でない程度にロールにしていることもあり、『高貴さ』をまとっている。そのせいで、見下ろしている姿が『いかにも』だ。

俺の嫌いなタイプど真ん中だよ。

「聴いてます?お返事は?」

「聴いてるが、どういう用件だ?」

俺の返事が気に食わなかったのだろう。目の前の女子は一瞬だけ、眉間にしわをよせると、わざとらしさを隠さない口調で声を上げた。

「まあ!なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、相応の態度というのがあるのではなくて?」

面倒な手合いが来たもんだ。

「オルコットさん。例えば貴方が海外旅行をした時に、不意に知らない男性から声をかけられて、『私に話しかけられてるんだ。光栄に思え』と言われたらどうする」

「なんですの?唐突に。そのような方がいたら一喝しますわ。あたりまえではないですか」

「その男が、その国の大統領だとしても?」

「なっ！そのような後付の条件、卑怯ですわ!!」

「世界各国のトップの顔なんて、今のご時世、テレビやネットで一度は誰でも目にしている。ISの代表候補生も似たようなものだ。むしろ、IS学園にいる人たちは皆、各国の代表に代表候補生の名前と顔を知っているさ。それこそ、どこぞの国のトップよりも確実だ。もちろん、あんたのことも知っているよ。セシリア・オルコット代表候補生。でもな。それでもなお言ってるよ。どういう用件だって。さっきの俺の質問だけだな、俺は相手が大統領だと知っても言ってるよ。どういう用件だってな。権力や地位を振りかざすようなやつは、人の上に立つ資格なんて無いと思ってるからな。尊敬のかけらも感じない。威風堂々とあることと、偉ぶるのは全然違うんだよ」

自身の言葉を無視して、こちらが話を進めるからか、話の内容に腹を立てているのか、オルコットは顔を真っ赤にして震えている。

「まあいいや。とにかく何の用だ?」

「っ。……くっ。ふん。まあいいですわ。男のあなたはISについてわからないこともあるでしょうから、どうしても言うのであれば、教えて差し上げてはよくってよ。あなたのような、出来のよろしくない方に施しをするのも、エリートを務めというものですから」

はあ。本当に面倒だなコイツ。

「結構だ。遠慮させてもらう」

「なっ?!このエリートのわたくしが直々に教えて差し上げると申していますのよー!」

「自己紹介のときに俺が言ったこと、もう忘れたのか?俺はココ、IS学園に興味ないんだよ。だから、出来なかつたら出来ないでかまわん」

「なっ?!」

オルコットが怒りで真っ赤になるのを、自分でもわかるくらい半眼になって眺める。自覚できるぐらいだから、周りの皆もわかってるだろう。

キーンコーンカーンコーン

オルコットが怒りに任せて言葉を吐き出そうとしたタイミングで

始業のチャイムが鳴る。

「つ………また後で来ますわ！逃げないことね！」

捨て台詞を吐くオルコットから視線を外し、さっきまで一緒に話していたクラスメイトに『わり』と短く謝罪を入れて、授業の準備に移った。

「この時間は、実践で使用する各種装備の特性について説明をする」

「織斑先生」が授業を行うようだ。山田先生は教室の前、窓側に椅子に座って聴く態勢だ。さっきの授業で言っていたように、「一緒に学ぶ」様だ。しっかりとノートをひぎに広げている。

「ああ。その前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る、代表者を決めないといけないな」

織斑先生が思い出したように言うと、手にしていた教科書を教卓に置いた。

本当にこの人は教師なのだろうか？最後のHRで決めるべきことだろう。そういったことは。

「クラス代表者とは言葉の通り、クラスの代表として動いてもらう者だ。ようはするにクラス長だな。対抗戦は、現時点での各クラスの実力を大まかに測るためのものだ。今の時点での差など、たいしたこと無いが、クラスの団結の一環と、クラスごとで競争による向上心を持たせるために行う。ちなみに一度決まると一年間変更は行われ無い。そのことを含めて決めろ」

教室中が色めき立つ。クラスの面倒を押し付けられるのだ。肉体的にも、精神的にも。けどまあ、ここで目立つことが出来れば将来の就職に有利だ。その上成績に加味されることもありうる。

「はいっ。織斑くんを推薦しますー！」

「私もそれが良いと思いますー！」

「はあ。今、俺推薦したの誰だよ……」

「では、候補者は織斑一夏……。他にはいないか？自薦他薦問わないぞ。……いないのか？いないなら無投票当選だぞ」

織斑先生の言葉に、反論しようと思ったところで、教室に甲高い声が響いた。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

机を叩くように立ち上がったのはオルコットだろう。振り返らなくてもわかる。

「そのような選出認められません！男がクラス代表だなんて屈辱を、このセシリア・オルコットに一年間味わえとおっしゃるんですか!？」
色々ヒートアップしてるなあ。

「わたくしはこの極東の僻地までIS技術の修練に来ているのであって、恥をさらすためや、屈辱を受けるために来ているではありません。ただでさえ、文化的に遅れの著しい島国で暮らすという屈辱を味わっているというのに――」

「それくらいにしたい方が良くないか？」

さすがにそろそろ止めたほうが良いと思っただ。織斑先生は止める気が無いのか、腕を組んだままだんまりだし、山田先生はおろおろとしている。

「それ以上色々言うと、まずいんじゃないか？」

「あなたですかっ！いったいなにがまずいとおっしゃるんですの？わたくしは事実を述べているだけですわ」

「ああ。うん。なんかカチンときた。とりあえず、俺がオルコットさんを推薦した上で、他薦されたことに関しては辞退するからさ。あとは好きにしなよ」

けどさ。優しく語りかけるように呟いて、続きを言ってやる。

「クラスからの応援は期待するなよ」

俺を含めてクラスのほとんどが白い目をオルコットに向けている。

当たり前だろう。クラスの9割は日本人なのだから。

「というわけで、クラスの代表は決まりました。まさか、自らやりたいという生徒の意思を無視して、やる気の無いものと決選投票とか言い出さないですよね？織斑先生」

何か言おうとしていた織斑先生を遮るように言い切る。これでこちらの意見を飲まないようなら、クラスの全員を敵に回すことになるのは理解しているだろう。

「いいだろう。クラス代表はオルコットだな」

第05話

友人のほとんどを失ったオルコットはさておき、授業は順調に経過した。

放課後、先ほどまで雑談していたクラスメイト達を見送って、帰宅の準備を始める。

ノートだけ持ち帰れば充分だろう。教科書まで持ち帰っていたらかばんがすぐにだめになる。

机の上に教科書をまとめて、その上に教科書だけ置いていく旨を書いたメモでも書いておけばいいだろう。

今日は見世物パンダの気分だった。休み時間や、昼休みの学食でクラスメイト達と談笑していた俺を、他のクラスや学年の女子（女子しかないが）が遠巻きに眺めて、こそこそと話していたからな。

「さて、と。来週から寮生活だから、今週中に食材使い切らないとな」俺の部屋の準備ができるのが来週らしいからな。それまでは自宅通学だ。それに、一人で暮らしたとはいえ食材は結構あるんだよな。ある程度は使ってあるんだが、使いきれない分がまだまだある。今週中に使い切れないだろう、バターなどを含めたいくつかは弾のところか数馬のところにも譲ればいいだろう。

さて、と。遅くなりすぎるまでに帰るか。

「織斑くん。よかった。まだ教室にいてくれて」

かばんを肩に引っ掛けた俺の目の前に現れたのは山田先生だった。急いできたのか、呼吸が整っていない。荒い呼吸に合わせて揺れる双丘は眼福の一言に尽きる。

ある程度整ってきた呼吸を、一気に沈めるために深呼吸をすると、双丘が下から上にブルンとゆれる。

「おお。すげえ」

「はい？どうかしましたか」

「いえいえ。なんでもありません。それで、なにかありましたか？」

ちよこんと首をかしげながら向けられる無垢な瞳に、顔をそらしながら話題（というか意識）もそらして、用件を聞く。

「えつとですね。織斑君の寮の部屋が決まりましたので、今日からそちらに入るようにということでした」

部屋番号の書かれた用紙と部屋のキーを差し出してきた。

IS学園は完全全寮制を取っている。IS学園に入れるということはエリートの特と言っても差し支えはないだろう。それに学園にはかなりの数の留学生がいる。そういった生徒達を、世界の後ろ側から守る目的もあるらしい。

俺に関してはもう少し複雑なんだが、簡単に言ってしまうえば、世界で唯一の男性IS操縦者をわが国に。という世界各国の勧誘を力ツトしたいんだろう。

だが、

「俺の部屋、まだ準備できてないから、一週間は自宅からの通学という話でしたが？」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的に寮の部屋割りを変更してでも寮に入れるということになったらしいです」

少し申し訳なさそうに言ってくるころから考えると、山田先生のあずかり知らぬところで決まったようだ。

「政府特命ということらしいんですけど、そのあたりのことって何か聞いてます」

ぱらぱらと残っているクラスメイトに聞こえないように、顔を寄せて聞いてきた。

ぎりぎり腕に当たる胸の感触に、役得と思いつながらも首を横に振る。

「むしろ一週間は家から通ってくれて言われてるんですけど。政府から」

国家から自宅通学を依頼される高校生。言葉だけ聞くと異常だな。

「専用の部屋ができるまでは政府が自宅警護するとか何とか。そつちのほういろいろと抑えやすいみたいで」

ニュースが流れた直後とかは、やれマスコミだ某国大使だと電話が鳴り捲って、極め付けにどこぞの遺伝子工学の研究所から『生体調査

させろ』と来たあたりで政府が専用の電話回線を通してくれた。

それ以外にも、入学までの生活を安全にできるようにいろいろと手配してくれているので、下手な保護施設より自宅のほうが安全だったりする。

「だったらいったいどういうことなんでしよう？」

首をかしげる山田先生に合わせて、俺も首をかしげる。と、

「なんだ、まだこんなところにいたのか。早く割り当てられた部屋に行かんか。私が政府に掛け合っただ。ありがたく思え」

なんてのたまいながら、織斑先生が教室に入ってきた。

「そもそも、この学園に入学した以上は必要以上の特別扱いは認めん。来週には個室ができるのだから、それまではこちらが用意した部屋に入れ」

そう言っただ俺の前にかばんを放り投げた。

「荷物は私がまとめてきてやった。これだけあれば十分だろう」

見覚えのある鞆だと思っただら、クローゼットの奥にしまっていたはずの“使わなくなった”鞆だ。溜息が出る。

「あなたは馬鹿ですか？」

「なに？」

「寮に入ると言うことはです。家を長期間空けると言うことですよ？今日の今日ですぐにその準備ができるわけないじゃないですか。あと一週間は自宅から通学するということだったので、それにあわせて食材の使用計画やガス水道電気といったライフラインの一時停止連絡。町内会への連絡や交番への定期見回りの依頼に警備会社への連絡とか、いろいろあるんですよ？ただでさえ馬鹿二人のせいで世界規模で有名になってしまったんですから、いきなり家に帰らなかつたら近所の方々が心配するに決まってるじゃないですか。あなたも年齢的にはいい大人のはずなんですからそれくらいは理解してください」怒りの表情を浮かべていた織斑先生も、これだけのことを一気に言われたらさすがに気圧されたのか、一歩下がった。

俺の横で山田先生がおろおろしているのが小動物的で心を癒してくれる。今度から織斑先生と話すときは山田先生の近くにしよう。

「さらに言わせてもらえば。俺の自室には鍵がかかっているはずなんです。どうやって俺の部屋の、さらに鍵のかかったクローゼットの奥にあった鞆を持ってこれるんですかね？知ってました？家族間であっても器物破損で訴訟起こすことって可能なんですよ。証拠と証言をそろえるのが面倒らしいですけど、織斑先生はその辺気にする必要なくらいありますからね。証拠と証言」

怒りか羞恥か顔を真っ赤にしている織斑先生を無視することにして、山田先生に告げた。

「政府のほうには俺が自分で連絡しておきますので、予定通り一週間は自宅からの通学ということだ」

第06話

あのダメ人間の「特別扱いはせん」発言の後、自宅通学すること10日。

そう、10日経ったわけだ。

あの日、自宅に帰ってから改めて入寮案内を読み返していて気がついたのだけど、IS学園の寮の売りのひとつに大浴場があるわけで。そのぶん個室はシャワー主体のやや小さめの浴槽付らしい。

女生徒が入るとしてのやや小さめだと、当然男の俺には小さすぎるわけだ。そりゃあ成人男性と比べたらまだ背は低いほうだろうが、3年間でまったく成長しないということはないだろう。そうになると、浴槽が小さすぎるんだ。さつきも言った気がするが、あえてもう一度言おう。浴槽が小さすぎるんだよ。

大浴場なんて使えるわけがないのは百も承知している。むしろ男子使用日なんて作られたひには泣くぞ俺は。気まずくて入れるかつ。

ということだ。山田先生に“その点を確認してみたところ(緊急用に携帯番号を聞いておいた。いつかデートにさs・・・) 教員側では男子使用日を作るつもりだったらしい。

もちろん全力を以てお断りさせていただいた。そして提案したが、大浴場を一切使わない代わりに自室の浴室を足が伸ばせる浴槽+広めの洗い場を作ってもらおう。というものだったのだ。

淡い期待と若干の諦めとともに翌日登校した俺の元に届いたのが「了承されました」の一言だった。

その代わりに部屋の工事が入るため、自宅通学が3日延びた次第だ。

そんなわけで、皆に遅れること10日。俺もIS学園寮に入寮を果たしたわけだ。

内装としては、デスクとベッドが一組になったことで空いたスペースにキッチンを移して、キッチンがもった場所をそのまま浴室が拡張された感じらしい。浴室には浴室乾燥機能が追加されていたので、俺の洗濯はここで干してほしいということだろう。主に下着類。

ちなみになんで入ったこともないほかの部屋との内装の比較ができるかというのだ。のほほんさん谷本さん夜竹さんの3人が押しかけて部屋を物色してるからなわけだ。

「おー。キッチンがこつちだ」

「あ、ホントだ。そのぶんお風呂ひろーい」

「いや、広すぎない？ 私この浴槽だと沈んじやうかも」

「俺が足伸ばしてゆっくり入れるサイズって頼んだからなあ。女の子には確かに大きいかもなあ」

「いいなあ。おりむー。私たちのお風呂はもつとちいさいよお」

「まあけど、大浴場使えないからなあ。俺」

「あれ？ そうなの？ 織斑君も使えばいいのに。男子使用日とか決めてさ」

「勘弁してくれ。気まず過ぎるって。それに『男が使ったお湯になんて浸かれませんか』とか『私たちが浸かったお湯に男子が浸かるなんて許せません』とかいうやつ絶対いるだろ？」

「あー」

「あー」

「あー」

どこぞの阿呆がISなんて作ったせいで今の世の中は女尊男卑だ。とくにこのIS学園はそのパイロットを育成する場所なわけで、そういうった思想が少なからずある。

「私たちはそうでもないんだけどね」

「うちのクラスだと、ほら」

「オルコットさんが・・・ね」

「あいつは絶対に言うな。いや、そもそもイギリスって大衆浴場ってあるのか？ 『何で私が極東の下等な文化に則って日本人ごときに高貴な肌をさらさないといけないんですの』とか言い出しそうじゃね？」

「言うわね」

「言うね」

「おりむー。今のちよつと似てた」

「この話題はやめよう。心が寒くなる。夕食までに俺、荷物片付ける

けど、3人とも部屋戻るか？」

「手伝おつかあ」

「よし。そのにやけた顔を引き締めてから出直して来い」

「えー。織斑君の服のセンスとか気になるー」

「面白いものとかなくいく？」

「はいはい。どっちもまた今度なー。そのうちみんなで遊びいこーぜ」

「お？両手に花どころかハーレム？」

「集団デート？ちよつといいかも」

「おりむくにデート誘われちゃった」

「おう。デートだ。デート。ハーレムだっていいじゃないか。だって男の子だもん」

「そこまで開き直られると、いつそすがすがしいね。楽しみにしてるねー」

「また夕食のときにねー」

「またねー」

「おう。あとでなー」

わーわーきやーきやー盛り上がっていた三人（俺の荷物開封だけは阻止した）が帰っていき、一息ついてから荷物を開け始める。といっても、衣類に勉強道具、趣味雑品まとめて大き目のバッグひとつにダンボール2つだ。そんなに多くはない。30分と経たずに片付け終わり、ダンボールを保管しておくか少し悩んでから捨てることにする。3年間はこの部屋だ。3年後にまた改めて用意すればいい。

寮裏のごみの分別倉庫にダンボールを放り込みに行き、風呂をセツトして食堂に向かう。

クラスのみんなど盛り上がりながら夕食を済ませ、風呂に浸かる。

ああ、明日から放課後に起動実験があるんだっけか……。

また忙しくなるなあ……。まあ、なんとかなるか……。

新しい部屋の新しい浴槽に張った一番最初の湯船の中で、疲れと不安がゆっくりと解けていった

第07話

で、だ。起動実験となったわけなんだが。

この大騒ぎ、なによ。

「記録装置は精密型もってこいって言っただろ！」

「リヴァイヴからだ。打鉄は後回しだから、第二に置いておけ」

「時間が限られてるんだ！どっちもフェイズ4までを超精密でいくぞ！」

「外との回線を完全に遮断だ！絶対に情報を外に漏らすな！」

いや、まあ。わからなくもないけどさ。声を張り上げてる内の8割が女技師ってどうよ？そこらの男よりこええよ。

ってか、簡単な説明聞いた限りだと、フェイズひとつにつき1時間って言った気がするんだが、4までつてことは4時間だよな。飯食う時間あるのか？なかったら次からボイコットするぞ。マジで。

結論から言おう。次からボイコットな。

1万歩譲って飯抜きはいいとしよう。休憩なしってどういうことよ。あいつらフェイズごとに3班に分かれて、データ取り、解析、休憩に分かれてたの知ってんぞ。休憩班が飯食ってたのも。

実験が17時半スタートで、今が22時。4時間半だよ。食堂20時半までだよ。飯抜けてるか。

しかも明日の実験までに今日の実験の詳細なレポートを出せとか言ってくる。普通に授業があるのわかってんのかね？飯抜いた上に睡眠時間削るとか、ふざけんな。

部屋に戻る道すがら、山田先生に電話をかけ、起動実験班への苦情と明日の実験のボイコット、レポートの放棄を告げる。

こちらが悪いことをしている気になるくらいの謝罪の言葉。人間

出来すぎじゃね？ウチの千冬（アレ）と大違いだ。

お互いにねぎらいの言葉をかけて電話を切ると、部屋の前に着いた。

コンコンコン

「はいは〜い」

軽い返事とともに部屋の主、のほほんさんが出てきた。けど・・・
「きつね?」

パジャマ?きぐるみ?きつね姿だよ。狐じゃなくて『きつね』って
感じた。

「あれ?おりむくだ。どうしたの?」

「いや、飯食い損ねちまってさ。お菓子とかでもいいから、ストック
あったら分けてもらおうかと思って」

「ん〜。おつけ〜。おつけ〜。でもおりむく、部屋にキッチンあった
よね?つくらないの?」

「寮に入ったの昨日だけ。食材買ってね〜。次の休みまで食堂で済む
と思ってたし。休みに買い出し行くつもりではあったけど、ここの食
堂うまいから、基本食堂のつもりだったしなあ」

いや、まじでうまいのよ食堂。おばちゃんすげえ。

「確かにおいし〜よね〜。ま〜入りたまえ〜。はらぺこおりむくに
いものをあげよ〜」

「いや、同室の子の許可とかいいのか?」

「きにしないでおつけ〜。かんちゃん、今しゅーちゅーしてて他のこ
とまったく聞こえないから」

それはそれでいいのか?とか思うけど、ルームメイトののほほんさ
んがいいって言うしな。

「それじゃあ、おじやまします」

「ど〜ぞ、ど〜ぞ」

部屋に入るとそこには たぬき がいました。

たぬきぱじやまの女子がデスクでキーボードをものすごい速さで
たたいてる。一瞬自分の目がおかしくなったのかと思ったが、見間違
いじゃなかったらしい。

「かんちゃん。ともだちきた〜」

「ん。騒がしくなければいい」

こつちには視線のひとつも向けねえ。

「え〜つと〜。あつたあつた。はい、おりむ〜」

「うおつ。カップ焼きそばじゃん。しかも2倍サイズ。のほほんさんこれ普段食べ切れるのか?」

「むりー。この間かんちゃんと一個ずつ買ってきたんだけど、二人で一個食べて、いっぱいいっぱいだったよ〜。だからおりむ〜。処理よろしく〜」

「いやありがてえ。今日はちよつと腹減り具合がきつくてさ」

「おりむ〜実習の後はたくさん食べてるよね〜」

「成長期の男子にはアレが普通だって。それに食堂のメニューって女子用サイズだから少なめだし」

「やっぱりおとこのこにはすくないのか〜」

「正直、定食3つ頼もうか迷うことがある」

「おおう。それはすごいね〜。そだ。ここで食べてく?」

「いや、先に風呂入りたいから、部屋に戻るよ」

汗拭きシートで拭いてるとはいえ、気持ち悪い。さっぱりしたい。

「すんすん。そんなにきにならないけどね〜」

俺の胸元に鼻を寄せて、そうのたまった。やめい。はずかしい。

「うら若い乙女が男の汗なんて嗅ぐもんじゃありません」

「は〜い。はんせー」

「よし。じゃ、ありがとな」

「きにしない。じゃあ、あした〜」

「おう、おやすみー」

かんちゃん? たぬきにも目礼してから、のほほんさんの部屋をでる。

自分の部屋に戻ると、予約給湯でしつかりと風呂が沸いてた。

これが自宅だったら、水道代とかガス代とか気にしてシャワーで済ますところだが、その辺は気にしないでいいので、気兼ねなんてせず

に、毎日湯を張っている。

風呂上りにヤカンで湯を沸かしながら、授業の課題を消化する。課題といっても、次の授業の範囲のテキストを読んでくることだけだ。一度でも読んでいるかどうかで授業の理解スピードが変わるらしい。途中で湯が沸いたので、焼きそばに湯を入れ、5分待つ間に残りを読みきる。

それじゃあ

いただきます

第08話

週末。事前に各所に申請を通して得ていた外出許可でもって学園を出る。

学園側と、外での護衛を手配してくれる政府と、山田先生になるので、各所といってよかったか悩むが。

まあ、とにかく朝一から学園を出て地元に向かう。家には行かないけど。

開店準備中の五反田食堂に声をかけて入り、そのまま2階の弾の部屋に押し入る。

ゴンツ

「なつ、なんだあ?」

ベッドのふちを蹴ると、弾が飛び起きた。さすがに直接蹴りはしない。

「よお。おはようさん」

「んあ?一夏かよ。来るとは言ってたが早くねえか?何時だよ。…ちつ、9時過ぎたばっかじゃねえか」

「休日にアレと遭遇したくなかったからな。早々に出てきたんだよ」

「ああ。千冬さん(アレ)ね。まあいいや。朝飯まだだろ?食ってけよ」

「おう。そのつもりでさつき下で頼んで来た。先に下行ってるぜ」

「顔洗ったらいくよ」

蔵さんの作った朝飯を平らげて弾の部屋に戻る。蓮さんと蘭は買い物に出かけているらしい。

「飯食ってすぐだらけると体によくない」なんていいながらも、二人ともだらけて動こうとはしない。

「そーいやよお。一夏」

「ん？」

「結局IS学園に通い続けるのかよ。IS興味ないんだろ？」

「興味はないさ。けど、逃げ道ないしなあ。現状世界で一人しかいないんだぜ。男で動かせるの」

「まあ、世界の3分の2はお前のこと知ってるって言ってもいいしなあ」
「まっとうなところはともかく、『解剖してすべての男が動かせるように』とか考えるところ絶対あるぞ」

「ありそうだなあ」

実際、発覚直後にそういった電話が腐るほどかかってきたが。途中からかかってこなくなったのは政府が何とかしたらしい。

「IS学園に通ってる限りは安全を保障してくれるからな。逆に考えれば、通わなかったら安全ないって」

しかも狙ってくる筆頭が日本政府になるって特典付きだろうしなあ

「おっそろしいなあ」

「ホント、あの災害兎のせいで、ろくなことにならないな」

兎だけじゃなくて一家揃ってろくでもないからなあ。

「言っても仕方ねえだろ。で、今日は『アレ』見てくか？」

「いや、買い物行かないといけないし、やめとくよ。弾は昼から行くだろ？数馬によろしく言っといてくれ」

「そーいや、寮だもんなあ。女子も同じ寮なんだろう？うらやましい限りだ」

「眼福だぞ。俺以外みんな女子だからな。ガードが甘い。夕食に食堂行くとさ、風呂上りのラフな格好ばっかだよ。ノーブラキヤミ一枚とかわんさかだ」

しかも下はホットパンツとか『ぎら』だ。誘ってんのかってんだ。

「どこの桃源郷だ。代われ」

「代わろうか？」

代われるもんなら代わってやる。いや、マジで。

「・・・やめとく。いろんな意味で死にたくねえ」

「そうしとけ。学祭の入場チケットやるから」

「楽しみにしとくさ」

「あと、クラスの子と遊びに行くときに呼んでやるよ。ってか、来い。デート以外は複数人で行くはずだから、男一人はつらい」

「デートって、おい。学校始まって一月経ってねえのに、もうそんな子いるのかよ。くっそ、うらやましいぜ」

「まだいねえよ。そのうち作るさ」

「ああ。ちくしょう。うらやましい。代わりたかねえけど。つといけね。お袋たち出てっから店手伝わねえと。もう昼時だ。一夏、お前も手伝ってけよ。んで昼まで食ってから行けばいいだろ」

ああ、昼の仕込みの追い上げか。飯代浮かしてくか。

「飯以外にバイト代出るんだろうな」

冗談を飛ばしながら、弾のシャツを借りて着替える。

「半月ぶりだが、腕鈍ってないだろうな」

「半月で鈍るほどやわな鍛えられ方してねえよ。厳さんなめんな」
「知ってるよ。毎日絞られてんだ」

んじゃ、ちっと頑張るかね。

第09話

「で、ですからね・・・」

「お断りします」

涙目の山田先生の要求を即座に拒否する。涙目十上目使いで困ったようにこちらを見上げる山田先生に心が揺れる。この人二十歳超えてるのに可愛すぎじゃね？

「断られてもどうしようもないんですよ。私も決定を伝えられただけなんですし」

「ちっ。あの兎め。失礼しました先生。専用機支給の件、了解しました」

「ああ、よかったあ。今回の決定は政府勅令だったので、寮のときのように無理が通せなくって」

いや、寮の件では無理言ったからなあ。確かに。

「あ、やっぱり寮の件はアレの独断だったんですね」

「え、ええと。は、はい。織斑先生の独断だったので。内装に関しては学園内のことでしたので、上層部に掛け合う形でした。経営陣の男性方から賛同を得られたので、内装案がすべて通りました」

「その節はお世話になりました。ええ、ホントに」

腰を折って頭を下げる。

「い、いえ、そんな、生徒のために動くのが教師なんですし・・・」

身長差と互いの距離から、視線がちょうど谷間に行く。いつも思うのだが、先生の服装、胸元開きすぎじゃね？先生が小顔つてこともあるが、胸と顔のサイズが同じだよ。禁断のパフパフしたら乳圧すごそうだ。

きつちり20秒谷間を凝視してから顔を上げる。

「あつ。そうでした。織斑君にこれを渡しておきますね。予備を含めて3着、特注の男性用スーツです」

山田先生が小脇に抱えていた紙袋をそのまま渡してくれた。覗き込んでみると、黒い若干光沢のある服が入ったビニール袋が3つ。後で試着しておこう。

「制服のときの採寸を基に作られてるらしいのでサイズに問題ないとは思いますが、今日中に袖を通してみてください。不備があるようでしたら明日のうちに私までお願いします。でないと来週から始まる実習に間に合いませんから」

「わかりました。この後部屋に戻って着てみます」

軽く頭を下げて踵を返す。そういえば……

「そうだ先生。昨日食材も買ってきたので、日ごろのお礼も兼ねてご馳走しますよ」

「え、えええ。そ、そんな、教師が生徒にご馳走されるなんて……」
「それに、織斑先生（アレ）がかなり迷惑かけてるみたいですし」

あんな性格でまともに教職が勤まるとは思えないしな。

「そ、それはまあ……。あつ！あの、いえ、そ、そんなことはありませんよ。ホントですよ」

「そういうことにおきます。先生にも立場があるでしょうし。その辺も含めて、感謝の印ということで。詳しい日取りはメールしますので」

優柔不断気味の山田先生に一方的に言い切る。こう強気に出ると先生の性格的に……

「え……。っと。それじゃあ。ご馳走になりますね」

断れない、と。

「それでは失礼します」

真つ赤になって悶えてる山田先生を置いて、早々に部屋に戻ることにする。さすがに先生が想像してるだろう事態に発展はさせないぞ。ちよつと心惹かれるけど。

で、スーツを早速着てみたんだが、デザイン的にはアレだ。二昔くらい前に水泳選手たちが着てた全身タイプの水着。上は首、二の腕の真ん中。下は太ももの真ん中まであるやつ。

とりあえず最大の問題は、だ。

二人で着れねえよ。ジッパ―背中に付けんなよ。女子に背中丸出し

で『ジッパー上げてくれ』とかやったら、俺の人生終わるつての。社会的に」

上半身下半身で分けて、伸縮性の高い素材だったら首も通るか？
「あと、これだな。股間。セーフティーカップ。履くやつじゃなくて、こいつにセットできるようにしてもらおう。カップまで洗うと、手間が増える」

カップ無しで履いたら、それでも俺が社会的に死ぬ。女子のスーツとか見た目スク水じゃねえかよ。しかもタチ悪いことに水着よりも素材薄くてびっちりしてやがるし。そんな中でガチ反応どころか、少しでも反応しようものなら、これから3年間俺の立場がなくなる。

「カップで少しでも隠さないとな。どこまで隠せるか、そっちがある意味最大の問題かもなあ」

口頭で伝えたら確実に山田先生がりんご色を超えて赤くなるだろうから、レポートにして提出しよう。

ちくしょう。世界唯一つて、やっぱ不便だぜ。

第10話

買ってきた食材を片付けて、目的のものを袋に移し変えて部屋を出る。自分の部屋から少し離れた目的の部屋のドアを叩く。

「いないのか？」

念のためにもう一度ドアを叩こうと思ったときに、横から声をかけられた。

「・・・何の用？」

のほほんさんに『かんちゃん』と呼ばれていた女子だ。

「のほほんさんに用があつて来たんだけど、反応なかったから一応もう一回だけノックしてから戻ろうかなって思つてな」

「本音ならもうすぐ戻ってくるから、中で待って」

「いや、出直してくるよ」

「私が聞きたいことがあるから、本音が戻ってくるまで付き合つて」

眼鏡越しに何かしらの決意を感じたので、とりあえずうなずいて、部屋について入る。

「そこ座つて。飲み物入れてくる」

かんちゃんの机の椅子を指されたので、おとなしく座る。いろいろと押され気味な気がする。いや、気がするんじゃないやなくて押されてるな。

戻ってきたかんちゃんに渡されたグラスに口をつける。程よく冷えた緑茶だ。

「更識簪。はじめまして」

なるほど、簪（かんざし）だから『かんちゃん』なわけだ。

「ああ、どうも。俺は」

「知ってる」

「いや、相手が知つててもちゃんと挨拶するのが礼儀だろう？というわけで、織斑一夏です」

「確かに礼儀は大切だね。早速で悪いけど、聞きたい事があるの」

「おう。おれに答えられることならな」

「優秀な姉を持つとストレスたまらない？」

は？

「聞きたいことってそれ？」

「私にも姉がいる。ここの生徒会長」

……って

「IS学園の？」

「そう。そのうえロシアの国家代表。あと、更識家現当主」

「なにそのいんちきスペック」

「あなたの姉も負けてないと思うけど」

「まあ、肩書きだけ見ればなあ。でも、いろいろと駄目だぞ。アレ」

「噂は耳にした。生活能力皆無だって。だからあなたに聞きたい。ス

トレスどうやって発散させてたのか」

「ああ、ってことはそっちの姉もアレなんだ」

そう聞いたら、簪のストッパーが壊れた。

「自己中心的過ぎる。昔からそう。何でもできるから勝手に許されて、そのくせ変にシスコンで過保護だから、私のことまで手を出して私に何もさせないし、挙句が『あなたは何もなくていいのよ』って。冗談じゃない。私の人生は私のだ。勝手に決めないでよ。確かに私は姉のように何でもできないけど、努力してるし、結果も少しずつ出てきてるのに。私はベッド脇に飾られてるお人形じゃない。距離をとろうとしてもチラチラチラこっちの様子を見に来て。私はあなたの娘じゃない。むしろ娘だったらもっと早くにぐれてる」

簪が、自分のグラスの緑茶を一気に呷った。

ってか、ほとんど一息で今の言い切ったよ。

「しかも、生徒会長の癖に仕事を放り出して私の様子見に来るから、仕事が滞るって虚さんがこぼすし、思いつきでイベントやったりして被害を被ったって先輩たちから、入学早々言われるし、私関係ないじゃない。本人に言ってよ。私悪くないじゃない。間接的にも迷惑かけないでよ。私、この春から専用機的设计で忙しいんだから。余計なことに時間を取らせないでよ。真面目にやったら誰にも迷惑かけないんだから。おとなしくしててよ。皺寄せが私に来てるんだって」

「はい。飲むか」

「ありがと」

俺の分の緑茶まで一気に飲み干して、深く息を吐いた。

「ごめんなさい。なんか箸がはずれて」

「いいって。少しすつきりしたろ？おれもダチに愚痴言いまくったからな」

ホントにその辺のことに關しては弾たちに助けられたからな。

「確かに少しすつきりした・・・かな？」

「だろ？愚痴を溜め込みすぎてつらくなったら、吐き出せばいいんだよ。吐き出し方だって、今みたいにぶちまけてもいいし、カラオケで叫んでもいいし、ボーリングとかのスポーツでもいいしな」

「そうす・・・。友達作るころからだ。先輩たちへの対応と、専用機作りに追われてクラスに馴染めてる自信がない」

さつきまでの勢いが嘘かのごとく沈んでる。クラスでボツチなのかよ。

「何言つてんだ。俺たちもうダチじゃんか。同じ悩みを持つさ」

能力だけは優秀な姉を持って苦労する仲間が見つかると思っても見なかったけど。

「とも・・・だち。いいの？」

何この上目遣いの可愛い生き物。この子の姉がシスコンになるのもわかる気がする。過保護はどうかと思うが。

「おう。よろしくな。簪」

「よろしく。織斑君」

「一夏でいいって」

「うん。一夏」

「あ、そうだ。のほほんさんに返そうと思ってた分だけ。この間カップ焼きそば分けてもらったからお札に買ってきた」

「カップ春雨？焼きそばって、あのおっきいの？」

「そうそう。それ」

「アレが無くなってるのが気が付かなかった。いつの話？」
「簪がたぬきだった日」

瞬間、簪の顔が沸騰した。あれはのほほんさんの趣味らしい。

第11話

IS学園の授業カリキュラムにおいて、通常学科とIS学科の比率は3:7のようだ。

まあ、「IS」学園って言うからには当然の比率なんだろう。けど驚いたことがある。史学についてだ。

IS学園では歴史の授業がない。日本史も世界史もない。理由は言わずもがな。歴史の解釈って国によって違うんだよな。世界各国から生徒を集めてるから、歴史解釈でもめないための措置らしい。

どうしても学びたい生徒は、週一の自由学習の時間に、通信授業を受けるようにとされている。

ああ、そうそう。語学の授業は英語と日本語の選択制になっている。ISを作った天災兎が日本人ということもあり、IS業界における公用語が日本語で定められている。英語は国際公用語だ。IS業界で生きるということは世界規模の業界で生きるということだ、当然必要となる。

で、選択制ということは、授業として時間を取れるのは片方だけということ、英語圏と日本語圏の生徒は問題ないが、それ以外の言語圏の生徒は問題ありあり。たまったもんじゃない。授業で使われる言語は日本語なので、入学前に最低限の日本語は学んでくるが、その最低限とはISに関することだけという生徒も少なくない。

話を戻そう。IS学園では通常学科の比率が少ない。つまりはIS業界に進む気がない俺としては問題山ありなわけで。大学に進めるかどうかはわからないが、受験するつもりなら自分で何とかするしかないわけだ。

「というわけですね。彼の特別授業といますか、補習といますか。IS学園ではやらないところのカリキュラムを組んでほしいんです。お願いします。エドワース先生」

山田先生と一緒に頭を下げる。

事の発端は一時間前。

「えっ?」

「ですから、初日の自己紹介のときにも言ったように、ISに関わる気はないんです。ですので、できれば進学も視野に入れておきたいんです。情勢的にといいますか、政治的にIS業界から離れられるかはわからないんですけど、だからといって最初からあきらめたくはないんです」

「言いたいことはわかります。けどですね」

「ISにおける最高の称号『ブリュンヒルデ』の弟というのはどこまでいってもなくなりません。俺があこのウサギに気に入られている事実も変わりません。そのせいでISから逃げられない可能性が高いのはわかっているんです。それでもやりたいことがあります。それをあきらめたくはありません。あきらめられません」

「織斑君…」

頭を下げた俺に山田先生が言葉をかけようとして、ためらってを繰り返しているのがわかる。

「私はIS学園の教師です。本当なら織斑君をたしなめてIS業界に進むように説得するのが正しいのかもしれませんが。ですけど、私は教師です。教師なんです。織斑君の進む道を手助けするのも教師の務めです。ですが、私は日本の代表候補生だったことを買われて、最低限の特別カリキュラムを受けて此処の教職につきました。ですので、私はIS業界以外に進む生徒の対応に関しては経験があまりありません」

普段のおどおどした雰囲気はなく、しっかりと話す山田先生の言葉を、顔を上げてしっかりと聴く。

「ですので、わかる人をお願いしましょう」

それで山田先生と一緒に来たのが、エドワーズ・フランシイ先生のところだったというわけで。

「……わかりました。進学に関しての資料と数学に関しては私が見ましょう。それ以外の教科に關しても私が先生方をお願いしておきます。課題は毎週月曜に織斑君の部屋の端末に送ります。土曜の夜、できれば金曜の夜までに各担当の教員にデータを送ってください。出来具合を見て翌週の課題を決めましょう」

「えっと、他の先生方の手配もできてないのにそこまで決めて大丈夫ですか？」

「純粹に疑問に思ったんで聞いてみる。そのやり方は駄目だって言う先生もいるんじゃないか？」

「直接指導をしたいという教員もいるでしょうが、織斑先生には知られると面倒なのでしょうか？そのための手段ということですよ」

「……ありがとうございます」

「いえ、山田先生の前で言うのもなんですが、織斑先生の指導方法に不満を持つ教員もいるということですよ」

「それはっ。あのっ。えっとお……」

「山田先生もその辺は知っていたらしくうろたえてはいるけど、反論はしないらしい。」

「やっぱり職場でもやらかしてるんですね、アレ」

「織斑先生の教え方と言いますか、教育方針で育つ先は軍人です。学園は軍人を作る場所ではなく、IS 関連技能取得者を育成する学校です。パイロットになる者もいれば整備士になる者、開発に進む者もいます。叩く。恫喝する。支配する。そんなやり方は教師として容認できません」

「それは……、おっしやるとおりなんですけど……」

「山田先生は代表候補生時代にお世話になったことや目標としていたこともあって、織斑先生よりなのは知っていますよ、一般教科担当教員からのウケはかなりよくないですよ。織斑先生」

「ああやっぱり。としか言えないわー。俺もアレが教員やってるって知ったときは、何の冗談かと思ったからな。」

「もしかしなくても派閥とかって出来てたりします？」

「織斑派。反織斑派。中立派。この辺が存在することは否定しませ

ん」

「ええっ？派閥ってあったんですか？」

「こんな感じなので、山田先生は個人的に織斑先生を慕っている中立派という認識です」

確かに派閥争いとかとは無縁そうだもんなあ。ホント癒しキャラすぎる。

「大変ですね。教員も」

「原因は君の姉なのだけれどね」

「アレを家族と認めるのは不本意極まりないことです」

「大変ね。君も」

「お互い様というやつですね」

そう言っ二人で軽く笑いあう。

「派閥だなんて、でも、えええ。私どうしたら……」

しゃがみこんで頭を抱える山田先生。可愛すぎじゃね？

山田先生はやっぱり癒しだなあ。

第12話

四月最終週日曜日。午前。五反田食堂。

弾と蘭は前日から友人宅に泊まりに行かせてるそうで、夜までは絶対に戻るなど言い含めてあるらしい。厳さんは一番離れたテーブルに座り、水を飲みながらいつも以上に険しい顔をしている。

蓮さんはいわゆるお誕生日席に座り、いまだかつて見たことのない険しい顔だ。威圧感がハンパない。

「単刀直入にいきましょう。織斑千冬さん。一夏君の保護責任者としての責務を果たしていると認められませんので、以前に取り交わした通り、五反田蓮さんに保護責任者を変更していただきます」

隣に座る弁護士の伊達さんが何枚かの書類を、向かいに座る織斑先生に差し出した。覗き見る限り、保護責任者変更に関する手続き書類と、蓮さんと織斑先生の署名入りの誓約書のようなようだ。

ざつと読んだところ、保護責任者を織斑千冬に変更するが、その責務が果たされないようなことがあれば、五反田蓮に保護責任者を戻す。ということらしい。

「私はきちんと責任を果たしていたはずですよ」

ええー。

いや、ええー。よく言えるなそんなこと。

「織斑千冬さん。あなたは三年前に私と五反田蓮さんの三人で話し合いをしたときに『一夏君の保護管理は出来るのか』という問いかけに、『大丈夫です』と答えましたね。ですが、この三年であなたが帰宅された日数を把握されていますか？五十日もないんですよ。しかも丸一年ドイツに向かわれて、一度も帰国されていない」

実際は四十日にもぎりぎり届いてないんだけどな。

「さらに、生活費すら渡していませんね」

「生活費はちゃんと振り込んでいた」

「行政からの給付金の受け取りをあなたの口座にしたまま、通帳その他をもつてドイツに向かわれてるでしょう？こちらで受け取りを五反田さんに変更するまでの間、一夏君は自身で貯蓄していた小遣いを

切り崩して生活していました。一夏君が家計簿を詳細に記してくれていましたが、一般的な男子中学生の食事を下回る食生活です。さらに言うなら家事をすべてこなしています。足りない食事で学業をこなす、家事すべてをこなす。これのどこに中学生らしさがあるんですか」

さらに趣味の時間を入れると、ねえ。

「そもそも、未成年者をひとりで生活させるような人間を保護責任を果たしている者とは判断できません」

「わ、私にも都合がある！」

あ、それは駄目だわ。

「千冬さん」

蓮さんが口を開いたが、怖すぎる。伊達さんの顔が一瞬引きつったよ。

「子供を育てるって言うことはね。その子の人生を決める十数年間の責任を負うということよ。勉学の道、運動の道、芸術の道。どういう人生を歩んでいくのかを決める時間を守ってあげるの。生半可な気持ちでなんていられないのよ。自分の都合なんて、それこそ二の次なくらいに。なんでかわかる？子供が大事だからよ。自分の都合がと言ってる時点で駄目なのよ」

「で、ですがっ」

蓮さんの正論に織斑先生は反論しようと声を上げる。反論の余地ねえだろ。

「三年前ね。あなたが、頑張ります。って言ったときに、成長したんだって嬉しかったのよ。あなた達姉弟の保護責任者かってた時、あなたの大人を信じられないといわんばかりの目を思い返して、本当に嬉しかったわ。それこそ自分の子供のように。それがこんなことになって、本当に残念よ。こんな誓約書なんて必要ないと思ってたのに」

蓮さんが悲しむような、哀れむような、そんな目で織斑先生を見る。

「千冬嬢ちゃんよお。今の蓮の言葉に、おまえさんが反論できるわけねえんだよ。それがわかってねえ時点で、おまえさんは駄目だな。」

ガツコのセンスになったんだってなあ。御国の作ったガツコらしいじゃねえか。よくやったよ。あんなマセたがきんちよだったのがよお。成功したじゃねえか。でもよ、親になるにはまだ若造過ぎるわ。いろいろと足んねえよ」

巖さんが織斑先生の横に立った。

「とつととサインして、保護者ごっこを終わりにしな。そんでよお。もつと人生学んでこいや」

織斑先生は項垂れて、伊達さんの示すがままに書類にサインをしていく。

蓮さんが視線で、何か伝えるかと促してくる。

目を閉じていろいろ考える。今までのいろいろ。

「それでは、失礼します」

席を立つ織斑先生に、声を、かける。

「千冬姉え。小さい頃、本当に小さい頃、大切にしてくれたのは、ありがとな。そして、さよならだ」

「ああ。さよなら一夏。こんなでも愛していたぞ」

これで俺らは織斑姉弟じゃなく、織斑千冬と織斑一夏の個人と個人なわけだ。俺が望んでこうしたわけだけどさ、なんか重いな。ホントに重てえ。

「一夏君。後は私達がやっておくから、今日はもう帰りなさい。どこか散歩でもして、気でも晴らしてから」

三人に頭を下げてから店を出る。出しなに巖さんにポンと叩かれた肩が、暖かかった。

第13話

さて、怒涛の四月が終わって、五月の一日。今日も今日とて授業が続く。

そういえば今日、隣の二組に転入生が来たらしい。けどこの場合って、転入生と言うよりも入学してたけど諸事情で学校入りが遅れた、プチ休学扱いなんじゃね？

まあ誰が来たのかは本人から聞いてるから、当然知ってるけどさ。挨拶は向こうから顔見せに来るだろ。後攻よりも先攻って感じだな。

つと、考え事してたら授業が終わっちまった。一般科目は特別授業のおかげで先を進み始めたからな。授業が楽だ。

「一夏く？いるく？」

本当にソツコー来たよ。しかも休憩時間が少し長い二限目終了後に。

「なんだ。背え伸びたとか言ってた割りに伸びてないじゃねえか。ミニマム過ぎて、氣い張ってないと見失いそうだ」

「はんつ。あんたがムダに伸びただけでしょ。脳みそ使ってないから余ったカロリーの分だけ背が伸びたんじゃないの」

睨み合うようにして黙る。クラスのみんながハラハラした様子で見守っている。

ぱあんつ

ハイタッチをして笑う。

「相つ変わらねえく。その毒舌聞くと、ホントに日本に帰ってきたって感じるわ」

「一年ぶりだっけか？なんかもつと会ってなかった気がするが。けどマジでそんなに伸びてねえな。相変わらず一年で数センチしか伸びてねえの？」

「そうなのよね。食事もちゃんとして運動も欠かしてないし、睡眠時間もしっかりとってるのよ。なのに毎年数センチだけ。けど、小さい頃からずっと同じように伸びてるから成長が止まるだろう二十歳までは伸びるわよ」

「二十歳頃までコンスタントに伸びれば、二十歳の頃には小柄ですむくらいには伸びるな」

「もうちよつと伸びてほしいけどね」

「いや。この感じ懐かしいなあ。」

「おりむく。その人、ともだち……で、いいの？」

「ん？ああ悪い悪い。驚かせたな。小中のときの幼馴染で……」

挨拶を促してやる。

「凰鈴音（ファンリンイン）よ。呼びにくいでしょ？リンでいいわよ。」

一夏とは幼馴染でダチよ」

仁王立ちで少し胸を張って宣言した。そのフレーズ好きだなあ。

「ダチ？」

クラスメイトの誰かが呟いた。

「そ、ダチ。あ、先に言つとくけど、恋愛感情はないわよ。とつくにフられてるし」

爆弾投下してんじやねえ……！

慌てて耳を塞ぐ。横で鈴も耳を塞いだ。

『えええええ……！?!』

クラスで大絶叫。そして自分達の絶叫で耳を押さええて蹲る。なんと言う自爆。

「ああ。大丈夫？アンタたち」

鈴が気まずそうに声をかけてる。まあ原因コイツだしな。

「鈴とは惚れた腫れたの関係じゃなくて、歳いってからも『よう』って声掛け合えるような、そういうった関係なんだよ。俺にとつちや。だから、ダチ」

「ある意味恋人よりもすごい関係じゃない？まあ、フラれたときは本

気で泣いたけど。これでもかかってくらい泣いたけど。泣きすぎて声が枯れるくらい泣いたけど」

「中学入ってすぐくらいだったろ？もう三年も前なんだな」

「あたしからしたらまだ三年よ。もっと昔かと思っただわ」

つと、気がついたらまた鈴と二人で話し込んだしまった。

「つつーわけで、幼馴染兼ダチってわけだ」

「アタシが去年一年中国に行ってたから、久しぶりに会ったってわけよ。今年の頭まではメールでやり取りしてたんだけど」

「どく？」

のほほんさんが気がついたら鈴の目の前の席を陣取ってた。いつ移動したし。

「コイツがIS動かしたもんだから、保護もかねて海外からの回線すべて押さえられたみたいで連絡つかなくなってたのよ」

「まあそれまでのやり取りでISパイロットになったことは知ってたから、学園に来ると思ってたんだけど、入学して見当たらなかったから、今日の転入生の話し聞いて鈴だろうと予想してたわけだ」

「私はニュースや国のお偉いさんから一夏がIS学園に入学したのは知らされてたから、自分のクラスで一夏のクラス聞いて、長めに話せるこの時間狙って来たのよ」

今度は腕組んで仁王立ちしてるし。しかも地味に似合ってるから困る。

「おっと、そろそろ休み時間終わりだ」

「そうね。ってなわけで、あたし二組だけどよろしくねっ！」

鈴はにこやかに笑って隣の教室に戻っていった。

鈴も戻ってきたし、IS学園（ここ）の生活も楽しくなるなあ。

あ、中学のプチ同窓会でもするか。鈴に会いたいヤツもいるだろうしな。

第14話

土下座という行為はある種の暴力である。そんな話を聞いたことがある。

された側は土下座をしている相手を許さなかった場合、衆人が多ければ多いほど後の風聞が悪くなるらしい。する側はそれを見越して衆人の多いところをあえて選んで土下座することもあるらしい。

さて、何でこんなことを考えてるのかというのだ。

IS学園研究棟 専用アリーナ横情報処理管制室内休憩スペース
専用アリーナを見下ろすことのできる強化ガラスのはめられたこの部屋は、管制用の機材と情報収集及び処理用の機材で他のアリーナの管制室に比べてかなり手狭に思えるのだが、入り口横に休憩用のソファとテーブルが置いてある。室内の雰囲気は比べてかなりミスマッチだが、時期によっては先輩たちが此処に缶詰で作業することもあるらしく、その間の休憩用に持ち込まれたそうだ。

そんな休憩スペースには今、おろおろしている山田先生。麦茶のグラスを傾けながら視線は絶対零度の簪。茶請けに出されたクッキーをかじりながらも視線は同じく絶対零度の俺。そしてソファの横で見事な土下座をきめている倉持技研の主任だというおっさん。以上四人が、かれこれ五分は無言のまま時間が過ぎている。

事の発端は昨日の放課後。再会したばかりの鈴も交えて食堂で談笑し始めてすぐのことだった。山田先生が俺を探してやってきたので席を勧め話を聞くと、以前話があった専用機が明日（すでに今日だが）届くので放課後の時間を空けておいてほしいということだった。その上で、お流れになっていた起動実験を含めた情報収集や簡単な模擬戦闘を行うので、誰か一人連れてきてほしいという。

それならと、視線を鈴に向けると。

「日本の作った専用機の起動実験や、世界に一人しかいない男の操縦者の起動データ取りに、中国の代表候補生のあたしが参加していいわけじゃないじゃない。場合によってはスパイ容疑かけられてもおかしく

ないんだから」

という言葉を賜り断念。頭を悩ませる事態になったのだが、はたと気がついた。

日本の代表候補生ならセーフじゃね?と。

そして夕食後、あの日以来の、のほほん簪部屋の扉を叩いたのだが、のほほんさんに格納庫にいるからといわれ再移動。

見つけた簪との会話がこんな感じだった。

「よう簪。ちよつといいか」

「一夏。どうしたの?」

「なんか明日、俺の専用機が届くらしくてさ。起動実験の後に軽い模擬戦闘するらしいんだけど、それにつきあってくれねえ?」

「せんよう・・・き?」

「ああ。この間初めて聞かされたんだけどよ。政府からの命令で専用機持ててことらしい。護身の為ってことらしいけどさ。どう考えてもデータ取りのモルモットだよな。迷惑千万だったの」

「えっ?一夏から頼んだんじゃないの?」

「は?ないない。だって俺IS興味ねえし。パイロットマジ勘弁。それに男ってだけで専用機もらうって、ひんしゆく買い捲りだろ?人間関係壊すようなモノはいらん」

「私、一夏が政府に欲しいって言って、政府がそれを承認したって聞いたけど・・・」

「あ?だれに?」

「倉持技研の主任に。あ、倉持技研って一夏の専用機作った研究所ね」
「なんじゃそら。俺、IS業界抜かれる方法ないか模索するくらい興味ないのに、ねだらねえよ」

「そんな・・・。倉持の人たちは『だから君の専用機の開発は一時凍結になった。すまない』って」

「なあそれって。騙されたんじゃない?」

「ねえ。私達怒ってもいいのかな?」

「いいと思うぞ。俺も腹立ってるし。簪は俺以上に怒って当然だ」

ダイジェストで語ると、そんな感じの会話がなされ、つい五分前にこの部屋に俺と簪が並んで入ってきた瞬間に、山田先生と一緒にソファに座っていた主任だという男はすべてを悟ったのか土下座。俺と簪はあっけに取られている山田先生を置いて自分達の分の麦茶を用意して今に至る。

ちなみに山田先生は俺達と土下座主任とを体ごと交互に見るものだから、二つの丘が水風船のごとくばいんばいんとゆれている。簪の絶対零度はいつのまにか土下座主任から山田先生の水風船に移っている。そんな睨まんでも、五年以上の年齢差があれば、いつか大きくなるさ。鈴みたいに絶壁つてわけじゃないんだし。平均ぐらいはあるだろ。なんて考えるけど、口には絶対出さない。簪は根に持つタイプだ。後が怖い。

話を進めるために、わざとらしく大きな溜息をつく。土下座主任の肩が大きく跳ねた。

「なんでそんなすぐばれる嘘を吐きますかね」

「それはそのう」

「考えなかったんですか？専用機持ちは競技イベントには優先して出場されるらしいじゃないですか。俺と簪がそこで会うのはわかりきったことでしょうに。それともそんなことも考え付かないような残念人種しかいないんですか？倉持技研つて言うところは。頭がよくて腕がよくてもそんな当たり前の、常識の部分が残念だと、経営者は常に胃が痛いんでしょうね」

「そんな言い方はないだろうっ！」

「……もう頭上げるんだ」

ガバツと頭を上げて反論しようとした土下座主任に簪が冷たい言葉を投げると、音が出る勢いで再び土下座モードに移行した。

「そんな仕事もまともに出来ないようなトコロの作った機体、乗る気が起きないですね。本当にちゃんと仕上がってるのかすら疑わしい」

「何を言うっ！ちゃんと完璧に仕上がっているからこうして今日持ってきたんだ。確かに更識君に嘘をついた件は我々に完全に非があるが、それと仕事の仕上がりに関しての話が違うだろう！」

怒鳴りつけてくるが、土下座状態だと威厳のかけらもないな。

「そこでそれを関係ないって言えるから駄目なんですよ。あなたは部品を作ってる下請けが『お宅に納品する部品よりも我々の会社の実績にもなって興味のそそられる仕事を見付けたから、お宅の仕事はキャンセルで』なんてほざいたら、もう仕事下ろさないでしょ？信用できないんだし。そういうことですよ。やりかけの仕事を投げ出して別の仕事に飛びつくような、職人としても研究者としても三流以下のところの仕事を信用する訳ないじゃないですか」

「ぐっ」

「それに、どうせお宅が完全に作ったわけじゃないでしょう」

「なっなぜっ?」

はっ。やっぱりな

「あの外道兎が俺の乗るだろうISの製作に手を出さないわけがないんだよ。本気で不本意だが、アレに気に入られてるからな。織斑千冬の弟ということ。何年の付き合いだと思っ。ざっと十年だぞ。それなりに性格は理解してるさ」

まったく迷惑しかかかってこない。あの兎め。

「ふんっ。まあいいさ。どうせお宅らは今後まともな仕事が出来ないだろうしな」

「ど、どういうことですか」

いまだにおろおろとしていた山田先生が会話に入ってきた。おびえた様な小動物チックな眼が心に癒しをもたらしてくれる。本気でお持ち帰りしようかなあ。

「簡単なことですよ。各国国家代表ならびに候補生の専用機の製作はそれぞれの国の企業が行っていますよね」

「はい。専用機はその国の技術の塊ですから、他国に依頼することはありません」

「ですよ。そして日本の量産機である打鉄は国の工場で作られて、

コアの残り数の関係上これ以上の製作はほぼありえないと」

「そうです。つい先週授業でやったところですよ」

「以上を踏まえて、今後企業がIS関係で製作を行うのが、専用機の製作と各種武装の製作です。打鉄の専用追加武装はこれ以上出ないと、こちらにも授業で聞きました。あとはどこの国の機体でも使える完全汎用の武装。これはどこの企業であつても目新しいものなんて出来ないそうですね。既存の応用。どこの企業でも変わりなく作れる」

「極端ではありませんけど、間違つてないですよ」

「そして専用機。国家代表も代表候補生も、同じ日本の代表候補生の機体製作を投げ出すような企業に依頼すると思いませんか？」

「しない……ですね」

「他の候補生にはすでに連絡して話してある。専用機製作を投げ出されたつて」

「こういうことです。日本の代表の人たちからの依頼はもうない。いつときは汎用武装の依頼が海外から来るでしょうけど、狭い業界です。話はあつと言う間に広がるでしょう。そうなればそつち方面の依頼も来なくなつて終了ですよ」

と、いうわけだ。

「信用のない企業の関わつた機体に乗る気もないので、機体ごとお引取りください。専用機は他の企業に改めてお願いすることにします。国もそれくらいのがままは聞いてくれるみたいですし、最低でも学園にいる間乗ることになる機体なら、いくつか注文をつけたいので」

そう言つて簪を伴つて席を立つ。山田先生に専用機に関しては明日改めて決めましようと言つて部屋を出た。

「一夏。スカツとした？」

「おう。言いたいこと言つたからな。簪はどうよ？」

「スカツとした。一夏がボロクソ言つてくれたから」

「口悪いなあ」

「いいの」

「そっか。うっし。のほほんさん誘って食堂でデザートでも食いながらだべるか」
「うん」

第15話

さて、5月もある程度過ぎたのだが、ウチのクラスにも普通の高校と変わらずクラスルールがいくつかできた。

ひとつは俺と織斑先生の関係には触れないこと。俺はそこまで気にしていないのだが、俺との関係をつつくことで憧れの存在のダメな部分を知りたくないということらしい。

次に篠ノ之箒を怒らせないこと。入学式の日以降なんか俺に絡んできたんだが、最終的に木刀を振りかざしたのだ。入学式の日には俺が言ったことを、ある程度大げさに言っていたんだろうと思っていた。クラスの子もさすがに理解したようで、頑張つて俺が何度か打撃を受けながら回避している間に山田先生を呼んでくれた。その結果、木刀没収、部活の一ヶ月禁止、3日間の自室謹慎、反省文20枚という処分が下った。そしてクラスの全員から『怒らせると暴力に訴える』という認識を持たれたわけだ。

それからクラス対抗戦に関しては語らないこと。あれだけ見得を切つてクラス代表になったオルコットだったが、初戦で2組代表の鈴に完敗。素人の俺ですら理解できるレベルでの完敗だった。なにせ、当日アリーナの後ろのほうを陣取つて、簪に解説を頼んで観戦していた1組有志に向かつて簪の行つた解説が『解説、する?』という位だったのだからな。それ以降クラスでは『クラス対抗戦はなかった』ということになった。ちなみにオルコットはクラスで一言もしやべることはなくなった。授業であてられたときにしやべるくらいだ。もひとつちなみに優勝は鈴だった。代表候補生のすごさを見たね。

とまあ暗黙の了解というやつがあるが、基本クラス仲はいい。例外はいるが。

俺はクラスとそれなりにうまくやっている自信はある。放課後教室や食堂で駄弁することもけっこうあるしな。けど、やはり頻繁に一緒にいるのは鈴か簪かだ。その次が追加学習の関係上山田先生になる。

鈴とは弾や数馬とグループ会話することも結構ある。けど意外なといつては何だが、鈴と簪の仲もそれなりにいい。俺が仲介する形で

知り合ったが、専用機の件や姉の件を聞いた鈴が『女版一夏』と評した。食事を忘れて没頭する簪の首根っこをつかんで食堂に引きずる鈴の姿を数度目撃する位には仲がよくなってるようだ。ちなみに俺が連れて行くときは肩に俵担ぎだ。のほほんさんは連れて行かない代わりにきぐるみパジャマを着せて写真を取り捲っている。レパトリーはまだまだあるらしい。

で、そんなうちのクラスに転入生が来るらしい。情報源は山田先生。昨日の放課後教室で一緒に雑談をしていたときに、山田先生の携帯に連絡が入ったのだ。数分はなしていた山田先生が電話を切ったとたんに肩を落とした。何でも知らされてなかったらしい。「寮の部屋割りを組みなおしますので」と教室を出てゆく山田先生にみんなで手持ちのお菓子を差し入れた。頑張ってほしい。

というわけで割りと期待しながら朝のHRを待ってた俺らだったのだが、入ってきた山田先生の憔悴っぷりに引いた。ドン引きだった。上体が倒れてるよ。女子の間で牛みたいと言われることがあるけど、ちよつと納得した。アレ山田先生の顔と同じサイズあるんじゃない？片方だけで。いやホントに。

とか考えてたら織斑先生と一緒に転入生が入ってきた。中性的な顔立ちの金髪だった。え？男用制服着てるけど。え？

「自己紹介しろ」

織斑先生の言葉に「はい」と短く返した転入生の目を見て思った。あれ？コイツ同類じゃね？

「シャルル・デュノアです。同じ境遇の方がこちらにいますのでボクもこっちの方が良いだろうということになりました」

そう言ったものの、女子が反応しない。理由は明白だわな。笑顔がこええ。作り笑いもあそこまで行くと怖いのな。

「……って、んなわけあるかあつ！無理があるだろ！いくらボクの顔立ちが中性的なほうだからって、さすがに男じゃ通じないよ！胸のサイズと腰の細さはコルセットとジャパニーズサラシでごまかせるけどヒップのラインは無理だよ！傲慢じゃないけどプロポーションには自信があるんだよ」

叫びながら制服の上着を脱ぎ捨てた。下に厚手のシャツを着てたらしいが、その中に手を突っ込んでごそごそしてたかと思ったら、さらしとコルセットを緩めたらしい。胸が膨らんだ。丘が誕生したよ。けっこうあるな。

「苦しいんだよ！こんなものつけて生活したら死ぬよ！というか実習の時にどう誤魔化させて言うのさ！渡された自称男用スーツだと胸が隠せないよ！小さい蕾がスケスケだよ！さらし巻いて通常スーツきたらパッドが不自然に浮かぶし！」

あ、女子のスーツつってパッド入ってたんだ。まあ、そうじゃないと転入生の言う小さいつぼみが丸わかりだしな。

「というか何で入学許可出たのさ！怪しき満点じゃないか！怪しんでよ！調べてよ！つてか気付けよ！IS委員会何してるのさ！代表候補生の申請の時に調べろよ！経歴調査したら一発じゃないか！なんだよシャルルつて！シャルロットだよボクは！何で母さんがつけてくれた大切な名前を偽らないといけないんだよ！そもそも男性操縦者についての情報を流せつて、スパイじゃないか！犯罪だよ！捕まるよ！どうせ捕まってもボクを切り捨てるんだろ！ならいつそ全部暴露して内部告発してやる！みてろ！ボクだつて！ボクだつて！キレるんだよ！」

大・絶・叫！肩で息してるよ。目が怒りに染まってるよ。こりや本気で限界突破したな。

あ、山田先生が死んだような表情でシャルロットの絶叫録音してたっぽい。内部告発やら何やらは先生に任せて大丈夫らしい。けど、顔が死んでるのは部屋割りの組み直しだからだろうな。今度は食事を差し入れよう。山田先生が精神的に死ぬ前に。

休憩時間に飲むようにもって来たペットボトルの水をシャルロットに差し出す。一気飲みだよ。500ml一息とか。

水を飲み干して深呼吸したシャルロット・デュノアの肩に手を置いて優しく声をかけた。

「ようこそ駄家賊同盟に。俺たちは君を歓迎する」

第16話

「第一回駄家賊同盟大愚痴大会」

努めて平淡に宣言する。

「わー」

「わー」

簪とシャルロットも平淡な声で歓声を上げながら、割とどうでもよさ気に拍手する。

「けどあれだな。いざ愚痴を言うってなるとテンション下がるよな」

「同感」

「そうだね。溜めてること吐き出せるけど、いやなことを思い出すのも同時進行だからね」

三人そろって溜息を吐く。

「とりあえずさ。君ら二人は家族の誰がひどいの？」

シャルロットの問いかけに簪と目を見合わせてから声を揃えて言った。

『姉』

「それは厄介だね。兄弟姉妹って親よりも長生きだから」

「シャルは？」

簪が気がついたらシャルロットを愛称で呼ぶくらいで仲良くなってるんだが。いつそんな時間あったよ。

「ボクは実の父親と義理の母親。まあ今回のスパイ関係で投獄されるのがほぼ確定してるから、二度と会わないかもしれないけどね」

顔は笑ってるけど目が澱んでやがる。そのギャップに簪と二人そろって軽く引いちゃったよ。

「そ、そう。そう言った点で言えば私も後二年したら、あの人の活動拠点ロシアになるからほとんど会わなくなるんだけどさ」

「簪のお姉さんって生徒会長だっけ。ロシアの国家代表の」

「うん。だから卒業したら基本はロシアみたい。家の関係で戻って来ても私と会うことはないだろうし」

二人ともそう遠くない未来に会わなくなれるわけか。

「なあ。おれってどうなんだろう？どの進路選べばアレと会わなくてすむ？」

「……………」

いや、だまるなよ。二人して。

「一夏はIS関係に進んだらアウトだよな」

「あと国内にいるのも危ないんじゃないかな？」

「けど俺って今のままだと海外出れないよな」

身の安全的な意味合いで。

「無理」

「無理だね」

「即答だな。泣くぞ」

自然と肩が落ちた。マジで逃げ場がない。

「人の来ない山の中に隠居すれば？」

「よし簪。そのときはおまえも道連れな。一緒に文化とはかけ離れた生活しようか」

「無理。特撮のブルーレイ買えないとか」

「だろ？俺も文化的生活は捨てられん」

「簪、今軽く流したけどプロポーズに近かった気がするんだけど」

「ん？どうしたシャルロット」

「なんでもないよ」

そういうことにしとけ。

「ISがなければ万事解決なんだけどなあ」

「それこそ無理だよ」

俺の呟きを簪が即答で切り捨てる。本気で泣いていいかなあ。

「そういえばさ、一夏」

「なんだ？シャルロット」

「あ、ごめん。そういえばさの話題の前に聞きたいんだけど、何で僕の呼び方ってシャルロットなの？」

何でって言われても。

「愛称で呼んでいいって言われてないのに女子を愛称で呼んじやまずいだろ」

それやったらチャラ男って言われても否定できんぞ。

「あ、そういうことなんだ。うん。僕の話はシャルでいいよ。長く呼びにくいでしょう？シャルロットじゃ」

「呼びにくくはなかったが、長いのは確かだよな。よし、シャルな。んで？どうした？」

本来の用件はなによ？

「クラスの子に聞いたんだけど、織斑先生を保護責任者？っていうのから外すとかどうとかってどうなったの？」

ああ、その件ね。そういやクラスでこの話題にならないからなあ。

「話をついたぞ。戸籍の関係上姉弟はやめられないけど、保護者だからって口出しされるようなことはないな」

「なにそれ。うらやましい」

ええい。簪。そんな恨めしそうな目で見ろな。

「そうなんだ。じゃあいま一夏の保護者ってどうなってるの？両親いないんだよね」

シャルナイス。このまま話を別の方に逸らしてやる。

「今は幼馴染の親がしてくれてるよ。アレが保護責任者になるまではその人がしてくれてたんだ。家族揃って良い人たちだよ。頭が上がりねえ」

「そうなんだ。いいね。一夏がそこまで言うってことはホントに良い人なんだね」

シャルホントにナイスだ。俺が話を逸らしたいのをわかってくれてるな。

「そのうちみんなで行くか？食堂やってさ、マジでうまいんだ。近いうちに鈴木顔を出しに行くっていうから、一緒に行こうぜ」

「ん〜。お言葉に甘えようかな？ボクも国にいた頃はよくビストロで食事してたから、こっちのビストロにもちよつと興味があるんだ」

ビストロって？確か……。

「一夏。ビストロはフランス語で食堂。今の会話の流れでわかるで

しよ」

「いや、面目ない。で、簪も来るだろ？」

「ってか連れて行くけどさ。どうせ。」

「私は式式のことがあるから……」

「て言うのはわかかってるわけだ。」

「簪。ボクの個人的な意見だけど、たまには息抜きも大事だと思うよ。それにボクとしては友達と出かけた、かな」

「あ、簪の顔が赤くなった。いまだにボツチ属性が抜けきらないのな。友達ってフリーズに弱い。」

「わ、わかった。私も、行く」

「よしあとは鈴に話しておきやいいか。」

「で、話をスッゲー戻すが、愚痴大会どうする？続けるか？」

「俺としてはどうでもいいんだが。」

「ボクはもういいかな」

「私も、いい」

「だよな。んじゃ、ちと早いが食堂行くか。誰かしら暇してるだろ。流れで夕食まで済ませようぜ」

「立ち上がって軽く伸びをする。」

「そうだね。そうしようか」

「私は式式を……」

「それは飯が終わってからなあ。早めに食べるんだからそのぶん時間が取れるだろ」

「問答無用で簪を肩に担ぎ上げる。」

「おーろーしーてー」

「抵抗なぞあつてないようなものだな。」

「なるほど、簪の友人として食堂に連行することも必要なんだ。ボクはどうやって運ぼうかな」

「よし、運搬要員ゲット。」

第17話

はてさて、遠い昔の話になりかけてた専用機だが、打鉄を一機貰い受けてカスタマイズしていくことで話がついた。誰と話がついたかって、政府とだ。山田先生を仲介したりして何度か話し合いをしたのだが、データ取りをするために打鉄をベースのカスタム機にした方が効率が良いとか、候補生でも打鉄のカスタム機やリヴァイヴのカスタム機を使ってるのに男だからって完全オリジナル機使ったらバツシングがひどいとかの建前を突きつけて、最後は『オリジナル機なんかにしたら篠ノ之束が何しでかすかわからない』と言ったら許可が出た。

それにあれだ。俺がISパイロットにならなかった場合、カスタム分を元に戻せばすぐに通常の打鉄として使えるからな。そういう点もあつての打鉄カスタム機なわけだ。

「とうわけで簪先生。専用機のカスタマイズ手伝ってください。こちらの専用機の製作も手伝います」

簪のほほん部屋で正座をお願いしてみる。

「うん。帰れ」

笑顔で断られた。満面の笑顔だ。

「マジで?」

「冗談。いいよ。友達……だし」

おお、顔真っ赤。

「おりむぐ。わたしも手伝うよ」

え??

「のほほんさんソッチ系?」

「うん。わたしとお姉ちゃんは整備の方が得意なのだ」

簪に視線を投げると無言で頷きが返ってきた。意外すぎる。そして姉がいたんだ。

「じゃあ頼もうかな。のほほんさんもよろしく」

「まっかせろ」

振り上げた右手を見てふと思う。あのユル袖の中から工具とか出

てきたら結構面白格好いいんじゃないかね?と。

「で、一夏は打鉄をどういうコンセプトでカスタムしたいの?」

「速度を活かしたヒットアンドアウェイかな? 昔ちよつと剣道やってたから剣の扱いはそこそこできると思うんだけどさ、実際にIS装備した状態で近距離での斬り合いとか怖すぎるだろ」

絶対防御があるからって怖くないわけではないはずだ。

「じゃあ、ブースターやスラスターを増設することになるけど、装甲をどうするかだけど、ヒットアンドアウェイだったら装甲を最低限にして回避メインにした方がいいかな。武装はどうする?」

「武装はまだぜんぜん考えてない。基本装備の焔備だけじゃ足りないとは思ってるけど」

「漠然としたイメージしかないわけだ。とりあえずは私の機体の製作の手伝いをしながらイメージを固めていって、固まったところから製作していく方向かな」

まあそのあたりが無難だよな。そもそも数ヶ月前までごく普通の中学生だった人間が武装に詳しいわけがない。むしろ詳しくあったら怖い。

「かんちゃんかんちゃん。さすがに三人で二機は無理がありすぎると思うな〜」

「わ、わかつてる。手伝いを……頼むよ」

か、簪が他人の手助けを認めた?!これが成長か……。

俺が一人で簪の成長に感動している間に二人で色々決まったらしい。整備科の先輩に声をかけるらしい。

当然というかなんと言うか、のほほんさんが若干と言わないくらいからかったらしく、簪は椅子の上で器用に膝を抱えていた。頬をリスみたいに膨らませて。ああもう。何でこの子はこんなに可愛いかなあ。

のほほんさん。その手に持ったりスのきぐるみパジャマはナイスと言っておこう。

第18話

のほほんさんとリス簪を堪能してから部屋に戻ると、裸エプロン姿の痴女がいた。

無言でドアを閉め、携帯を出して電話をかける。

「山田先生ですか？部屋に戻ってきたら面識のない女性が半裸で不法侵入していたのですが、どうしたらいいですか？」

『え？ええっ?!す、すぐに行きますから、相手を刺激しないようにしてくださいね。あ、後いかがわしい事したらだめですよ?』

「わかりました。扉を外から押さえ込んであるので、窓から逃げられない限りは大丈夫だと思います。直接会話はしないようにします。あと、〴〵そういう〴〵ことはお互いの同意のもとに雰囲気も考えてからしたい派なので痴女は勘弁です」

そう言うってから電話を切る。扉は外開きなので全体重を掛ければ女子の力には対抗出来るだろう。

「まって！お願い！開けて！開けてくれないとお姉さんホントに困っちゃうから！」

ドアを内側から連打されるが無視を決めこむ。こういう相手は話を聞かないに限る。

「お願い！ただちよつとイタズラ心が働いただけなの！ねえ！聞いてる!?!」

そんなことを数分聞いてたら山田先生が走ってきた。一緒に先輩らしい眼鏡の女性も連れてきてる。あれ、どことなくのほほんさんに似てる気が。あ、たぶんあの人がのほほんさんのお姉さんか。

「はあ。はあ。はあ。お、おまたせしました」

膝に手をつき肩で息をする山田先生を見下ろす形になる。二つの丘がすばらしく揺れているが、先輩がいるのですぐに視線を外す。

「えっ?うそっ?もう来たの!?!」

と、中から聞こえたのと同時にドアに掛けていた体重をどける。そして間髪入れずにドアを開けると、先ほど見たままの姿、ぱつと見裸エプロン状態のおそらく先輩生徒がいた。

いや、まあホントは誰か知ってるんだけどさ。生徒会長の顔ぐらいは知ってるし、簪の姉ってことは顔立ちを見ればわかる。結構似てる。

「さ、更識さんっ！なんて格好をしてるんですか！は、ハレンチですっ！」

あ、いまだきハレンチなんて言葉使う人いたんだ。

「会長。人に仕事を押し付けてまでやらなければならぬ大事なことというのがコレですか」

のほほんさん姉の視線が絶対零度だ。いやむしろあれはゴミを見る目だ。

「う、虚ちゃん。これはね？あの……」

へえ、のほほんさん姉はうつほさんっていうんだ。どういう字を書くんだろう。布仏宇津保？それはないな。こんど聞いてみよう。

「更識さんっ！自分が何をしているかわかってるんですかあ！」

山田先生が怒りすぎて顔が真っ赤になってる。無表情でゴミを見る目をしてるうつほ先輩との対比で紅白になってるよ。

「山田先生。ここで問い詰める必要もないでしょう。生徒指導室に連れて行きましょう」

うつほ先輩が冷え切った声でそう言うと裸エプロン会長を肩に担ぎ上げた。あれ？なんか見覚えがあるんだが。

あ、エプロンの下は水着だったんだ。

「そうですね。織斑先生にも来てもらいましょう。更識さんを押さえ込めるのは織斑先生くらいですし」

山田先生が自身を落ち着けるように深呼吸してから、うつほ先輩に応えた。

「織斑君。今日のところは申し訳ないのですがこのままということ。侵入方法が判り次第鍵の交換を手配しますので」

「会長がご迷惑をおかけしました。後日正式に謝罪に伺いますので。私が」

うつほ先輩が器用に頭を下げながら山田先生とともに歩き去っていった。

遠ざかっていく後姿から「おーろーしーてー」という声が聞こえてくる。聞き覚えがあるけど、スルーしよう。

《簪の姉さんが俺の部屋に水着エプロンで不法侵入して、うつほ先輩と山田先生に連行されていった》

《なんか……、ごめん》

送ったメールも、返ってきたメールも、なんとなくたびたびれたオーラがでてた。

第19話

痴女会長が連行されていったのを見届けてから部屋に入って鍵をかけた。しかしホントにどうやって部屋に入ったんだか。マスターキーは寮監しか持ってないはずなんだが。ピッキングでもしたか。

制服をハンガーに掛けてから、机の上に置いたままのヘッドホンをつける。ワイヤレスのヘッドホンは部屋をうろつくときには重宝している。さすがに調理中にはつけないけど。危ないし。

聞く曲は割りと様々だが、最近は洋楽でも聞き取りやすい曲を聴くことも多い。普段から英語を耳にすることで英語になれるようになるためだ。大学受験をする際に役に立つといわれて最近はじめたことだ。たまに覚えた単語が聞き取れるので、役に立たないということはないさそうだ。

風呂の自動湯沸しをセットしてからベッドに身を投げた。

「ん？」

一瞬ヘッドホンの音にノイズが入った気がした。壊れたか？結構高かったから壊れると泣けるんだが。

起き上がったから机の端末に向かい、再生中の曲を戻してみる。先ほどノイズが流れたと感じたところでは、今度はノイズは入らなかった。ヘッドホンをはずして音量を上げてみるけど、音割れもしない。壊れてない？

「どういうことだった？」

音量を戻してからヘッドホンを手に持ってベッドに向かう。ベッドに倒れこむときの勢いが悪かったんだろうか？そう思って手に持ったヘッドホンを軽く振り回してみる。

「やっぱりコレが原因か」

先ほど同様にかすかに聞こえたノイズに納得してから。再度耳に当てて、今度はゆっくりと横になる。急に動いたらノイズが入るのだろうか。

「あれ？」

ゆっくり動いたはずなのにまたノイズが入った。携帯の電波か？

いや、今までそんなことなかったし。
まさか。

ヘッドホンのワイヤレス受信感度を限界まで上げてみる。この広さの部屋には必要ない高感度だ。

ヘッドホンをノイズが聞こえたベッド周辺でゆっくりとかざして回る。

まさかテレビで見たようなことを専用の機械じゃなくてヘッドホンですることになるとは思わなかったが。つと。

「このへんか」

ベッドボードに備え付けのスタンドライトまわりをあさってみる。違和感発見。ライトの裏側からボタン電池の大きい版みたいなものが取れた。ヘッドホンにかざしてみるとノイズが出る。

「マジかよ」

盗聴器とか。……。コレ一個だけなんてことはないんだろうなあ。俺のプライバシーとかマジどこよ。

ホントにまだ出てきたよ。机とキッチンはまだわかる。けど、机の方のはノイズがホントにかすかにしか聞こえなくて難航した。最大感度でかすかにしか聞こえないって、どんな高性能だよ。いや、まだそれはいい。問題は2ヶ所。トイレと浴室だ。プライバシー皆無じゃねえか。マジなんなんだよ。

タイミングを考えるなら痴女会長が仕掛けたってことなのか？あの残念そうなの？

ふと思いついたことがある。簪が確か会長のことを『更識家当主』みたいな事を言ってたような。

《ちよつと聞きたいんだが、更識家って何やってる家なんだ？家業的なヤツは》

《あまり声高に言えないけど、諜報員みたいな事。急にどうしたの？》
ビンゴ。犯人ほぼ確定じゃねえか。

《直接話す。今からそつち行くわ》

学園内って安全じゃなかったのかよ。

第20話

「……………。マジで？」

「マジで」

事情を説明して実物を見せた反応がコレだった。簪の目に力が無くなってる。

ちなみにのほほんさんはいない。先程うつほ先輩が生徒会の仕事と言って連れて行ったそうさ。生徒会。のほほんさんが生徒会。考えないようにしよう。

「ウチが使うヤツの一つだと思う。うん。私、ソツチ関係はほとんど関わってないけど、いつだったか家で見たことがあったはず」

「更識の家的に俺って観察対象になるもんなのか？」

「ごめん。わからない」

憔悴しきってる。無理もない。俺も自分の家族が俺の友達の部屋に盗聴器なんて仕掛けてたら申し訳なくてへこむ。

「けど、何でこのタイミングなんだろう。もし一夏を観察するなりするんだったら、入寮前に仕掛けておけばいいはずなのに」

確かに。入寮時からずっとノイズが聞こえてたら絶対に気にしなかった。そういう場所だと思つたらう。

会長が俺を盗聴する理由ねえ。あれ？そーいや会長つて。

「な、なあ簪さんや。ちよつと確認したいことがあるんだがねえ」

「な、なに？急に変な口調で」

「この部屋も盗聴器探してみてもらえないか」

「え？」

「ごめん。かける言葉が見つからない」

部屋の角で膝を抱える簪。その目の前に置かれた盗聴器。俺の部屋で見つかったのと同じ型のもの。量は俺の部屋より多い。そして何より簪の心を折つたのが、俺の部屋同様にトイレとシャワー室にもあったことだ。

「……なんで」

簪がぼそりと呟いた。

「何で私の部屋にもあると思ったの」

こつちを見上げた簪の目がやばい。虚ろすぎる。

「あー。落ち着いて聞けよ」

簪の正面にあぐらで座る。

「簪が爆発した日に言ってた言葉で『過保護』って言ってたろ？それでちよつと考えてみたことがあるんだ。なんで簪とのほほんさんが一緒の部屋なんだろうって」

「え？」

「基本的に寮の部屋って同じクラス同士での相部屋になってるのに、簪はクラスの違うのほほんさんと同じ部屋だ。それと合わせて山田先生が事ある毎に寮の部屋割りを組み直してる。おかしいんだよ。そこまで気を配ってするものじゃないだろう。1年の頭だ。まだ仲が良い悪いがそこまで分かれてない時期だぜ。適当に放り込んでも割りとうとうでもなる。なのに部屋割りが難航するのは」

「横槍が入ったから」

「そういうことだ。過保護すぎる姉が付き合いの長い子を妹と同じ部屋にするように要請する。更識家当主の妹に対する護衛とでも言えればいいんじゃないか。で、予定通りの部屋割りになる。でも過保護すぎる姉はまだ心配だ。学年が違うから眼の届かないこともあるだろう」

「だから盗聴する」

「そういう風に考えたわけだ。さらに言うなら、この間愚痴大会もどきしただろ。そのときに俺が『隠居するなら簪も道連れ』みたいな事を言っただろ」

「う、うん」

「で、過保護すぎる姉は考えたわけだ。仲がいいのは知ってるが、そこまで進んでしまったのか？簪の部屋は盗聴してるから、そういうことをしてないのはわかる。じゃあ織斑一夏の部屋なんじゃ？それなら確かめないと」

おそらくあのふざけた行動も、そうすれば普段やってるようになってからかいて来ただけだと思つて盗聴器の事を隠せるとか考えたんだろう。「それでこのタイミングで一夏の部屋に盗聴器を仕掛けた」

よし、顔を真っ赤にするのは良いが、喋つてた俺も恥ずかしいことを覚えてろ。

「そういう感じなんじゃないかって考えたわけだ。だから簪の部屋にもあるんじゃないかって」

あ、目に力が戻つた。つて戻りすぎてる？

「まてっ！はやまるな！」

突如部屋を飛び出そうとした簪を羽交い絞めにして抑える。

「早まってない！ただ一発殴つて絶縁を突きつけるだけ！こんなことされておとなしく黙つてなんかいられない！」

そういうのを早まった行動つて言うんだつての。

「だから待てつて！はーなーしーをーきーけー」

「なに？」

やつと止まつた。意外と力が強いから苦労したよ。

「はあ。このまま殴りに行くだろ。そうすると理由を聞いてまともそうなうつつほ先輩はどうする？」

「たぶんあの人を監視するかそれに近いことをするはず」

うん。予想通りだ。

「けど、あの人一人じゃどう考えても抑えきれないだろ」

「確かにそうだけど、なら泣き寝入りしろつていうの」

「いんや。もつと大勢に監視させればいいんだよ」

「先生達に報告して、先生達も巻き込むの？」

それもあるんだが。

「それだけじゃなくてさ。今回のコレを理由に生徒総会を開かせる。内容は生徒会長のリコール。いくら最強が生徒会長になるからつて、コレは生徒の代表としてどうなのかを生徒全員に問う」

「へ？」

「リコールは成功しなくてもいいんだ。会長は仕事もせずになんかことをしてた。そう生徒全員に知らしめれば。そうすればみんなが会

「長を監視するだろ。普段からさ」
人を監視するようなやつは、人に監視されればいいんだよ。

やられたらやり返さないとな。全力で。

番外編01

うっし。やるか。

「一夏」

「のほほんの〜」

「パティシエ万歳」

「パティシエ万歳」

セリフに合わせてのほほんさんとハイタッチする。タイミングばっちりだ。

観客から拍手が来るが、鈴は呆れたように適当な拍手で簪は状況が理解できないのか呆然と手を叩いてる。唯一シャルだけが目を輝かせて手を叩いてくれている。うん。シャルはいい子だな。それだけで頑張れるさ。

「おりむ〜。今日は何を作るの?」

「よく聞いてくれた。今日は五月に食べる伝統の和菓子。柏餅だ」

意外と癖になるうまさをしてておいしいんだよ。

「え? 柏餅って自分で作れるの?」

よしまて。

「よ〜しまて。中華料理屋の娘。お前自分の実家に喧嘩を売ったぞ」
「そうじゃなくて、和菓子って職人さんが作ってるものじゃない。和菓子は芸術品みたいにすごいじゃないの。中華料理でもすごい腕のいい料理人しか作れない芸術的な盛り付けのものがあるでしょ? そう言った領域のものだと思ってたのよ」

ふむ。言わんとすることはわからなくもないが。

「ふむ。なら今日はちゃんと見ておけ。意外と何とかなるものだぞ」

では気を取り直して。

「まず、柏餅が何かを知らないであろうシャルに完成予定図というか、一般的な柏餅の画像を見せてやろう。のほほんさん」

「はいさ〜」

ネットで拾ってきた画像をプリントアウトしたものをシャルに渡ししてもらう。

「わあ、コレが柏餅なんだ。ボク和菓子って食べたことないから楽しみだなあ」

うむ。目の輝きがヒーローシヨウ開始直前の子供のようだ。

「それでは材料から。上新粉250g、水350cc、柏の葉10枚。それから、あずき300g、砂糖240g、塩小さじに半分、しょうゆ大さじ2」

「今回はあんこからつくるのだ」

「だからあずきは昨日から水につけてある。先にあんこから手をつけるので、コレを火にかけて、沸騰するのを待つ」

「それまではどうするの」

うん。水から沸騰させると時間掛かるんだよね。

「その間に細かいことをやっておく。まずは柏の葉を軽く洗ってから水気をしっかり取っておく。最後に餅を巻くのに汚れとかちよつと気になるだろ？」

「水気を取るのは何で」

「水気が残っていると餅に巻いたときにべちやつてなるんだよ。なんだから言っても餅だからな。んで、10枚しっかり水気を取るまでやっているとちよつど沸騰したな。このあずきを引き上げてゆで汁を捨ててから、もう一度あずきと水を入れて沸騰させる」

手間だけどやつておいて損はない工程なんだ。

「おりむ。何で2回もコレやるの」

「これは茹でこぼしっていう方法で、コレをすることであずきのアクを抜いてるんだ。そうするとエグミが抑えられるんだ」

「へ」

「初めて柏餅を食べるシャルもいるからな。今日のはあんこをこしあんにするつもりなんだ。だからエグミを減らしてまろやかにしたいんだよ」

「こしあん？あんこにも種類があるの？」

いい質問だシャル。

「おう。あずきを使った餡は基本的に2種類。あずきの粒の形の残ったつぶ餡と、粒を完全につぶして形がまったくわからなくするこしあ

んだ。日本ではつぶあんこしあん論争が起こるほど好みが見分けられる。けど今日はシャルも初めてのあんこだからな。まろやかに仕上げやすいこしあんにしたんだ。それにつぶあんは粒が歯の間に詰まることがある。はじめてのあんこの思い出がそれというのは忍びない」

お？沸いたな。

「茹でこぼしの済んだあずきを圧力鍋に入れて水を入れ、火にかける。そしてこのまま20〜30分放置」

「出来上がるのを待つてるよ。あずきくん」

で、その間にやるのが。

「この時間を使って餅の方を進めるぞ」

「おもち〜」

「まずは上新粉と水350ccを耐熱ボウルに入れてよく混ぜる。このときに上新粉がダメにならないように気を付ける」

「なんで耐熱ボウルなの〜」

「それはだなっと。うん。こんなもんだな。しっかり混ぜたコイツにラップをかぶせて、レンジで5分半加熱するからだ。このレンジは600Wのやつだから、500Wのヤツだともう少し時間を増やさないといけない」

「レンジって……」

いや鈴。日本人のレンジ利用式調理術すげえぞ。存外にはかにできねえ。

「で、この間にあずきの茹でこぼしに使った鍋とかを洗ってしまう。こうやってスペースをどんどん広げていく」

洗い終わって物をきれいに拭いて片付けたところでレンジが鳴った。

「温め終わったところでレンジの扉を開けておく。いくら耐熱とはいえちよつと熱いからな。で、さつき作ったスペースに大きめにラップを切って広げる。そのうえにレンジから取り出した耐熱ボウルの中身を出す。餅生地は熱いから注意な」

油断するとマジで火傷しかねないんだぜ。

「これから生地をこねていくわけだ。広げたラップの角を一ヶ所持つ

て、対角線の角に向け折りたたむようにしてからラップ越しに押さえ込むようにしてこねる。コレを20回ちよつと繰り返す。たぶんこの作業が一番の山場かな」

とりあえず黙々とこねる。こねる。こねる。

「うっし。こねた生地を大きめのビニール袋に入れる。口は縛ったらダメだ。この袋を冷水を入れたボウルに、中に水が入らないように入れておく。こうやって生地に残ってる熱を取るんだ。これをまた20分くらい放置」

ボウルを慎重に脇によけておく。

「んで、程よくなってきたあずきの作業に戻る。鍋から出したあずきを今度はミキサーに入れる」

「ミキサー!?!」

「うん。ミキサー」

「みきさ〜」

「つぶす手間が一気に短縮できる優れもの。コレこそ家庭クオリテイ」

クッキングマシン系ってホントに便利なんだって。鈴が頭を抱えてるがとりあえずスルー。あ、気が付いたらシャルと簪が調理台にかぶりつきで見てるし。マジでヒーローショウ見てる子供じゃねえか。まあいいけど。

「そこで見るのは良いけど気を付けろよー」

よし、続き続き。

「ミキサーかけ終わったのをそのまま使ってもいいんだが、ここで一回だけ漉し器を使って漉しておく。この作業をすることで残った細かい皮を取り除く。だからこしあんって言うんだぜ。シャル」

「おぉー」

あ、シャルが完全に子供になってる。

「この漉したやつを鍋に入れて火にかける。焦がさないようにゆつくり混ぜながら、ふつふつしてきたら砂糖を入れる。この時もダメにならないように注意な」

丁寧丁寧に混ぜていくと。

「あんが柔らかくなってきたら？実はこのままでもいいんだけど、ここで塩としょうゆを入れる。さっきの分量でもいいんだけど、好みの味になるように微調整するといい。この状態だとおしるこです」

「おしるこってこうやって作ってたんだ」

「そうだけ簪。意外と簡単だろ？けど今日はあんこを作るからこのまま火を弱めて中火から弱火くらいで煮詰めていく。焦げないように注意が肝心。この段階が一番焦がしやすい」

するとあつという間違ってわけじゃないが。

「ほい出来上がり。ちよつとゆるいけど冷えてくるとしつかりあんこの硬さだ。コイツをバットに広げて冷ましておく」

生地はもうちよつとだから先に鍋を洗ってしまう。もう鍋は使わないしな。

「あんこは余る分が出るけど、それは小分けにして冷凍しとくと、水と一緒にレンジであつためて白玉入れたらぜんざいになる」

うむ。生地もいい感じだな。

「生地が冷えたら5回くらいまとめるように捏ねて。10等分に分ける。つまり今日は一人2個だな」

まあ今回は細かく10等分する必要もないからざっくり手で分けたがな。

「この生地を手のひらより一回り小さいくらいの楕円形に伸ばす。麺棒を使うと簡単だ」

簡単だけど10個分って意外と手間がかかる。

「伸ばし終わった生地にあんこをのせていくわけだが、スプーンでバットからすくってのせていく。ある程度まとまるようにのせたら、あんこを包むように生地を折りたたんで縁を閉じる」

コイツがまたもくもくとやる系の作業なんだよな。

「最後の仕上げに柏の葉でくるんだら出来あがり」
「できあがり〜」

皿に乗せて、シャルと簪の目の前に置いてやる。二人の頭の上から覗き込むように鈴も完成品を見に来た。どうやら苦惱は終わったらしい。

三人が完成品に見とれている間に残りの器具も洗ってしまおう。食後の洗い物は食器だけつてのが俺の主義だ。

「よし、外も晴れてるし中庭で食うか」

影でこっそりと緑茶の準備をお願いしてた。のほほんさんの準備完了を待ってから中庭に出る。

「これがジャポンのオモチかあ。この食感癖になるね。あんこもまろやかで舌の上でとろけるよ」

「二夏。あんたお菓子作れるのは知ってたけど、こういうのもいけるのね。料理に関してはスペック高すぎでしょ」

「実家でよく食べたのもおいしいけど、私はこっちの方が好き……かな」

「うまうま〜」

四者四様、高評価だな。作った甲斐がある。

うむ。和菓子と緑茶がうまい。

第21話

『これより、緊急生徒総会を始めます。今回は議題が特殊なものとなります。生徒全員にかかわるものです。静粛にかつ真摯に総会に臨んでください』

壇上で虚先輩が。あ、簪に聞いたんだが、うつほ先輩の名前は虚ろと書いて虚(うつほ)と読むそうだ。かわってるにもほどがある。姉が虚言で妹が本音という虚実姉妹なわけだ。親のネーミングセンスすごいと思う。よし、話を戻そう。虚先輩が総会の開催宣言を行った。壇上に用意されている生徒会席は会長席は空席。副会長はいないそうで、会計の虚先輩は前で話してて、書記ののほほんさんはいっになく真剣な表情で座っている。

そう、生徒会長はいない。

『まず、生徒総会にもかわらず会長が欠席している件への釈明ですが、更識楯無生徒会長は現在、織斑教諭監視の下に監禁処置をとらせていただいています。そして、生徒会長としての権限を一時凍結されております。理由につきましては本会議の議題にかかわりますので後にさせていただきます』

監禁というフレーズに生徒全員からどよめき上がる。虚先輩はある程度静まるのを待つてから『静粛にお願いします』と声をかけ、どよめきを抑え込む。

『それでは総会を始めます。議題は生徒会長のリコールと、会長選出方法の変更です』

虚先輩は生徒全員が理解するまで待つよううで、壇上から生徒の表情を確認してから、ゆっくりと続きを話し始めた。

『リコールの声を上げた生徒は私ではありません。ですが、理由を確認したところ理由が理由であったため、本人の演説を行わないこととなりました。代わりに私がリコールに至った経緯を説明させていただきます。更識楯無生徒会長は、特定の生徒の部屋に盗聴器を仕掛け、そのプライベートの盗み聞きを行っていました。その盗聴箇所は極めてプライベートなエリアにまで及ぶ、個人の尊厳を著しく害する

ものでした。これは紛れもない事実であり、会長本人が認めました。なお、事後報告とはなりますが、現在寮の全ての部屋を教員によって確認させていただいております。万が一、他にも見付かるようでしたら、その部屋の生徒には個別に話が行きます』

生徒たちは完全に絶句状態だ。知らなかつたらこうなるよな。内容が内容だし。

『続けます。会長が行った行為は現在の法律では罰せられることはありません。ですが、寮の部屋に不法に侵入しています。寮の自室とはいえ、不法に侵入することはれっきとした犯罪です。そのような人物を会長にしているといわけがない。そう言った理由により、更識楯無会長へのリコールの声が上がりました』

盗聴器って仕掛けるだけだと法律違反にならないんだよな。仕掛ける際の不法侵入とか、盗聴で知り得た情報を誰かに話すとかしたら犯罪だけだ。

『そしてこれは生徒会からですが、更識楯無会長は会長就任後からイベントの私物化、率先しての風紀違反、生徒会業務の度重なる放棄による業務遅延があげられます。イベントの私物化に関しては2、3年の生徒は昨年の学祭を覚えているでしょう。風紀違反に関しては就任時の常時挑戦受付宣言による、ところかまわず行われる乱闘行為。業務放棄に関しては先の二つのために生徒会室にいないこともしばしばという状態です。生徒会長は学園内で最強の人物が就任するという規則による問題が大きく出ています。よって、会長の選出方法変更を生徒会会計として要求する次第です』

よくアレだけ長いことをかまわずにしゃべれるよな。俺には間違はなく無理。虚先輩にお願いしてよかった。

『選出方法に関してですが、学園長にも相談した結果。各学年における学科、実技両方をあわせた総合成績上位者から選出する形を草案としてあげさせていただきます。成績上位者とさせていたいただいたのは、IS学園の性質上学業が優先されるため、成績の芳しくない生徒には学業に専念してほしいためです。後ほど皆さんにこの方法の可否を確認する投票をしていただきます。否が多ければ別の方法を再度検

討してから、また確認投票となり、可票が過半数を超えたら採用案を突き詰めていくこととなります』

虚先輩が『それでは』と強調して声をかける。

『採決を取ります。リコールに関しましては賛成が過半数を超えた時点で会長のリコール採択となります。校則では3分の2以上となつていますが、今回に関してはすでに教師陣から満場一致での賛成をいただいた上で、犯罪に近い行為を行った事実を踏まえての過半数採決とさせていただきます。選出方法に関しましては一回目の可否投票となります。今回可決されれば、先程も言いましたが採用案を突き詰めてからの施行となります』

『それでは一年一組から順に壇上が上がって、賛成か反対かのボタンを押していただくさい。壇上の上って手前がリコール採決、奥が選出方法採決です。間違えの無いようにしてください』

両方とも賛成のボタンを押して戻ってきた。椅子に座って周りを観察してみる。まあみんな動揺しまくりだよな。いきなり会長が犯罪犯しました。だからな。

昨日の俺と簪もかなり驚いたけどなあ。盗聴器のことを聞いた瞬間の虚先輩の怒りっぷりに。まあ普通の感覚なら妹が盗聴の被害にあつてたつて知ったらそうなるよな。のほほんさんも真っ青になつてたし。

それと山田先生の手続きの早さには驚いた。盗聴器の事を聞いた途端に色んなところに電話をかけてた。電話をかける山田先生の前で20分は待ったと思つたら『今年いっぱいでの退学が決まりました』だもんな。詳しく聞いてみたら、ロシアの国家代表が日本の代表候補生に対して盗聴したつてのがかなりまずかつたようで、さらに世界に一人しかいない男性操縦者にも盗聴しようとしたら問題しかないんだと。しかも国家代表もおろされる可能性がでたそうさ。今回の盗聴事件、国からの指示と取られても仕方ないんだよな。行動の一つ一つが国を背負う。それが国家代表らしいし。そういった点でロシアは国家代表交代も視野に入れるそうさ。

20分程度でそこまで手を回す山田先生はすごいと思う。マジで。

けど、目の下のくまがひどかった。俺も原因の一端を担ってるだけに言葉をかけられなかった。こんどまた食事をご馳走しよう。倒れる前に。

どうやら投票が終わったらしい。

『皆さんありがとうございます。それではこの場で結果を報告させていただきます。まず会長のリコール採決ですが、賛成票が9割を超えましたので、更識楯無生徒会長に対するリコールを可決します。それに伴い、現生徒会も解散となりますが、次の会長が決まるまでは臨時生徒会として業務を続行させていただきます。また、私、布仏虚會計並びに布仏本音書記は次の生徒会には参加しないことをこの場で宣言させていただきます』

『選出方法の採決ですが、賛成票が8割を超えましたのでこちらでも可決となります。採用案の突き詰めに関しましては、私達臨時生徒会と学園長を中心とした職員で行います。詳細が決まり次第、各クラス担任を通じて公布し、すぐに施行という形になります』

会長辞職とか俺の予想の斜め上の展開になったけど、やり返せたとはいえやり返せたな。それにしてもこの生徒総会。虚先輩の独壇場だったな。まあ事が事だけに教師陣と事前に話をしてあったんだろうけど。

次の会長はまともだといいなあ。切実に。

第22話

私には姉がいた。優秀で、何でもできる姉。周りの誰からも認められ、慕われる。いたずらが好きで、しょっちゅう周りを困らせるけど、みんな「しかたないなあ」といった感じで姉を許容した。学生の身ながら家督もついで当主となり、家業もこなしている。ISでは自由国籍をもってロシアの国家代表に上り詰めた。代表候補生ではなく、代表にだ。

私は姉が嫌いだ。はじめはコンプレックスだった。優秀な姉と駄目な妹。いつもそう言われた。事実だった。姉と比べたら私はあまりにも出来なかつた。親戚の口さがない人には「出涸らし」と直接言われもした。

だが待ってほしい。私は本当に出来ない子なのか。出涸らしなのか。私は常に努力してきた。勉強も、運動もだ。中学に入る頃には高校でやる内容に手をつけるくらい先に進んでいた。中学三年間はテストで主席を譲ったことはない。学園に入るまでは毎朝のジョギングを欠かしたことはないし、筋トレも毎日やってた。

ISが普及してからはISの勉強もして、適性試験も受けて、皆さんの訓練も乗り越えて代表候補生にまでなった。

私は本当に出来ない子なのか。そんな疑問を持って代表候補生になった頃、姉に言われた。

「あなたは何もしなくていいの。私が守ってあげるんだから」

ダメだった。理解した。ダメだった。納得した。この人と私は価値観が違う。見ているものが違う。住んでいる世界が違う。

私はああはなりたくない。ああも自然に他人を見下せるイキモノになりたくはない。

私は関わるのをやめた。アレを目標とすることをやめた。そうし

て初めて答えが出た。

私は出来ない子じゃない。世界にどれだけ三年間学力トップで、運動も出来て、ISの代表候補生になれるオンナノコがいるんだ。私は少数派だ。トップクラスじゃないか。

そう考えて、気が付かされた。アレを追いかけ続けてた私は、努力に逃げ続けてた私は、他人との距離の測り方を知らなかった。友達があなかった。これがネットでうわさの『ぼっち』か。悲しくなった。そして、嬉しくなった。

私は特別なんかじゃない。普通の子達が友達を作って、遊び、友情を深め合い、恋に恋して、失恋もしたりして。そんな時間の全てを努力に逃げてただけ。振り分けるべき比率を間違えて10対0にしてしまっただけの、普通の子だった。

そんな時に見つかったのが織斑一夏。世界でただ一人ISを動かせる男の子。

IS学園に入学するんだろうなとは思ってた。けど、関わることはないのかとも思ってた。そんな矢先に来た連絡が「織斑一夏が政府に専用機を要求して、政府がこれを許可した。そしてその製作をうちがするようにとの命令が出た。だから君の専用機の開発は一時凍結になった。すまない」だった。

倉持技研第二開発室。いつもは人であふれてたこの部屋が、今は私一人。そして作りかけの式式。がんばってみようと思った。私一人じゃ無理だとわかってる。いずれは誰かの手も借りないといけないだろう。でも最初のところくらいは私ひとりで出来るだけがんばってみようと思った。そこまでがんばれた私なら、誰かに手を貸してもらう事もがんばれるかもしれないから。

入学してすぐ、学園に許可をもらって格納庫のスペースを借りて、整備室の使用許可も取って、いざというところで、邪魔が入った。原因はアレだった。

1年早くIS学園に入学した姉は、早々に最強の力を持って生徒会長長の座に就いたそうだ。それは去年のうちから知っていた。だけど、

いたずらが過ぎたらしい。最強が生徒会長に就くことには異論はないけど、いたずらによつて引き起こされるトラブルは許容できないぞうだ。私に言うな。そう、私に言うな。2、3年の先輩達が『会長の妹の私に』何とかするように言つてくれと、何人も来た。中には脅すようなセリフをはく人もいた。私は関係ないだろう。家族に言つて何とかするんだつたら、世界中の悪徳政治家の家族のところに行つて来いっていう話だ。

だがそれ以上に邪魔だったのが姉本人だ。去年一年は姉が寮生活ということもあつて平和だったんだが、私も同じ寮に入った今年、姉は過保護をこじらせていた。だが、私が姉に見切りをつけたことを感じ取つてはいたらしく、物陰からチラチラ覗き見るだけ。学園生活のうち3分の1は姉に見られている。ストーリーカード。イライラがつくる。私に関わつてないで仕事をしろという話だ。姉のストーキングを不審がる先輩から何とかしてくれといわれた。私に言うな。本当に私に言うな。

たった半月の学園生活でストレスが恐ろしいことになつてたときに、織斑一夏に会つた。というか、織斑一夏が私の部屋に来た。ちがうかな。私達の部屋に、ルームメイトである本音を訪ねてきた。

私は以前、気になつたことがあつた。織斑千冬という優れた姉を持つ彼は、ストレスを感じないのだろうか？と。だから式式のこととはとりあえず置いといて聞いてみようと思つた。

まあその後のことはちよつと黒歴史だ。初対面で愚痴をぶちまけるとか、恥ずかしいにもほどがある。だけど、友達が出来た。初めての友達だ。まあ、本音がないわけではないんだけど、あの子はあんな風でも私付の使用人という立場を最後の一线で保っている。だからどれだけ仲がよくても主人と使用人の関係を越えることはないんだと思う。で、一夏だ。私が胸の奥に溜め込んでたものの一部を受け止めてくれた。

救われた気が、した。

私は私のままで良いんだと言われた気がした。

一夏と友達になつてからあつという間に、他の友達が出来た。その

全てが他のクラスの子だったけど。そしたらクラスの子とも話すようになった。すごいことだと思う。たった一人友達が出来ただけなのに、あつという間に友達が増えた。クラスの子からも「友達じゃん。なんかあつたら手伝うよ」と言ってもらえた。その後の「更識さんはちよつと抜けてて心配だもん」という言葉は納得出来なかったけど。私は、私を取りこぼした時間を取り戻せはじめたんだと思う。人との距離の測り方をこれから学んでいく。

そのきっかけを作ってくれたのは、一夏だ。最初の友達。私のヒーロー。私の、大事な人。人との距離に疎い私には、この想いが恋なのか憧れなのか、はつきりとはわからない。だけど、だからこそ、大事に育てていきたいと思ってる。

そう、だから。私は牢屋格子の向こうに転がされている、『姉だった人』を見下ろした。

「無様だね」

吐き捨てた言葉に返事はない。手足は拘束され、口かせもかけられているから当然だ。

「ロシアの国家代表資格を剥奪されたんだってね。あわせて国籍もなくなつたそうで」

出てくる言葉は自分のものとは思えないくらい冷たい。

「更識の家はとりつぶしが決まったよ。私は当主になることを放棄した。私には縁のない世界だと思ってるから」

私は私の選んだ道を生きていこうと思つたから。

「どこもかばつてはくれなかつたんだって。むしろ取り潰しに積極的だったそうだよ。父さん達も」

そう、両親も更識家をつぶすことに積極的に動いてた。責任を更識楯無に押し付ける形にすることで、自身に責任がかぶるのを回避したらしい。

「昔はさ。姉さんのこと好きだったよ。何でも出来るすごいおねえちゃん。憧れだったんだと思う。けど、それが苦痛になっていって。今は嫌い。私の大切な友達を盗聴するだなんて。それも、私を理由にして」

唯一自由な目から、ぼろぼろと涙がこぼれてる。でも、許さない。同情もしない。

「なにもかもが私と違うと思ってたけど、人との距離の測り方をわかってないってところだけは、私達そっくりだったんだね」

私は踏み込み方を知らなくて、姉は踏み込み方を間違えてた。

「最後の最後でちよつとした発見だったよ」

最後という言葉に反応したのか、目を大きく見開かせた。

「父さんと母さんは、姉さんを最後まで世話するためにここに残るそうだけど、私はもう戻ってこない。更識の家には子供は一人しかいなかったってことになるみたい。じゃないと私、代表候補生でいられなくなるから。私が自分でつかんだモノ、手放さないよ」

だからこの後、この家の敷地を出たら、私はこことは関わりのない人間になる。戸籍上は孤独だ。一夏の立場に似た立場になることを嬉しく思うのは、私が歪んだからかな。

「だから、さよなら。私の姉だった人」

踵を返して、座敷牢を後にした。

無性にみんなに会いたくなかった。鈴がいて、シャルがいて、本音がいて、そして一夏がいる。いつものあの場所が恋しくて仕方ない。

第23話

あれから数日、虚先輩の提示した詳細の決まった会長選出案が公布され、これから色々と会議を経て新会長選出が行われるらしい。

ちなみに痴女会長はすでに退学処分となった。盗聴器が更に複数の部屋で発見されたそう。虚先輩と山田先生が口外禁止を前提に教えてくれたのだが、候補生の部屋全てにあったそう。それ以外にも三年の先輩の中で海外での就職が有力視されてる人や、二年の先輩で海外の企業が目を付けている生徒の部屋にもあったとか。候補生以外の詳しい個人名は聞かなかった。たぶん聞いても教えてはもらえなかったと思う。

で、候補生の部屋から見つかったのがかなりまずかったらしく、各国からロシアに抗議の嵐となったそうで、即日ロシアへの出向が命じられたそう。んで、そのまま代表を降ろされてロシア国籍剥奪となったらしい。追い討ちをかけるように日本政府から日本国籍取得の不許可が宣言されたらしい。他の国も同じように国籍取得の不許可宣言を行ったそうで、現在日本にある更識邸にいるそうだが、監禁状態だそう。

あとこれは簪から聞いたんだが、諜報一族としての更識家は取り潰しになるそう。なんでも、日本政府お抱えの諜報組織にも関わらず、当主がISのロシア国家代表になっていた。その事実が日本政府としては立腹ものだったそうで、今回の盗聴事件が明るみになる体たらくの組織を抱えておく理由は無いそう。まあ、言わんとすることはわかる。あの痴女会長は我侪勝手が過ぎたって事だろう。

簪はそのまま日本の代表候補生を続けられるそう。俺も一緒に動いたとはいえ、今回の痴女会長リコールの発起人であり、倉持技研の件もある。それに代表候補生の地位は自身の実力で勝ち取ったものだから家は関係ないそう。けれど、簪は更識家との縁は切れる形になるらしい。簪曰く「更識って名前だけど、更識家とは関係のない一人ですよ。ってスタンスにしたいんだと思う」だそう。なんともややこしい。けどあれか、簪も俺と同じように独りになったのか。

で、今俺が何してるかというのだ。久しぶりの起動実験だったりする。学園からの立会人として山田先生が来ている。目の下が黒い。クマのレベルが上がりまくりじゃね？こう言っちゃなんだけど、よく倒れないな。

ともかく起動実験だが、体中によくわからないパッチを貼り付けられ打鉄を起動してただ待機。研究員の人たちは恐ろしく目を血走らせて駆けずり回ってる。パソコンの前に座ってる人たちなんてキーボードのタツチ音が削岩機のような音を立ててる。簪のキータツチも俺には及ばない領域だと思ってたけど、その簪を超えてるのは確かだ。上には上がいるもんだ。恐ろしい。

今回の実験に来てる研究員は以前と比べてかなり印象がいい。何がいいかって休憩が入る。30分やったら10分休憩を繰り返す形をとってくれる。しかも実験30分のうち最初と最後の5分に何をどうして計測するのか、計測結果とそこから読み取れることなんかを話してくれるから実験に対する苦痛が少ない。訳もわからないことをやるよりわかっている方が何倍もいい。

休憩中は山田先生と談笑する。………んだけど、時折山田先生の目が虚ろになる。山田先生あかん。その目はダメなやつや。

鈴にメールして、食堂のおばちゃんに体に良い食事を用意してもらおう。この実験終わったら食堂に強制連行しないと。

今日最後の実験が終わって、研究員に採取データ片手に結果を聞く。今日の実験では女性が起動するときに見られる変動数値との比較だったのだが、俺が起動する際に見られた変動数値も同じだったらしい。次回の起動実験は脳波を中心にデータ取りするそう。映画で見るようなゴツイヘルメット被るんだろうか。

制服に着替えて戻ってくると、山田先生が研究員の人から今日の結果データを受け取っているとこだった。ちよつとだけ待つと二人で頭

を下げてあつて終了したようだ。よし連行。

「山田先生。このまま食堂で夕食にしましょう。食堂もこの時間なら少なくなつてゐる筈ですし、このまま職員室戻ったら終わるまで抜けないでしょ？」

「う、うゝん。そうですね。後は今回のデータを確認して報告書を書くだけですし、今のうちに食事にしないと食べ損ねちゃいますよね」「じゃあ行きますか。いつだったか約束した食事、手作りじゃないけど今回はおごりますよ。先日また頼み事しちゃいましたし」

「あ、えつと、せ、先生が生徒におごつてもらうのはちよつとまずいかなあつて」

「気にしちゃだめですつて。日ごろのお礼ですつて。色々良くしてもらつて負担かけちゃってますから」

「な、なら、ご馳走になつちやおう、かなあ」

以前も思つたけど、山田先生押しが弱くてよかつた。

食堂で出された料理は、胃に優しく且つ栄養満点な献立だった。食堂のおばちゃんすげえ。

けど、山田先生の事何とか出来る範囲で何とかしないとまずいな。もういつ限界が来てもおかしくないぞ、アレは。

第24話

えー。朝の教室。静まり返った生徒と、仁王立ちする担任と転入生。虚ろな顔の山田先生。……………修羅場じゃねえかよ。山田先生の。ダメだろあの顔。現実（こつち側）見てないよ。クラス一同ドン引きだよ。

親仁王が言いました。

「挨拶しろ。ラウラ」

子仁王が敬礼しながら応えました。

「了解しました。教官」

あー。うん。軍（そつち）関係ですよー。織斑先生（アレ）を教官って呼ぶからにはドイツですよー。

「その呼び方は許可しない。学園では私は教師でおまえは生徒だ。織斑先生と呼べ。わかったらさっさと自己紹介をしろ」

「了解しました」

わかったって応えたけどさ、子仁王よ。敬礼しながら返事してる時点で、おまえはきつと何もわかってないと思うぞ。

「ラウラ・ボーデヴィッツヒダ」

いや、まさかそれだけかよ。

「そ、それだけですか？他に何か言うことは……………」

「ない。以上だ」

山田先生のフォローを切り捨てて断言しやがった。よし、山田先生の味方の俺としては間違いなく敵認定だな。見ろ、あの虚ろになった山田先生の顔を。あの状態になると会話が途切れることもあるくらいやばいんだぞ。マジで。

でもまあ、クラスのほとんどが理解したな。織斑先生（アレ）の指導を完全に鵜呑みにしていくと出来上がるのが、ラウラ（コイツ）だって。ブリュンヒルデ信奉者だったヤツも、結構ショックだったみたいだ。自分の行く末の一つの答えが目の前に現れたわけだし、当然っちや当然か。なんて考えてたら、目の前にラウラ（子仁王）がいた。「貴様がっ！」

なんて言葉と同時に頬を平手打ちされた。しかも全力で。何で全力か判るのかというのだ。俺、教室の床と接吻中。首、いてえ。理屈は分かる。椅子に座って呆けていた一般人が、真正面に立った、訓練された軍人に全力で平手打ちされたらどうなるか。相手が同年代の女の子だったことがマジで救いだ。同年代の男子とか、3、4歳年上の女性とかだったら病院直行だった。けど、マジいてえ。首が痛すぎて声がでねえし。

クラス全員絶句してるじゃねえか。悲鳴がきこえねえし。まあいきなり目の前でクラスメイトが張り倒されたら、絶句するよなあ。それか理解が出来なくて呆然とするか。ああ、ちくしょう。いてえ。

「な、なんてことをするんですかっ！」

「ふん、脆弱な。私は貴様が教官の弟などと、認めないからな」

なんだよ、それ。そんなくだらないことのために俺はこんな痛い思いしてんのかよ。

「ま……」

あ？

「また織斑先生ですかっ！ いったいどういうことなんですか。これは！」

あー。山田先生の限界が……。

「家庭の問題を学校に持ち込むし、政府からの通達を無理やり捻じ曲げるし、普段の仕事もほとんど私に丸投げじゃないですか。そのうえ、そのうえ今度はこれですか！」

あ、やっぱり仕事は丸投げしてんだ。あ、シャルが端末でどつかに連絡してくれたっばい。こっち見て頷いたから、きつと保健室だろう。床に落ちたときに結構音がしたから、動かさない方がいいと判断したようだ。マジ感謝。にしても痛い。何が痛いって呼吸するときの喉の動きが痛い。

「や、山田君……」

「そもそも何で私が寮の部屋割り考えないといけないんですか！ 私、寮母でも寮長でも寮監でもないじゃないですか。寮長は織斑先生でしょう！ なんですか『頼んだ』って。一方的に押し付けて！ それに対

外折衝も私がしてばっかりじゃないですか。織斑先生がそういった方面で忙しいからって副担任を私がすることになったのに、私がそつちもやってたら意味なんてないじゃないですか!」

あ、あかん。山田先生の死に掛けの理由が予想以上にブラック過ぎる。おそろくだけど、俺関係の交渉も押し付けられてやってるんだろ
うなあ。

「織斑君関係のこともそうです。『織斑のことは山田君に全て任せる』って、なんなんですか!ええええ。やりますよ頼まれれば。けど勝手に決めた上で事後通知って何なんですか!明らかに押し付けじゃないですか!自分が仲違いして気まずいからって丸投げじゃないですか!いいですよ!喜んでやりますよ!最近織斑君のグルー
プの気遣いが数少ない心の安らぎですよ!」

なんかもうごめんさい。そして入り口で入りあぐねている保健の先生。マジヘルプ。山田先生の勢いに負けないで。

「とうかですね。織斑先生は何なんですか!座学の授業はほとんど私。実技も指示出し以外は私。対外折衝も私。クラス業務も大半は私。寮長の仕事もほとんど私。職員会議も半分は私が出て、織斑先生はいったい何をやってるっていうんですか!大体アレです。夜に書類を届けに行ったときなんて、ほぼ毎回お酒飲んでるじゃないですか。私なんてそんな時間もないのに!最近胃がストレスで荒れすぎてアルコールなんて摂取出来ないですよ!」

うん。あれだ。山田先生なんで生きてるの。俺が言うのもなんだけどさ、聞く限りじゃ働きすぎにもほどがある。あ、冷シッブ気持ちいい。だいぶ痛みが和らぐ。

「決めました。決めましたとも。寮長の仕事と対外折衝に実技の授業は今後一切やりません。そして私がこのクラスの担任をやります。それだけで私の教師生活は充分です。充分すぎます。これ以上やれません!」

山田先生大絶叫。そして倒れた。ここからじゃ倒れた山田先生が見えないんだが、大丈夫だろうか。保健の先生が慌ててそつちに向かったから大丈夫だろう。俺はクラスメイト4人がかりで担架に乗

せられて保健室に運ばれていく。担架の上から見た織斑先生は呆然と立ち尽くし、ラウラ（子仁王）は俺の席の前にたちながら、倒れた山田先生を見下ろしていた。表情は見えないが、たぶん見下してる系だろう。見た感じそういう感じのヤツだったし。まあなんだ。敵で間違いはないということだな。

ちくしょう。首の痛みが本気でやべえ。覚えてやがれ。

第25話

「はあ？」

あの教室の惨劇から3日後。俺は絶賛入院中。ただし保健室。外の病院は護衛の問題から入院できないと言われたそう。

いや、それよりも今問題なのは。

「なんで子仁王が入院することになってんだよ」

「その前に子仁王って何よ」

呆れたように溜息をつきながら鈴が聞き返してきた。現在保健室内には、ベッドの主の俺、鈴、シャル、簪の四人。のほほんさんは臨時生徒会の仕事に追われているらしい。新生徒会が発足したら自由だからがんばる。と自身を慰めながら生徒会室に向かったそう。

「いや、転入初日の登場がき、織斑先生と二人並んで仁王立ちだったから、親仁王と子仁王」

「ちよつ。なにそれ。アタシも見たかった」

「ああ、あの立ち方がニオウダチっていうんだ。うん。確かにそつくりだった」

「それよりも、子仁王の入院だよ。なんでだ？」

俺が運び出されてからどんな展開を経たら、アイツが入院って終わり方に行き着くんだよ。

「ボクもナギから聞いた形なんだけどね」

ナギ？ああ、鏡さんか。俺の真後ろの席だから、あの後の展開は特等席だよな。

「ボク達が一夏を運び出して、保健の先生が山田先生の状態を確認し始めたタイミングで、織斑先生がラウラさんに声を掛けたんだって。まあ状況が状況だから叱るつもりだったらしくて、結構声に怒気があつたらしいんだけど。織斑先生が『ラウラッ！』って言った途端に、彼女蹲ってガタガタ震えながらひたすら『申し訳ありません教官』って繰り返して続けて、最後は白目向いて倒れたんだってさ」

え、なにそれ怖い。

「なにそれ怖い」

「なにそれ怖い」

「どこの怪談話だよ。怖いにも程があんだろ。」

「彼女、ボクのルームメイトになる予定だったからさ、保健の先生に容態を聞きに行ったんだ」

「シャル、ラウラ（アレ）のルームメイトか。大丈夫か？ホラー的な意味で。白目むいて倒れるとか。ホラーじゃん。」

「あの日の夜には目を覚ましたんだって。倒れた経緯もあるから保健の先生立会いの下で事情聴取したらしいんだけど」

「あー。その区切り方は聞いて後悔する系だ。鈴と簪も察しがついたみたいだ。微妙そうな顔してるし。シャルも俺らの顔見て苦笑するなし。」

「ちよつとへビーだよ。彼女試験管ベビーなんだって。それも選りすぐれた兵士を作るために遺伝子操作をされた」

「じーぞす。」

「で、小さい頃から軍事訓練に明け暮れて、最高成績を叩き出してたらしいんだけど」

「ISが登場しちゃったわけね」

「そう。で、ドイツ軍はIS適正を上げるために『眼』を移植したんだって」

「それって眼帯してた左目のことか？」

「……眼つて？」

「さすがに詳しくは聞けないよ。ドイツ軍の機密みたいだし。でも彼女、移植に失敗して成績トップから一転最下層」

「天国から地獄、ねえ。」

「で、最強の兵士のために生まれたはずなのにつて落ち込んでたところで登場したのが織斑先生なんだって」

「ということはこちらから話の本題なわけだ。」

「彼女の話だね。織斑先生の訓練方法は極めて実践的な反復練習なんだって。まあ軍隊だとそういうもんなんだろうね。けど、落ちこぼれになってた彼女にはかなりの苦痛だったみたい。常に怒られ怒鳴られ、出来るようになるまでひたすらに反復。その日の目標を達成す

るまでは食事も睡眠も無しだったそうだよ。部隊全員」

れ、連帯責任マジ怖ええ。自分が出来るまでみんなが休めない。それって恐怖だろ。いじめの領域超えてるって。

「食事と休息がかかってるから、部隊のみんなが必死に教えてくれたそうだよ。彼女も必死に覚えたんだって。それでも最初の頃は散々で、何度も織斑先生に懇願したんだって『申し訳ありません、教官。部隊の皆は悪くないんです。彼らには食事と休息を』って。まあその続きは察しの通りだと思うよ」

懇願は聞き入れられず、全員食事と休息なし。ねえ。

「うまくいかない反復の中で何度も繰り返したんだって『申し訳ありません教官』って。怒られるたび、怒鳴られるたびに。次第にその地獄が実を結んで、彼女は代表候補生に上り詰めるんだけど、心は傷だらけだったみたい」

「ならなんで、その子は織斑先生を慕ってるの？どう考えてもトラウマの対象じゃない」

簪よく聞いた。トラウマ少女が忠犬にジョブチェンジした理由が知りたいわー。

「えっとね。彼女が代表候補生になる直前くらいに織斑先生はドイツを去ったらしいんだけど。うーんうまく説明できない。ちよつと流れだけ簡単に言うよ」

よしこい。三人がかりで噛み砕いて理解してやろう。

「えっと。何で私がこんなに傷つかないといけない。私が落ちこぼれだからだ。今は落ちこぼれじゃないじゃないか。だれのおかげだ。織斑教官だ。織斑教官のおかげで私はトップになれた。織斑教官の指導は間違ってたなかった。じゃあ何で私は傷ついている。織斑教官の愛のムチというやつだろう。織斑教官は私達を愛してくれてたんだ。なのになぜ織斑教官は今ドイツにいない。家族の元に帰ったからだ。家族、弟、そのせいで織斑教官が私達の元を去った。弟許すまじ。って流れらしいんだけど。ボク、理解できないんだよね」

いや、俺らも理解出来てないから。

「あー。なんかわかんないけど、アレでしょ？鬱状態で色々考えてた

ら思考がスライドしまくったってことでしょ。変な方向に」

鈴、ナイスまとめ。理解は出来ないけど納得はした。

「それ、代表候補生やっていけないんじゃない？」

「簪、ビンゴ。昨日怒鳴られた瞬間に色々フラッシュバックして、一人で整理したらトラウマ再発しちゃったみたいで、ISも起動できない状態みたい。当然代表候補生も続けられないらしい。このまま精神病院に入院する線を軸に話を進めるんだって」

結論。子仁王は織斑先生(アレ)のせいで精神に異常をきたしてた。今はそれを自覚して入院中。いずれは精神科の病院に転院。……俺、謝りに行ったほうがいいんじゃないか？一応、アレの弟だったわけだし。当時は。いや、トラウマ再発中って事は些細なことであつた状態になるんだらうから、この間のことや、織斑先生(アレ)を連想させる可能性のある俺が言ったらまずいか？

「一夏、お見舞いは行かないほうがいいよ。今の彼女、臆病度が増したウサギみたいだったから、一夏が行ったら多分ダメだと思う」

「会ったのか？」

「うん。昨日の夜に10分だけ面会時間をもらえたんだ。一夏に伝言を預かってる」

伝言……か。

『「ごめんなさい。謝って許されることじゃないと分かってるけど、ごめんなさい」だって」

「そっか………。ごめんなさい、か」

そっか。

いつか、傷が癒えた頃に、会ってみたいな。で、「気にすんなよ。あれくらい」って言ってやらないと、な。

第26話

「そういや、一夏をぶっ飛ばした件はどうなるの?」

鈴さんや。きれいに纏まったところだったのに、なぜ蒸し返す。

「本格的な診察の結果待ちになるとは思うけど、ドイツが4、織斑先生が4、彼女が2の比率ぐらいになるんじゃないかなあ。慰謝料の支払い」

シャル。それはにこやかにいうことじゃない。そして簪うなずくな。

「ま、俺らがここで頭ひねっても仕方のないことだよ」

「だね。それより一夏。首、大丈夫」

あー。首ねえ。

「痛み自体はほとんどないんだけど、鞭打ち状態だったから、安静のために後数日はコルセット付けとけて」

そう、コルセットだ。首固定されて意外と不便だったりする。そして寝返りがしづらい。

「そっか。まあ大丈夫なら、言われたとおり後数日おとなしくソレ、つけときなさいよ」

「うん。無理はダメだよ?」

へいへい。わかっていますよ。ソレよりも俺が気になってることがあつてだな。

「山田先生。どうなった?」

そう、山田先生だ。ぶっ倒れてから先の情報がない。大丈夫なんだろうか?」

「問題ないよ。昨日目が覚めて、今日から復帰だった。ただ、あのときの記憶がないみたいなんだよね。昨日お見舞いに行ったら、自分が何で入院してるのかわかってなかったよ」

シャル。それは問題大有りじゃないでしょうか?」

「あの大爆発を本人が忘れてても、みんな覚えてるしね。それに、織斑先生が自分から担任を降りたよ」

え？うそ。マジ？織斑先生（アレ）担任降りたの？

「山田先生が繰り上がりで担任になって、座学とクラス業務に、一夏関係の学内処理だけになるみたい。これは榊原先生に聞いた」

うん。知らない先生だ。けど教師情報なら間違いないのかな。

「山田先生のお見舞いは私達も行ったけど、顔色よくなってたわ。二日間死んだように寝てたらしいから、少しは体調回復したみたいよ」
それはなによりだ。あの日の山田先生の顔色は土色だったからな。
アレは映画とかで死ぬ一歩手前に人がしている色だった。それを思うと、ホントによかった。

「けど、今度謝りに行かないとだな。この2ヶ月でかなり無茶なお願いしてたからな」

「私も、行くよ。姉の件でかなり負担かけたから」

「ならボクもだね。色々と手続きをしてもらったからね」

「あくもう。一夏が退院したらみんなで行けばいいのよ。休みの日にも。で、食堂でまたお菓子食べながらのんびりダべればいいのよ」
だな。とりあえずは一件落着。なのかねえ。

にしてもあれだ。コルセットはむれる。かゆいぜ。

第27話

「皆さん。もうすぐ中間テストになります。一年生は座学テストのみになります。しっかり復習をしてテストに備えてくださいね」

山田先生はここ最近、かなり体調を戻している。あの日のことは完全に覚えていないらしいけど、なにがあったのかは全て聞いたそう。数日は教室に来ると顔を真っ赤にしていた。クラスの何人かは「スイカの上にりんごが乗ってる」といつていた。わからんでもない。にしても、4月最初の頃の癒し度満点の笑顔が戻りつつあるのは喜ばしいことだ。

でもそうか、もうすぐ6月か。4月5月と色々ありすぎたからな。もうすぐ6月といわれても、なんとなくしつくり来ないんだが。それにしてもテストか。

「といつても、今回のテストはそんなに気を張らなくても大丈夫ではあるんですが」

え？頑張らなくていいの？

「えっと、先生。テスト頑張らなくていいんですか？」

とりあえず代表して聞いておく。

「えっとですね。今回のテストでは、この2ヶ月での皆さんの習熟速度を確認するものなんです。それでですね。その度合いによって今年の残りのカリキュラムを組みなおすんです。ですのでありのままの状態で挑んでくれていいんです」

「けど」と山田先生は続ける。まあそうおいしい話はないってことなんだろうな。

「度合いが遅ければ遅いほど、三学期がたらくるので、ある程度進んでいたほうが安定して一年を過ごせますよ」

結局はしっかりとやっておけってことだな。こと学校の勉強に関して、楽な道はないってことか。

「にしてもあれねえ。ここの教師達ってえげつないわね」

それは納得だ。

「りんりんくん。どゆこと〜?」

「ええい。りんりんはやめなさいって言ってるじゃないの。つまりね、私達生徒は必ず勉強するようになってるのよ。頑張らなくてもいいっていう言葉を信じたヤツは必然的に成績下位になって、取り戻すために勉強する。信じなかったヤツは成績を維持するためにちゃんと勉強する。この学園は国立だから、成績を落とすと自身の将来に完全に直結しかねないから、成績下位で安穩とするようなのはいいからこそその所業よ」

将来 I S に関わっていくんだったら、成績が良いに越したことはない。そのほうが就職に有利だからな。どの企業だつて成績がいい人間を欲しがる。だからこそ、このやり方。

「そっか。勉強しなくて成績落とす人が実際に出たら、本人達は勉強すれば取り戻せると思って頑張るし、成績落とさなかった人たちは、勉強しなかったらどうなるのかの実例が存在するから勉強を疎かにしないんだ」

はい。シャル正解。だからえげつないんだよ。最終的にみんな勉強するようになるんだから。

「にしても簪。珍しく専用機製作作業やってないのね。普段はこうやってだべってるときでもウインドウの一つは開いてるのに」

「成績落としすぎると学園の施設使わせてもらえなくなるから、テストはしっかりとりにしてるの」

教師陣えらい。簪をうまく制御してる。その辺の約束事を決めてなかったら、テスト期間中でもお籠もりしてただろうからな。

「けど、ただおとなしくテスト受けるっていうのも、面白くないわね」

あー。鈴が悪いこと考えてやがる。そしてこういうときは高確率俺も巻き込まれるんだよなあ。

「あまり面倒なこととはするなよ。具体的にいうと、俺の負担は少なめで」

「だいじょーぶ。あたしにまっかせなさい」

それが大丈夫じゃなさそうだから、心配してるんだっての。

第28話

『中間テストランキング戦 報酬：チーム織斑手作りお菓子』

やりやがったな鈴。俺の負担が大きいじゃないか。鈴を半眼で睨むが、笑顔で返された。

「ところが。これには穴があるのよ。よく見てみなさい」

言われて、用紙を読み進める。

『参加登録者には手作りクッキー一枚プレゼント。チーム織斑全員よりも順位が上の人には織斑一夏お手製お菓子の出るお茶会に招待。全員を抜くことが出来なかった人は、抜くことが出来た人『以外』の誰かの手作りクッキーをプレゼント』

えーと、どういうことだ。ややこしい。

「つまり、まずはトップ賞ね。あたし達全員を成績で抜くことが出来たら、休みの日にたまにやってるお菓子パーティに招待する。これはわかりやすいわね」

まあ、アレは俺がお菓子作りたい欲求を満たすっていう一面もあるから、人数が少し増えるだけだな。

「次ね。たとえばの話よ。あたし達の順位が一夏、シャル、あたし、簪、本音だとするじゃない？一夏とシャルの間の順位の人は一夏のクッキー確定。あたしと簪の間の順位の人は一夏、シャル、あたしの三人の誰かのクッキー。本音より下の順位の人参加賞のクッキーだけ」

あー。なんとなくなかつたけどさ、それって参加者全員に俺ら全員が抜かれたときが地獄なんだが。

「あんたの考えてることもわかってるわよ。けどあんたの負担は殆どないわよ」

俺の負担が少ない。ねえ、どこまでがホントなのやら。

「まず間違いなく、私達全員を抜く可能性のあるヤツは片手で足りる。そのうちの一人はイギリスの代表候補生だから参加しないわよ。で、あたし達の中での成績順って、簪がトップ、次があたし。ちよつと下がってシャル。そこから少し離れて一夏。僅差で本音よ。簪の成績

トップは言わなくてもわかるでしょ。あたしがシャルに勝ってるのは日本語の理解力の差。一夏がそこから離されてるのは、理由は明白よ。アンタ、IS専門の授業の理解度を7割で放棄してるでしょ。一般科目でのトップはアンタだろうけど、IS専門教科がそんなんじや差が出て当然よ。本音に関しては何どの教科も平均より上できれいに纏まってるらしいから、まあそんなもんでしょ」

見事なまでの分析だな。全員の特徴をはつきりと認識した上での分析なんだろうな。だけど、簪が絡んでる可能性が高いな。鈴だけでここまで理詰め企画考え付かないだろ。もしかするとシャルとのほほんさんも絡んでるかもな。

「で、本音が大体全体の真ん中ちよい上だから、参加者の殆どが参加賞のみ。成績上位に食い込んでくるようなのは、確実にアンタより成績上だからあんたの負担は少ないのよ。で、私達全員を抜くところ出るヤツが片手で足りるってのは、代表候補生なめんなってところね。私達が候補生って地位を手に行っているのは伊達じゃないのよ」

つまり俺は参加者総数の5分の1プラスちよつとのクツキーを作るだけで良いのか。

「でもそれだと簪の負担が大きくないか？」

「そこには別の思惑があるから良いのよ」

さいですか。乙女の秘密ってやつかね。

「まあ他の三人が納得してるんなら良いけどよ。今回また変な企画考えたよな」

「だって学園側の思い通りってのも、なんかしゃくじやない？」

気持ちをよくわかる。よくわかるけど。

「山田先生の負担増やすなよ。やっと復活したんだから」

「あ、そこも大丈夫。買収済み。お菓子って偉大よね。生徒が勉強に取り組んでくれる内容だから目をつぶってくれるって」

手際の良いことで。しかも勉強イベントっていう、否定しにくい内容だからな。山田先生も少しづつ吹っ切れてきたな。そうやってストレス溜めなくなっていけば良いんだけどな。

まあ、俺もそこそこテスト対策やつくかな。世界唯一の男性操縦者の成績が悪かったとなると、うるさそうだし。

それになんだかんだで、このイベントの参加者も多そうだしな。のほほんさんも巻き込んで勉強会するか。少しでも負担減らすために。

第29話

あ。つと言う間にテスト期間が過ぎて、結果張り出しの日。ハイテク機器を大量に導入してるIS学園なのに、テスト結果の張り出しが手書きなのは何でなのか。山田先生に聞いたら、苦笑いされた。慣習というヤツなのか。

順位上位陣は代表候補生独占。1位簪、2位鈴、3位シヤル、4位オルコット。うん。ある意味予想通りだな。そして意外というかなんというか、ある意味予想通りというか、留学生組がその後が続いてる。彼女達は代表候補生たちとは違った意味で国を背負ってるんだろう。努力の度合いが違ったということだろう。俺とのほほんさんは37位と39位。ちよつとどころかかなり奮闘した。

今回の鈴主催のイベントに参加したのは一年生の生徒の4分の3。俺達は一人当たり50個程度作れば問題ない形となった。まあ鈴の思惑通りになったということだな。

けど俺たち一年の興味というか、関心ごとは、すでにイベントから離れていた。

臨海学校だ。

学園側の意図を引つ掻き回そうとした鈴より、先生達の方が一枚上手だったってことだろう。イベントでみんなが順位表を見に来るのを理解したうえで、順位表の横に臨海学校の概要を張り出すことで、一年生の興味をあつとという間に臨海学校に釘付けにするとは。鈴も理解した様でちよつと不機嫌そうな顔をしてる。なんだかんだ言っても先生達は大人だったってことだ。あー。違うな。俺達が子供だったってことか。

だけど報酬はきっちり配布しないとな。次の休みはクッキー作りか。臨海学校の買出しもしないといけないんだろうな。忙しい週末になりそうだ。

「鈴。やられたな」

「悔しいけど、私もまだまだだつてことよ。精進しないとね」

悔しそうに吐き捨てるけど、どことなく晴れやかでもある。目標が出来て嬉しいんだろうな。にしても、ごく普通に精進って言葉が出てくるんだから、簪を抜き去って1位を取ることも出来たんじゃないか？いや、けどテスト勉強をしてた簪はすごかったな。とてもお世話になりました。っと。

「そっさいや3人は？」

順位表の確認にも来てないみたいだが。

「簪は式式のところ。本音は新生徒会への引継ぎ。シャルは山田先生に呼ばれてったわ。順位はメールで送つてあるわ。あ、そっさいや週末二日とも外出申請出しときなさいよ。土曜はクツキーの材料買いに行つて、戻つてそのままクツキー作り。日曜は臨海学校の買出しね」怒涛の予定で、こつちの予定無視だな。まあ元からそのつもりだったからいいけどさ。

土曜、日曜ともになぜか鈴たちとはぐれて簪と二人で買い物をする事になった。

だが鈴。物陰からにやけた顔で覗いていたのは、ばればれだったからな。

簪の水着は当日までのお楽しみといわれた。ちよつと期待しておこう。

裏01話

そっか。ちーちゃんの願いも終わっちゃったんだね。しかもいくんの手によつてつていうのは皮肉かな。

じゃあ。私の夢をはじめようかな。ずっとずっと待っていた、私の夢を

深夜のIS学園。機械仕掛けのうさみみに、不思議の国のアリスを彷彿させるエプロンドレス。篠ノ之束は一人、歩いていった。

「そろそろ出てきなよ。いつまでもストーキングされるのは束さん、好きじゃないんだよ」

束の呼びかけに、背後の闇の中から織斑千冬は姿を現した。その表情は険しく、纏う雰囲気も剣呑だ。

「束。なぜここにいる。なにが目的だ」

睨み付け、糾弾するように投げられた言葉に、束は振り返ることなく応えた。

「お別れ、だね。あと、会いに来たんだよ」

「誰に、会いに来た。答えろ」

「まずはちーちゃんだよ。後は誰だっけ？顔はわかるんだけど名前知らないや。ちーちゃんしってる？」

口調にはいつものようなおどけた風はなく、恐ろしいまでに平坦。それが千冬には恐ろしく感じた。

「私には顔もわからないのに、わかるわけないだろうが」

「そっか。まあ、いつか。まずはちーちゃんへの用事を終わらせようかな」

そこで初めて、束は振り返って千冬を見た。ただそれだけなのに、千冬の体は恐怖で震えた。目の前にいる束が、見たことのないナニカに見えた。

「ねえ。ちーちゃん。まだ望みは変わらない？あの日から、変わらないよ？」

東から無造作に投げられた問いかけ。その問いに、千冬の体は東からもわかるくらいに揺れた。理解したからだ。東がここに来た理由を、そしてこの対峙の結末を。

「変わって……しまったよ。私の望みはもう理由がなくなった。ああ。そうだ。なくなってしまったよ」

「うん。そうだよね。東さんは知ってたさ。もちろん。けど、ちーちゃんの口から直接聞くことに意味があるんだ。だから、うん。わかったよ。さよならだ」

決別の言葉。

東が一步、後ろに下がった。それが千冬にはすごく、すごく悲しかった。

「じゃあね。ちーちゃん」

もう一步、下がる。

「さようなら。織斑千冬」

さらに下がる。千冬は、動くことが出来なかった。

「私は、あの日から、君のことが嫌いだったよ」

東は闇に解けて消えた。

千冬はしばらくの間、その場に立ち尽くしていたが、踵を返して歩き出した。

「ありがとう、東。私はお前のことを嫌いではなかった」

千冬の頬には涙の後が一筋だけ、残っていた。

「終末を告げる鐘はなったよ。だから私は始めに行くんだ」東は闇の中でつぶやいた。

裏02話

ウインドウの端の時間を見て、簪は顔を上げた。夕食の時間になるはずなのに、誰も来ない。

「ふうん。きみが『そう』なんだ」

唐突に聞こえた言葉に、簪は跳ねるように振り返った。

隅に置かれたコンテナの上に腰掛けたアリス。うさみみをつけたアリス。簪はその顔を知っていた。

「篠ノ之束博士」

ISの生みの親にして、人類最高の《天災》。

「うんうん。束さんは有名人だからね。君みたいなヤツでも私を知ってて当然だね。私は君の事を知らないけどさ」

束は「びよん」と口に出しながらコンテナから飛び降り、「すたっ」と口に出して着地した。

まっすぐ立った束は簪より頭半分以上背が高い。

「君は面白いものを作るね」

一歩、近づいてきた。けれど。

「マルチロックオンシステム。うん。それはいいものだね。この束さんが認めてあげよう。そのシステムは賞賛に値するものだって」

また一歩、近づく。想像以上に。

「けど、残念かな。時間切れだ。待つてあげてもよかつたんだけど、束さんはこれ以上待てなかつたんだよ」

また、一歩近づく。恐ろしさは感じなかった。

「それに君、別の道を夢見たろ？」

「別の……道」

「そうさ、そしてそれは、尊いものなんだと思うよ。束さんには理解できないものなだけけどさ」

最後の一步、近づかれた。簪の目の前数センチに束が立っている。簪は見上げて、束は見下ろした。

自身の鎖骨あたりに押し付けられているモノに嫉妬と絶望を感じ

ないでもない簪は、ちよつとだけ悔しそうな顔をした。

「ふふん。東さんのぐらまらすばでーはすごいだろう」

悔しいが、すごかった。

「そんなことはいいいんだよ。君は残念胸だけどき。東さんはお礼を言いに来たんだ」

簪は虚を突かれ、呆然と東を見上げた。そんな簪を東は抱きしめた。

「君の作ろうとしていたものは、私の夢に役立つものだよ。私の夢の叶わない世界で、その存在は、確かに救いだつた。だからありがとう」

東はゆつくり簪から離れた。

「たぶん君の夢は、君の作ろうとしたこのコの活躍する世界は、来ない。私が壊すから。だけどこのコは、私の作る世界できつと活躍する。だから、ごめんとありがとう」

ゆつくりと東が下がっていく。

「君はいつくんと幸せに暮らすと良いよ。それが出来るように準備だけはしといてあげるよ」

「じゃあね」とつぶやいて、東の姿が消えた。簪は驚きながらも、I Sのステルス機能の応用なんだろうと思う。

東との会話を思い返す。そして顔を真っ赤にして座り込んだ。

「い、一夏と幸せに……………」

裏03話―第30話

「やあやあやあやあ。ひさしぶりだね。いっくん。元気にしてたかな。東さんは最近とってもハッピーさ」

放課後部屋に戻ったら、兎がベッドで寛いでた。お菓子の袋を広げて、雑誌を読みながら寝転がってる。

「どこから入ってきやがった」

普通にドアを指差すし。不法侵入を堂々と宣言するなよ。俺のプライベートはどこなんだよ。

「ねえ、いっくん。IS学園卒業したら自由だよ」

はあ？いきなり何言ってるんだ。ISがある限り、男で動かせるのが俺だけである限り、俺に自由なんてないじゃないか。俺の自由を奪ったヤツが何を言ってるんだ。

「今の社会が俺を自由にしないでしょ」

「ISはね。一つの時代の終わりを迎えるのさ」

うん。俺の言葉は無視なわけだ。まあ話を続けるのは良いが、ベッドに広げたお菓子の袋は片付けろ。布団が汚れるじゃないか。

「そもそも、今の使い方は予定にないんだよね」

「どういうことだ」

今の使い方？予定にない？予定にないって、いったい。

「聞かない方が良いよ。いっくんは。たぶん知るとつらくなる」

一瞬兎の目が優しくなった気がした。そこまで言われると逆に気になるところだが、聞かない方が良いのだろうか。だけど、この兎がここに来たってことは、それなりの理由があるんだろう。わざわざ直接会いに来て、そんな話の振り方をしたんだ。だったら。

「聞かせてくれ。知らずにいるよりは、知っていた方が良いと思う。それがどんなにつらいことでも」

「やっぱりいっくんはいっくんだね。そこは東さんもすごいと思えるところだ」

ベッドのふちに座りなおしてこちらを見た。

「今の使い方。女にしか使えなくて、戦う道具になった原因は、織斑千冬だよ」

え？

「あの女がそうしてくれと願ったから。そうしたんだ。そしてそれは、いっくんを守るためだよ」

な、なにを。なにを言っている。俺を、守る？

「ISを完成させた束さんは、一番最初に親友に自慢したのさ。『わたしはすごいだろ？』って。そしてペラペラとISについて語ってあげたのさ。したらあの女が土下座してお願ひしたんだ。『私が弟を守るために使わせてくれ』って。両親が失踪して間もなかったからね。必死だったんだろう。親友が大好きだった私は、願ひを聞き入れたんだよ。そうして起こったのが、いっくんも知ってる《白騎士事件》さ」
やめろ。やめろよ。

「あの女の願ひを叶え続けるために私に求められたのが、《狂人》であることさ。意味もなく、理由もなく、勝手をする天才。だからみんな、疑問に思わない。『こんなものを作る天才が、男だけ乗れないようなものを作るのはおかしい』って。それにほら、よくよく思い出してみなよ。一番古い記憶に出てくる束さんは、頭のネジの飛んだ変人だったかい？」

思い出す。昔、まだ姉弟の仲がよかった頃に、姉に連れられてうちにやってきた姉の友人は、“猪突猛進気味な姉をたしなめる優しい人じゃなかったか？”

「束さんは、私は、あの女の願ひを叶え続けてたんだよ。私の夢を潰してまで」

その人は、いつも星を見上げてた。『いつか宇宙に行くんだ』と語っていたじゃないか。そのとき確か、約束もしたはずだ。

「まだ年若いあの女が、いっくんを守るために望んだのは、最強であること。だからISを女にしか使えない様にした。だからISを武力

を持つて公開した。だからISが戦いの道具であることを許容し続けた。そう、すべては、織斑千冬が織斑一夏を守りたいがために」

ああ、クソツ！なんて、なんて滑稽な。ISがいらないと思つたのに、ISに関わりたくないと思つたのに、今のISのあり方の中心が、俺だつたなんて。俺を守るため？ふざけんな。なんだよそれ。なんなんだよ。

「でもね、もうおわつた。おわつたんだよ。いっくん」

膝から崩れ落ちた俺の頭を、ゆっくりとなでている。

「いっくんとあの女は決別した。そのときに私と織斑千冬の、契約と言う名前の、友情の最後の糸が切れて、今のISの時代の終わりが始まつたの」

そうか、だから、『ちーちゃん』じゃなくて『あの女』なんだ。今はもう、夢の邪魔をした、敵なんだろう。

「全てのISにはタイマーがセットされててね。それが動き始めた。もうそんなに時間を置かずにゼロになる」

世界で一番の天才が作つたものだ。そういうものが隠されてても不思議じゃない。

「そしてISは宇宙開発及び外宇宙進出用にしか使えなくなる。そして、性別の区別もなくなる。全ての人が乗れるようになる」

今の社会が、終わる。のか。

「いっくんの考えてる通りで間違いないよ。兵器としてのISの登場によつて一度壊れた社会は、ISが兵器として使えなくなることと終わるよ。私が終わらせる」

「でも」と言葉が続いた。

「それでいいんだよ。私が新しい社会を作るから。世界中のみんなが宇宙を目指す。そんな社会を作るから。だからいっくんは、自分の人生を楽しんで」

東さんが、離れていくのを感じた。

それを伝えるために、俺に自由を届けてくれるために、今日、ここに来たのか。

「束……さん。俺、自分勝手に生きようと思いません。今まで通りに。織斑先生を論破して、鈴と悪乗りして、のほほんさんとお菓子作ったり食べたりして、シャルとボケーっと時間潰してみたりして、照れる簪を愛でて、山田先生に癒されて。そんないつもを過ごしていきま
す」

「うん。たまにはメールして。アドレス残してるの知ってるんだから」

「はい」

「担任の先生の胸見すぎたらダメだよ。女の方は気付いてるんだから」

「はい」

「簪ちゃんをよろしく」

「いやです」

「だめ？」

「だめです」

「うん。やっぱりか」

「ええ」

「簪ちゃん。大事にしなよ。好きなんですよ」

「うん」

「よし。またね」

「また、いつか」

そして束さんはいなくなった。

『じゃあ私がいつか、いつくんを宇宙に連れて行ってあげる』

『うん。楽しみに待ってるね。束さん』

なかがき

これの一つ前の話を持って、メインストーリーは完結という形になります。それはなぜか。作品において、ISという兵器がなくなつたからです。

けれどこの話はまだまだ続く予定です。

この後書くのは臨海学校編ですし、学園祭も書きたいと思っています。

裏03話―第30話において、一夏が宣言したように、今までと変わらず生活していくからです。

この先はオリジナル要素が増えていくことになるでしょう。

なにせISが兵器として使えなくなるのですから。

けれど、オリジナル要素を入れなくてもかけることはあると思っています。

ここまで登場回数なんてすずめの涙だった、箒やセシリアの話もちよつと考えていますし、ラウラのその後も書きたいです。

五反田弾恋物語とか、黛先輩の話も書いてみたい。

駄家賊同盟が毒舌を吐く話をもっと書こうと思っています。

あと、感想でリクエストのあつた楯無視点の話や、虚先輩視点の話。かけることはたくさんあるので、結論としては、まだ続きます。

けれど、今月のような更新速度ではかけないでしょう。以前のような亀更新になつてしまいますので、そのあたりはご容赦ください。

それでは後のスペースで、裏シリーズの解説を少しだけ。

裏01話

東さんと、千冬姉の決別の話。

03話で語られる、演じられた狂人である必要がなくなつたので、口調が原作と時折乖離するという感じです。

そして最後に、狂人篠ノ之束から天才篠ノ之束になつて去つてゆく。そういう話です。

裏02話

束さんと簪さんの邂逅

千冬との決別が決まり、ISが兵器として使われることがなくなる。現行のISの武装のほとんどが、兵器としての用途を主軸としているため、宇宙開発には使えないと思っっている中で、束が見つけたのがマルチロックオンシステムです。束はこれを宇宙ごみの破壊及び回収に使えると思っただけです。

そして、天才だからこそ、努力を続ける簪を愛おしく思っだし、完成されない式を哀れんだのです。

裏03話―第30話

裏シリーズなのに通常のナンバリングがされるのは、視点が一夏だからです。

一夏の視点で束が始まりを語る。

そして、千冬に遠慮することなどないことを確信するとともに、自身を責める。そのための話です。

一夏と束は昔は仲が良かった。けれど、ISを発表する段階では束はすでに狂人を演じていたので、一夏のなかで、記憶にある姉の友人||篠ノ之束の式が成り立たなかったんです。

ですが、束の言葉で式が成り立ったときに、一夏は決意を新たにする。

今までと変わらない自分で生きていこう。と。

そうして、これから先に続く話でも毒を吐く一夏が居続けることになる。

そういうシリーズでした。

臨海学校編の前に無理やりねじ込んだ形になったのは、決してバトルを書きたくない。とか、ゴスペルさんどないしよ。とか思っただけではありません。

第31話

バスが揺れるに任せて、座席に体を沈める。ああ、車酔いしない体質でよかった。いや、車酔いって体質だったっけか？

バスの席割でもめたときはうれいものだね。俺の隣をめぐるの牽制しあってるのは、男冥利に尽きるってもんだ。動物園のパンダって考えは、浮かんですぐ捨てたが。結局は。補助席を移動しまくることで話がついた。オルコットと篠ノ之を始め、座席争奪に参加しなかった数人と、酔いやすい生徒が前方の席にまとめられてた。

俺は後ろの方の席をさつきまでちよろちよろしていたが、今は最後尾の席に座ってる。

クラスメイトの殆どが異様に浮かれている。理由は色々あるんだが、一番大きな理由は、今回の臨海学校での実習の全てが中止になって、特別講義が一度あるだけになったので、実質海に遊びに来ただけになったからだろう。俺も正直楽しみだわー。俺以外の男ってバスの運転手くらいだぜ。

今、IS学園は世界中の混乱の台風の目に一番近いところにいるような感じだ。ISが兵器として使えなくなったことで、世界中の混乱は目も当てられない。戦争なんてしてられない状況だ。本当に束さんは天才だった。犯罪に使用することが出来ないようにロツクがかかった。戦闘行為に使用できないようにロツクがかかった。ISは本来の目的である宇宙事業以外での使用が出来なくなった。今発表されたのはこれだけだ。ただそれだけで大混乱。世界がどれだけISに依存していたかがわかるってやつだな。混乱の中心に限りなく近いから、逆に穏やかだ。だからこそ、この臨海学校が実施できるんだらうけどな。感謝感謝だ。

男性のIS利用は俺の卒業を待つことになると思えばいい。一度に全てのことを公表すると、混乱が行き過ぎて社会を作り直すどころではなくなるそうさ。それに、ISは宇宙事業に使うものという認識が広まった頃に公表することで、男性の宇宙事業参加を爆発的に増やすんだそうさ。簡単な手段だが効果的だと思う。けど、やり

方があくどい。

学園長と話をした。あのおじさんが実質の学園トップだったのは意外過ぎだ。用務員さんだと思ってた。

俺の使ってる部屋は、俺の卒業後は生徒会長が使うことになるそう
だ。あと、男子の入学が始まるまでに寮を広げて男子寮も作るらしい。
そう、この人、男が使えるようになることを知っていた。束さんに
聞かされたそうだ。俺の入学が決まったときに連絡があったらしい。

寮のことははじめ、少しずつ男子を受け入れて出来るようにする
うだ。そのため、に俺も色々協力してほしいそうだ。起動実験が
なくなるそうなので、その代わりだと思って引き受けた。

ま、ともかくにも今は臨海学校だな。よし、また補助席回ってくるか。

さて、旅館前での学年主任である織斑先生（アレ）の話も終わった
ことだし、部屋に荷物置いて俺も海に繰り出すか。眼の保養もかねて。

部屋割りだと山田先生の隣の部屋になるんだよな。逆隣は政府から
派遣されてる護衛の人たちになるらしい。こんな所までご苦労様
というか、護衛の仕事で旅館に泊まれて役得というか。まあ、お手数
かけますよつと。護衛の人に気を配って部屋にこもるなんてしない
ぞ。

「あ、織斑君。まだ部屋に行ってなかったんですね」

女神降臨。海だからって張り切ったそうだが、学校でよく見る私服
より夏仕様ですね。山田先生。白いワンピースとピンクのサマー
カーデイガンが眩しいです。けど、街中で見かけたら同年代くらいに
しか見えませんよその格好。ほんとに眼福過ぎる。

「あー。ほら、女子達が一気に入っていたじゃないですか。俺だけ
エリアが違うから、ちよつと待ってからの方が邪魔にならないかと思

「いまして」

うん。ガン見はしないぞ。俺も少しは成長するんだ。いや、束さんに言われた『気づいてるんだよ』の一言が重くて。それに山田先生から軽蔑の視線を向けられたら立ち直れない気がする。

「あら？うんうん。偉いですね。そういう気配りが大事なんですよね。私なんて、自分のことだけでしょっちゅういっぱいいっぱいになっちゃって」

話しながら一緒に部屋に向かう。隣同士だしな。

「けど先生、いつも一生懸命やってるじゃないですか。そういうところは尊敬してますよ、みんな」

「あら、ありがとうございます。最近は何でもちよつと頑張ってるなって思ってるんです」

それにみんな、最近は落ち着きも出てきてかっこいいって話してるな。なんて話してたらあつという間に部屋だ。女子は割りと奥の方に部屋が振られてるのに、俺達の部屋は入り口から近いんだな。

「それじゃあ、俺は荷物置いたらそのまま海に行っちゃいますね」

「はい。みんなで楽しんでくださいね」

軽く挨拶をしてから、部屋の戸に手をかけた。

「あ、そうそう。前みたいに胸をじろじろ見ないのはポイントアップです」

笑顔で爆弾落とされた。

「しゃあないんや。男の子やもん。思春期やもん。」

第32話

青い空、白い雲、透き通る海、水着ではしゃぐクラスメイト。夏だね。

だけでももう少しだけ待ってください。私のライフは今回復中です。砂浜に何ヶ所か立てられたビーチパラソルの一つで膝を抱えて海を眺めつつ回復中。ちなみにこのビーチパラソルは日射病対策に一定間隔で立てられてる。いくら海に入るとはいえ、夏の空の下だからな。対策は出来る限りつてことなんだろう。

「あれ？一夏。こんな所で一人で何やってるのさ。バスの中でみんなと色々約束してたみたいだったのに」

「シャルか」

声をかけてきたのはシャルだった。オレンジ色のビキニタイプで、下はスカート型のパレオをまいてる。意外と胸あるんだよな。そう思ったところで、すぐに視線を海に向ける。

「ちよつとな。自分の未熟っぷりを反省中なんだ」

「なにそれ？ま、いいや。横、座るよ」

「ああ。気にせず座れよ。影のところは思ったより涼しいぞ」

ちよつとだけ端によける。シャルが気にせず影に座れる様にだ。決して水着姿のシャルの真横に座るのが恥ずかしかつたからじゃない。だが、これだけは言っておこう。欧州人って肌の白さすごいな。オレンジの水着との対比がすばらしい。

「にしても、やっぱり日本は暑いね。フランスとは大違いだ」

そっか、フランスって日本より緯度が上なんだっけ。

「向こうの夏はもつと涼しいのか」

「向こうが涼しいんじゃないよ。日本が暑いんだよ」

あ、さいで。そういや鈴も昔、同じようなこと言ってたっけか。

「そういや、他は？」

シャルなら誰かしらと一緒にだと思ってたんだが。

「鈴は暑くてかなわないから、先にちよつと泳いでくるって。なんか念入りに体ほぐしてから海に入ってたよ」

鈴らしい。ちよつととか言いながら結構長いこと泳いできそうだな。体ほぐしてから行つたつてことは、遊泳範囲限界に挑んでくるな。

「簪はさつきまで一緒だったんだけど、クラスの子達にちよつとはこつちにも顔を出せつて誘拐されてつたよ」

おお、ボツチじゃなくなつてるじゃないか。ついにクラスにも友達出来たんだな。クラスに友達いないつて落ち込んだのが嘘みたいだ。

「ま、まああれだ。4組の子達も簪の性格少しはわかつてるだろうから、そこそこでこつちに来るだろう」

「だろうね。で、本音はまだ見てないかな。たぶん清香たちと一緒に思う」

ああ、相川さんたちね。谷本さんと三人でいるのよく見るしな。

「ねえ一夏。あつちに見える、すごい勢いで泳いでくるのつて……」

「鈴だな」

本気で一番遠いブイまで泳いできたな、ありや。にしても、どんだけ本気で泳いでんだか。波掻き分けてるぞ。お、ゴールした。さすがに砂浜に突つ込むなんてギャグはしないか。

「あ、一夏。やつと来たのね。競争しようと思つたのに、あんまり遅いからあたし一人で行つてきちやつたわよ」

お？髪型がツインテじゃなくてアップだ。泳ぐのに邪魔にならないようにしてきたな。泳ぎにどれだけ気合入れてんだ。遊べよ。にしても、鈴の水着もオレンジなんだな。ビキニタイプじゃなくてセパレート？スポーツタイプ？まあ、そんな感じだ。鈴の雰囲気には合つてるな。

「ん？なによ？水着姿なんて中学のときに何度も見てるじゃない」

「いや、鈴もオレンジだろ？シャルのオレンジだけど、オレンジつていっても結構色の方向性違うよなつて」

「そうね。あたしのは赤に近いオレンジで、シャルのは黄色に近いオレンジね。大枠でオレンジつて言つちやつたらそこまでなんだけど、細かい色の分類するとかかなり離れるわね」

「そうだね。ボクのはたぶん黄色で分類されるかもしれないね」

シャルと会話しながら鈴もパラソルの下に座った。やっぱ直射日光下はつらいよな。

「そういや、一夏。水着新調したのね。一昨年は『大きめのサイズ買ったからこれで数年は使える』なんて言ってたのに」

あー。言ったな。そんなこと。

「使えるものなら使ったさ。去年引っ掛けて穴開いたんだよ。だからこの間買ったんだ」

黒地に白い一本線の入ったデザイン。無難だが、希望のサイズだとこれしか良いのがなかったんだよ。

「ちよつとゆったりしてるよね。それ、来年も使うの？」

「いや、来年使うかはわからんが、サイズが大きいのは下にもう一枚穿いてるからだよ」

じゃないと臨海学校なんて参加できません。男の尊厳的な意味で。

「あー。そうゆうこと。こういう時大変ね。男一人って言うのは」

鈴はわかつたらしい。ニマつくな。そしてシャルに耳打ちするな。

ああもう、シャルがリングカラーになったじゃないか。ちくしょう。

男はつらいよ。

「こんなどこいたんだ」

膝を抱えなおして自分の世界に籠ろうか本気で考え出したところで

簪が来た。なんか順番に集まってくるな。顔を上げて驚いた。ビ

キニ、だと。恥ずかしがり屋な簪がビキニを着てくるとは。しかも

黒。白いフリルがアクセントになってるが、黒ビキニ。それ以上に驚

いたのが、シャルよりも小高い丘。着痩せするんだな。

「じ、じろじろ見ないで欲しい」

「す、すまん。あ、あれだ。似合ってるぞ」

「あう。ありがと」

ほんとに女は視線に対して鋭いな。

「はいはい。甘酸っぱい青春はその辺にしてよく。それより簪、本音

は一緒じゃなかったんだ。てつきり一緒かと思ってただけ」

「私は、クラスの方にいたから」

まさかの、のほほんさん見当たらない事件。だがその前に鈴。ありがとう。話題をそらしてくれて。ほんとにありがとう。そして俺はもっと反省しないとダメらしい。

「ね、ねえ。みんな……」

「どうしたシャル？」

急に震えた声を発したシャルに俺達の視線が集まる。

「ボクの目がおかしくなければ、なんだけど。きつねが波打ち際で遊んでる」

『はあ？』

珍しく声がかぶった。それよりもシャルの視線を追ってみる。

「きつねね」

「きつねだね」

「きつねだな」

「ね？きつねだよね」

おそらくカチューシャだろうきつね耳をつけたきつねのきぐるみ姿で、のほほんさんが遊んでいた。遠目でも寮で着たパジャマと材質が違うみたいだから、水着仕様なんだろう。色々と突っ込みどころはあるが、これだけは言っておきたい。どこで売ってんだよそんなもん。

「あ、おりむく。かくんちやくん。りくんりくん。しやるるくん」

こつちに気が付いたようで、手を振りながらぼてぼてと駆け寄ってくる。異様な光景だろこれ。真夏の、快晴の、海岸で、きぐるみを着た、女子高生が、駆け寄ってくる。『きぐるみを着た』が余計だ。この一言で全てがカオスになってる。

「ちよつと本音。リンリンはやめなさいっていつも言ってるでしょ。パANDAみたいじゃない。それよりもアンタ。その格好なんなのよ」

「えへへ。かわいいでしょ？お店で見つけたときに、びびびってきたんだよ。これはもう買うしかないって思ったのだく」

「ね、ねえ簪。ボク、本音が言ってるのか理解できないや」

「私も出来ないから大丈夫だと思う。私達は正常だよ」

あ、二人現実逃避した。ある意味正しい反応なんじゃないのか？

「下に水着着てるの?」

「ん〜?着てるよ?」

「よし、じゃああ脱ぎなさい。というか脱がせるわよ。見てると頭がおかしくなりそうだわ」

鈴ナイス判断。のほほんさんだけ見てると、ここがどこで、今の季節がなんなのか、どっちもわからなくなる。

「後ろにファスナーがあるのね。ていつ」

ぶっ。メロンが二つ並んでる。慌てて視線を逸らして鼻を押さえろ。鼻血出てないよな。いや、でかい。簪も着痩せしてると思ってたけど、のほほんさんのは次元が違う。山田先生に追いつけるレベルだろ。だけどそれ以上に問題なのは水着だ。純白のマイクロビキニ。胸の肌面積の3分の1も隠れてない。凶器だ。水着の下にもう一枚穿いててよかった。

「ちよ、ちよつと本音。その水着は過激すぎると思うよ」

シャルよく言った。ご馳走様ですと言いたいけど、シャルの指摘は正しい。過激すぎるんだって。きつねを脱がせた鈴が口半開きで呆然としてるぞ。簪なんて真っ赤になってリリースしてるし。

「これ着てると中が暑くて、ちようどいつかな〜って。すずしいぞ〜。それに、おりむくをの〜さつでできるかな〜って」

悩殺された後に社会的にも、今後の学校での立場的にも殺されかねないからやめて。お願いやめて。だけどありがとう。

その後、呆然とする鈴と簪に、動けない俺、のほほんさんと問答を続けるシャルというカオス空間だったが、様子を見に来た山田先生にのほほんさんは連行されていった。アウトと判断されたようだ。

山田先生>>>のほほんさん>>>簪>シャル>>>鈴の並びだな。
心のメモに記しておこう

第33話

女子達から一足遅れての風呂を終えて、旅館の談話スペースに来た。ここでだべってるってことだった。

「本音、あんたでかかったのね。ずっとこっち側だと思ってたのに」「りんりんもちゃんと胸あるよ。りんりんだとおっきすぎるとみためわるくなるよ。ばらんすばらんす」

エロ談義だし。胸の話題してる中に飛び込んだら死ぬ。談義つつつても、鈴とのほほんさんが話すばかりで、シャルは苦笑いしてる。簪は顔を赤らめてるが、興味深そうに聞いている。ここからだ鈴は背中しか見えない。

「ん。本音」

唐突に鈴がのほほんさんに声をかけた。アイコンタクトで通じていたのか、のほほんさんは珍しく俊敏な動きを見せると、シャルの後ろに回りこんで眼を塞いだ。

「な、なに!？」

「シャル。昼をよく思い出さない。まずは本音」

あ、胸談義終わってないのな。シャルの顔がうろたえた。あのサイズを思い出したらしい。

「ふむ。次に簪」

で、次はちよつと悔しそう。

「最後にあたし」

あ、それ、アウト。ほつとした顔はダメだつて。

「ええええ。よくわかったわ。確かにシャルのほうがサイズあるものねー」

「り、理不尽だよ。確かにほつとしちゃったボクも悪いけどさ」

あきらめろとしか言いようがないな。自販機でお茶を買って、4人が見えない位置の壁に寄りかかる。声は聞こえるから、タイミング見計らって合流しよう。盗み聞きといわれたら否定しきれないけど、あの話題の中に入っていく方が勇気がある。

「ま、いいわ。でも昼の一夏は面白かったわね。あのうろたえようはなかったわ」

「のくさつ?のくさつ?」

「仕方ないんじゃないかな?一夏だって男の子なんだし。本音のあの水着は刺激が強すぎるよ」

おうふ。話題が恐ろしい方に飛び火しだした。

「けどあいつ、一瞬で鼻押さえてたわよ。そこはどう思ったの?簪」

「わ、私?た、確かにちよつと……」

ぐ、ぐはあ。ライフが、ライフが削れていく……。

「でっしょく。情けないったらないわよ」

壁から離れて、そつと鈴の背後に忍び寄っていく。最初に気がついたのは鈴の正面に座ってたシャルだ。次に簪、最後にのほんさんだ。

「男らしさのかけらもなかったわよ。まさに間抜け面ね」

「間抜け面に関しては、鈴も引けを取らなかったと思うんだがな」

鈴の後頭部を右手で全力で鷲掴みにしながら言つてやる。

「あ、あら一夏。遅かったじゃないのおおおおおつ。痛い痛い痛い。

割れるっ。私の頭割れるっ」

「われないぞー。俺の握力そんなにないから。何せ俺、男らしさなんてないからなー」

「ちよつ。ごめんっ。ごめんって。私が悪かったから、はなしでえええええ」

最後にちよつとだけ強く力を入れてから開放してやる。みみっちいが復讐完了。にしても、大きい声を出さないまま叫ぶって、変に高等技術使うな、鈴のやつ。まあ、ロビーに近いから騒がないのは当然だが。これくらいは許してもらおう。ちらりと通りすがりの仲居さんを見ると笑つてたから大丈夫だろう。

隣のテーブルから椅子を引っ張ってきて鈴と簪の間に座る。丸テーブルに5人だが、そこまで狭くないな。

「わ、割れるかと思った。あんたたちも気が付いてたんなら教えなさいよ。ああもう、髪も乱れちゃったじゃないの」

「ほう。まだ余裕があるんだな。もう少しやつとくか」

鈴に向かつて手をニギニギと動かしながら脅しをかける。

「ギブ。ギブアーツプ」

みんなで笑いながらふざけていたら、予想外というか、予想通りと
いうか、声がかかった。

「おまえ達、話し込むのは構わんが、場所を考えろ。ここだと宿の従業員
の迷惑になるだろう」

久しぶりに絡んできたよ。織斑先生。教師の威厳というものを見
せておきたいんだろうか。入学式のアレ以降、若干人氣が下向きらし
いからな。

俺と鈴はあからさまに溜息をついた。簪は半眼で呆れ顔だし、シヤ
ルは苦笑。のほほんさんはきよとんと首をかしげている。いやまあ
首も傾げたくなるよな。鈴に視線で対応するようにせつつかれたか
ら、織斑先生に体を向けて見上げてから口を開いた。

「馬鹿ですか？」

ドストレート。鈴が吹き出しそうになって口を押さえた。

「なっ！」

「俺が友人と話すのにここ以外だとどうなるか考えてます？俺男なん
ですよ。あなたたち大人からしたら子供が何言ってると思うでしょ
うけど、高校一年生男子って世間では男の子じゃなくて男として扱わ
れるんですよ。そんな俺が、夜8時っていうこの時間に女子の部屋に
いる。逆に俺の部屋に女子を招き入れるってことがどういう判断を
世間から受けるか考えてますか？たとえば“そういう”ことが実際に
なくてもそう判断されかねないんです」

ここまでだったら、寮だとどうなんだって話なんだけど……。

「しかもここは旅館です。管轄は学園ではないんですよ。『そういう
』風に騒ぎ立てられたら学園だけでなく、この旅館にも迷惑がかかる
んです。だから俺達は、食事後の自由時間内で、旅館の共同スペース
であるこの談話スペースで、話してるんです。やましいことなんて何
一つないことを周りに示す意味も含めて」

一息吐いて間を空ける。続けて話していると結構疲れる。

「そして、はしゃいでいたのは事実ですが、それほど回りに響く大きさの声は上げてません。その辺の配慮は当然しています。俺達が子供だからといって、その辺がわからない程ガキじゃないですよ」

言い切つて返しを待とうと構えたタイミングで、旅館の時計が8時を告げる鐘を鳴らした。織斑先生も、鐘の音にタイミングを失つたように、口を開きかけた状態で固まっている。

「どうやらこれで時間のようですね。8時から生徒は割り当てられた部屋に戻つて就寝準備でしたね。これ以上は注意の対象になってしまいますから失礼させていただきます」

椅子を元のテーブルに戻してから、「お先に失礼します。おやすみなさい」と、あてつけるように言つて解散する。四人も織斑先生（アレ）に挨拶して女子部屋に戻つていった。

あの人は、ここが学園じゃなくて旅館だということをちゃんと認識してるんだらうか？部屋に戻つて『教師の時間は終わった』とか言つて酒飲みだしたりしないだらうな。こういうとき教師陣つて見回りとかあるから、結構遅くまで仕事あるんじゃないか。まさかね。

番外編02

「まったく。ふぎけるのもいい加減にしてくださいね、会長。ただでさえ仕事がたまってるんですから」

「ご、ごめんねえ。ちよつとおふぎけが過ぎただけだったのよ。たまってるお仕事ちゃんと消化するから」

虚の言葉に楯無はすまなそうな表情を見せるが、またすぐに悪ふぎけに走ることがわかつている為、虚は溜息を吐いて妹に割り振った仕事の進捗を計る。切羽詰った状況一歩手前だということを理解しているからか、本音は普段見せない集中力を持って仕事を消化していた。

(思ったより大丈夫そうね)

妹の努力に頬が緩むのを感じながら、虚は自分のノルマを消化し始める。時折お茶を入れたりトイレに立ったりしたものの、三人で黙々と消化していた。

コンコンコン

「失礼しますね。布仏さんちよつと良いですか？」

「はい？」

「ほえ？」

ノックとともに入ってきた真耶に、姉妹揃って返事を返した。

「あ、えつと、お姉さんの方です」

虚は、先刻の楯無に関するかどうかだろうと思い、促されるままに生徒会室を出て廊下で真耶と向かい合った。

「会長に何か沙汰が下りましたか？」

用件に当たりをつけ先に切り出した。しかし、真耶は首を振って虚の眼をまっすぐと見た。

「落ち着いて聞いてください。先程、織斑君の部屋から多数の盗聴器が発見されました」

瞬間、虚は姿の见えない扉の向こうの楯無に振り返った。

「そんな、そんな事」

ありえないと続けようとしたのか、そんな事までやっていたのかと続けようとしたのか、虚本人にもわからなかった。ただ、言葉が続かなかった。

「事実です。そして仕掛けたのは布仏さんの予想通り更識さんで間違いないようです」

謹慎か、一時的に実家に戻されての停学か。虚の頭の中にいくつかの処分が浮かび、フォローにまわされる自身と妹の苦勞を計上し始めていた。

「それと」

「まだあるんですか?!」

驚き、真耶に半歩詰め寄った虚から、真耶が顔を逸らした。

「落ち着いて聞いてください。布仏さんにも関係することです」

虚は自分の顔が引きつったのがわかった。

「盗聴器は更識簪さんの部屋からも発見されました。その可聴範囲にはお手洗いと浴室も含まれていたことが確定情報として報告されています」

目の前が真っ赤になるという表現が、比喻ではなく実際に起こることだと虚は頭の片隅で考え、そして意識する前に捨て去った。真耶の制止を振り切り、虚は生徒会室に飛び込んだ。

呆氣にとられていた楯無の襟を掴み、勢いに任せて壁に押し付けた。

「あなたはっ!」

普段とは違った虚の声の荒げ方に本音も楯無も動くことが出来なかった。

「あなたはあっ!」

怒気に染まった虚に、楯無は察したのか抵抗しようとした力を抜いた。

「お、おねえちゃん?」

横からかけられた声に、虚は頭が冷えた。いや、怒気以上の感情が頭を支配した。

掴んでいた楯無の襟を放し、本音に駆け寄って力の限り、それでい

て赤子を抱きしめるかのように優しく抱きしめた。

「ああ、ああ、本音、本音。大丈夫。大丈夫だから。お姉ちゃんが何とかするから」

「お姉ちゃん？何があったの？話してくれないとわからないよお」

虚は本音の頭を何度も撫で、放り捨てた楯無を睨み付けた。

「許さない。何があるうとも、たとえ私達一族が更識に仕えるモノだとしても、私はあなたを絶対に許さない！」

楯無は虚に放り出されたまま床に座り込んで動く気配がない。

「更識。わかっていると思うが、抵抗せずについて来い。学園長から生徒会長権限の凍結と、身柄の拘束の通達が出ている」

いつの間に来たのか、千冬が楯無の前に立っていた。真耶は数人の教員と入り口に立っている。

楯無は何も言わず、のそりと立ち上がると、千冬に促されるままに歩き出した。

状況が理解出来ずにうろたえる本音の頭を撫で続けながら虚は、自身の中に灯った黒い炎を抑えることなく燃やし続けさせていた。

「大丈夫。お姉ちゃんが何とかするから」

第34話

『あ、あ。テスト。一番後ろの方聞こえてますかあ？大丈夫でしたら手を上げてください。……はい、大丈夫ですね』

旅館から十分ちよつと歩いたところにある公民館の会議場の前方で、山田先生がマイク片手にちよこまか動き回っている。身長の関係上、踏み台が用意されてるのはご愛嬌だろう。なかつたら後ろの方は見えにくいだろうな。見えないとは言わない。山田先生の名誉のためだ。

『それでは特別講義を始めますね。午前中だけで全部終わって、午後と明日のお昼まではまた自由時間を予定してますから、この時間は集中してくださいね』

山田先生の声に、生徒達の雑談が消える。下手に騒いで時間が延びたらその分自由が減るわけだから、静かにもなるか。

『講義の内容は、ISの利用方法の制限と、今後についてです。先日、篠ノ之束博士の会見で発表されましたが、ISの軍事的及び恣意的な悪用の一切が出来なくなりました。簡単に言うと、戦争と犯罪には使えなくなりました。ということですね。これによってISの保持数を国の戦力の比率とすることが出来なくなったわけです。ISが登場する前にまで軍事力は後退したことになります。私達は言い方は悪いですが、兵器を扱うための勉強を今までしてきたんですが、それがまったく意味をなさなくなったということですね』

そう、この時間は俺達のこれからについての説明会みたいなものだ。今まではパイロット志望のほとんどは軍人になったし、整備課は軍技術部に入っていたけど、そうはいかなくなつたわけだ。

『では、私達はどうなっていくのか。それにはまず、ISがどうなつたのかということからですね。皆さんご存知の通り、ISは宇宙開発事業にのみ使用することが出来るものとなりました。というか、それしか出来ないものになつたということだそうです。そもそもISは宇宙空間作業用の専用スーツとして作られたそうです。宇宙服越しで

はなく肉眼で手元を見て、自分の指で行うように作業をして、必要な道具を自由に出し入れする。酸素自体も持ち運びが可能で、エネルギーの充電だけで行動の範囲に制限はない。確かに宇宙空間で作業するための条件を備えています。それを今まではやむにやまれぬ事情で軍事的に使っていたんだそうです』

いたるところからカリカリとメモをとる音が聞こえる。幾人かは端末にキーボード入力でメモしているみたいだけど、手書きが圧倒的に多い。こういった講義でのメモって手書きの方が取りやすいと思うのは俺だけだろうか。

『ISがそう言った方向にしか使えなくなったということは、学園も当然それに沿った方向転換を行ってゆきます。基本学科はそのままですが、IS学科は戦闘関係の実習がすべてなくなって、無重力空間での作業に関する実習を中心に取り入れる予定です。皆さんは入学してまだ時間も経っていませんので、戦闘実習もほとんどありませんでしたから、影響は大きくないと思います。大きくないといっても、これからガラッと変わることを見ると、大変ではあるんですけど……』

山田先生がちよつと考えるように言葉を途切れさせた。

『そうですね……。今後の学園の動きをお話しておきましょうか。臨海学校後すぐに早めの夏休みに入ることが決まりました。今は7月の頭ですので、ほぼ二ヶ月の休みになります。その間に学園の方で新しい教育プランを作る予定となっています。夏休み明けて一週間で新教育プランと学園のあり方についての説明会が行われ、学園に残る生徒には新プランに則った授業を、残らない生徒には新しい学校の紹介と編入手続きを行うことになります』

学園の方針についての話が進み始めたときに、そつと肩を叩かれた。

「織斑。ちよつといいか」

神妙な顔をした。織斑先生（ヤツ）がいた。ちよつと悩んだが、呼ばれるままにそつと席を立つ。山田先生がちよつとだけ微笑んだような気がした。やつぱり癒しだわ。

先導されるがままに公民館を出る。

「山田先生が話しておくべきだと言つてな」

横に並んできて、缶コーヒーを渡された。ブラックだ。

「こうやって授業を抜け出すようなことは好まないんだろうが、たぶん最後の我侷だ。ちよつとだけ付き合ってくれよ。一夏」

「……………千冬姉え、なんだよ改まつて」

俺が名前で呼んだことが意外だったのか、驚いた顔をしてこっちを見たけど、薄く笑つてまた前を見た。

「私は学園を去ることになったよ。この臨海学校が教師としての最後の行事だ。終業式にもでない」

今度は俺が驚きで顔を見た。え？マジで？

「今の私にはISは起動も出来ん。東からメッセージで、これが私への罰のひとつだと言われたよ。私はISを動かすことを教えるために招かれた特別教員だったからな。ISが動かせなくなった時点で学園にいる意味はない。学園長に申し出て、聞き入れてもらった」

ISが動かせない、か。

「で、どうすんだよこれから。自分の仕出かしたことから逃げるように身でも隠すのか？」

「いや、東の依頼で動く傭兵みたいな事をする予定だ。私が作つてしまった社会の闇を全て潰すまで私に安らぎはないそうさ。まあ、私は基本的に戦うことしか出来んからな。自衛隊にでも入つて社会奉仕でも思っていたが、自分の蒔いた種を刈りに行くさ」

「チツ。なんだよ満足そうな顔して。あークソ。色々言つてやろうと思つてたのに」

「すまない」

「あやまんなよっ」

なんだよ。あやまるなよ。俺が駄々こねてるみたいじゃないか。クソツ。

「俺を理由に世界を“こんな”にしたんだ。俺が与える罰も一つだけ背負つていけよ」

互いに立ち止まり、しっかりと眼を見る。

「全部終わるまで死ぬなよ。東さんがホントに全部終わったって言うその日まで死なずに生き残って、自分の罪を全部見てこいよ。そして全部を俺に話せ。俺が理由なんだ。俺にも知る義務があると思う」「わかった。いつになるかはわからんが、全部終わったら、全部話すよ。ああ約束だ。信用されてない私が言うのも頼りないものだが、約束だ」

先に戻ってるからゆっくり戻るといい。と言って一人残された。

ああ、俺の知らない俺の罪が重い。

番外編03話

更識刀奈にとって自身の才能は自己を形成する一つであり、他者から自身を評価される項目の一つでしかなかった。

努力は苦ではなかった。才能だけで他者を寄せ付けないだけのものはあったが、そこに努力を上乗せするだけで『上』が少なくなっていく実感があった。

私にとって簪は守るべき者であり、愛おしくて仕方の無い存在であった。故に、更識に関わらせるつもりなどかけらも無かった。自身が全て背負えばいい。そのために努力の量も増やした。それでいて心配をかけないように努力を隠し、完全無欠な姉を演じた。

それでも我俣を言うことをやめられなかった。我俣を叶えられるだけの力があつた。それが我俣に拍車をかけた。気がついたら我俣はいたずらに変わっていた。いたずらだと皆が『仕方ない』という風に笑うのが心地よかつた。自分の我俣が他者に苦笑とはいえ笑いを与えることがうれしかつた。更識に縛られることを是とした自身の、逃避の一環だと自己分析をしたこともあつたが、そのころには変えられないくらいには自身の一部になっていた。

更識を継いで、名が楯無となり、一族を掌握できたのは偏にISという存在の出現であろう。女にしか使えない強化外装は刀奈をただの小娘から当主候補筆頭に引き上げ、あつという間に当主の座に就かせた。

自由国籍を得てロシアの国家代表になつたのはそれからすぐのことだつた。

IS学園に入学してすぐに我俣を言った。というよりも校則にのっとり力を示し、生徒会長の地位を手にした。今の世界においてIS学園に在籍することは、利をもたらす。特に更識である楯無にとっては。そして高い権限を持つ生徒会長の座に就くということがもたらす利は、更識にも刀奈自身にも大きいものだ。

生徒会長としていろんなイベントを引き起こした。会長の我俣としてだ。それによって生徒の実力や気質を把握することに努めた。

特に海外の生徒の情報は有用だった。手にした情報が更識を強固にし、刀奈を楯無としてより認めさせる。全ては守るべきもののため。簪のためだった。

そうやって1年を過ごしたときに、衝撃のニュースが世界を駆け抜けた。男がISを動かしたというのだ。

私の中を駆け抜けた感情は恐怖だった。かつて無い恐怖だった。

自身の『上』が少ない理由はISが女にしか使えないことが一因しているからだ。『上』に男が増えるということは、自身の地位と簪という守るべき存在の危機でしかない。

その夜は震えて眠れなかった。自身の大事な大事な妹が守れなくなるのではという、ただそれだけのことが体を震えさせた。楯無になって以降、いや物心ついて以降初めて恐怖に涙した。恐怖に歯の根が噛み合わなかった。

あつという間に数ヶ月が過ぎて、件の男性操縦者が入学してきた。事実上女子高ではあるが、IS学園は女子高ではない。だからこその男は学園にやってきた。やってきてしまった。

簪を守るために全力を傾けようとした。したが、ヤツの守りが堅かった。さすがに世界で一人。

情報を集められないまま、まさかの事態が起きた。簪と接触した。強く噛み締めた歯がギリと音を立てた。

歯噛みしながら一月過ぎた頃、チャンスが来た。織斑千冬の影響力が織斑一夏によって下がってきたのがチャンスの遠因というのだから笑ってしまう。この機を逃す手などあるはずもない。

水着エプロンで部屋に侵入し、いたずら好きの会長のいたずらの一環という体を保つ。今までの行いが真意を隠す。更識で使う盗聴器を部屋に仕掛け、動向を探る。どんな些細なことでも弱みを握ることが出来れば、自分が手綱を握れる。そうすれば簪とこの男の距離を調節できる。簪を守れる。聞いた話ではかなりイイ性格らしいが、弱みさえ握ればこつちのものだ。そう思い待機する。

ドアが開き、眼を見た瞬間、理解した。

楯無の終わりを。自身の敗北を。

普段通りのふざけた風を装いながら考えた。私と彼の道が重なったと思っていた。重なることで被る不都合を考えていた。それがそもそも間違いだど気がつかされた。互いの道は立体交差しただけだ。彼の道は私の遙か上をスイと跨いだけだった。私がしたことは通り過ぎるはずだった相手に攻撃を仕掛けて気を引いただけだった。

虚に連れられて生徒会室に戻ると、処理が途中になっている事案だけを優先して処理をする。きつと長くて一週間で彼は私にその牙を向ける。彼のあの眼は、覚悟を決めて生きる目だ。中途半端で相対したらいけない眼だ。私は本気で彼に向き合わなければいけなかった。そうすれば彼とすれ違った道の上で手を振り合って終わったはずだ。

業務が一段落して、会長を引き継いでも問題ない状態になったので、仕事をしている振りをしてると、山田先生が来て虚が呼ばれていった。想像以上に早かった。時間らしい。飛び込んできた虚にされるがまま壁に叩きつけられる。受身のために入れていた力も抜いて、虚の怒りを受け止める。

それからは早かった。国家代表資格も剥奪され、更識の当主の証明である楯無も剥奪された。更識の老いばれ達は弁の立つ私が怖いらしく、喋る事を禁じるために口枷までする始末だ。無様だと思う。自業自得だと思う。

幾日か経って簪が訪れた。格子の向こうに立ち、こちらを見下ろす眼には侮蔑の色。それだけで勝手に涙が出る。

もう二度と会えないと、わかっているから、愛しい妹の姿を眼に焼き付ける。忘れないように。眼を閉じただけで思い出せるように。

「だから、さよなら。私の姉だった人」

簪が、最後に放った言葉。悲しさと、狂おしさで声が漏れそうになるのをこらえる。

(さようなら。私のかわいいかわいい妹。ごめんね。ダメなお姉ちゃ

んで)

心の中でつぶやく。涙が止まらない。

遠くで戸の閉まる音がした。さらに5分待った。

「ぐううううううう」

口枷から声が漏れる。嗚咽が座敷牢の中に響く。涙が止まらない。

涙は止まってくれない。

日本某所。墓地の片隅に名の刻まれていない小さな墓があった。その墓の前に、一人の女性が立っていた。

「あれから何年も経ったけど、おねーちゃんもかんちゃんもお嬢様の話はぜんぜんしないよ。許してないみたい。わたしも許してあげない。次は許せるようになったら来るよ。じゃあね」

女性は手も合わせずに去っていった。墓はただ、そこにあった。

第35話

さて、各種手続きの書類を嫌という程書いて、ライフライン関係の再開の処理も済ませて、戻ってきました我が家。といつても夏休みの間の10日間だけなんだけどな。

「うわ、やっべ。埃が積もってら」

人がまったく入ってなかったとはいえ、丸四ヶ月も経つと埃は積もるもんだな。あれ？人がいると積もり方が加速するだけで埃が積もるのは当たり前だったっけか？

とりあえず、リビングのテーブルだけ拭いて荷物置き場にしろくか。

「明日にはみんな来るからな。今日中に何とか目処を付けるとするか」

一人の時に気合を入れようとする、独り言を口にしてしまうのはなんでなんだろうな。

「まったく、こんなことだろうと思っただわよ」

急に聞こえるはずの無い声がして、驚き振り返ると、リビングの入り口に鈴が仁王立ちしてた。いや、正直さ、身長がそんなに無いのにこうも仁王立ちが似合うってのも、ある意味才能だよな。

「いや、中学ん時もそうだったけどよ。相変わらず勝手に入ってくるのな」

「勝手知ったるなんとやらよ。そもそも、私達の立場っていまだ各国の候補生のままなのよ？アンタの家に行くなら、日程別にするより一緒の方が護衛とかの手続きの申請通しやすかったのよ」

うん。話が勝手に入ってきたことから、何でここにいるのかにシフトしてるんだけどさ。あと、聞き逃さなかったぞ。私達って単語。

「おりむく。さっきぶり〜」

「おじやまします」

「あはは。おじやまします」

だよな。結局いつものメンバーが勢揃いなわけだ。今日だけは一

人で夜をすごしたかったんだが、確実に泊まる気だよな。特に鈴。男の子の時間が……。割と切実なんだが。実家生活後半で処理するしかないか。さすがにずっとは泊まらないだろうし。

「よし、その口ぶりからして掃除を手伝ってくれるんだよな。キツチンと俺の部屋は俺がやるから、それ以外の所と、自分達が寝る部屋は任せた」

「はいはい。任せときなさい。食事はどうするの？弾のトコ？」

「その予定だ。蓮さんにも挨拶しに行かないとだからな。それに食材を買い取らない。10日程度しかいないのに買ったらもつたない。使い切れない分が必ず出る。それなら久しぶりの贅沢としやれこむさ」

寮の食事と違って量もあって、味も濃くて、カロリー度外視なのかさ。正直恋しいのよ。

「それじゃあ、買出しは飲み物とお菓子系ね。さっさと掃除終わらせて買い出し行くわよ」

こういうときに鈴のリーダーシップは助かる。

さて、と。自分のやる範囲はとっとと終わらせませすかね。

1時間もしないで掃除が全て終わったのは、おれ自身の家事スキルが高いってのと、女性陣の掃除スキルが思ったより高かったことがあるだろう。いやさ、のほほんさんの掃除スキルの高さには驚いたわ。見た目に反しててきばきこなすんだよね。普段の動きに反映されないのは謎だ。

日の傾く前にスーパーに買出し。馴染みという事もあって、店員と話してる間にシャル主導で買い物を進めてた。母親と暮らしてたときに、スーパーでいかに安くいかにお得にお菓子をゲットするか試行錯誤してたことがあるらしい。飲み物は紅茶にスポドリ、100%のフルーツジュース。お菓子はスナック系チョコ系珍味系と手広く揃えてた。うん。シャルは将来節約母さんになるな。節約しながらも子供を満足させる出来る母親だ。

値段を見比べながらかごに入れていくシャル。カートを押す簪。気の向くままうろちよろするのほほんさん。それを捕まえに行く鈴。

言い方は悪いけど、髪の色が同じなら姉妹って言ってもうなずけるな。すっかり物の長女、おとなしい次女、面倒見のいい三女、自由奔放な四女。うん。いつかこのネタでからかおう。

結局、買い物には1時間以上かかった。

掃除よりも買出しの方が疲れたのは、家が汚れてなかったからなのか、女が四人も集まると姦しいを越えた何かになったからなのかは追求しないでおこう。

第36話

どうしてこうなったし。目の前に置かれたきぐるみパジャマを前に冷や汗を流す。ちらりと視線を上げると、きつねのほほん、たぬきかんざし、うさぎしやる、ねこりん。普段なら呆れて止めに入りそうな鈴とシャルまでもが向こう側につくとは。

「ほ、ほら、夏だし、こんなの着たら暑い」

「もくまんたうい。夏仕様で通気性抜群なのだよ。おりむく」

「い、いや、それでも暑いだろ」

「空調入れてるじゃない。むしろ丁度良いわよ」

「そもそも俺には似合わないって」

「大丈夫。似合うよ。一夏に似合いそうなのをみんなで選んだんだから」

「で、でもなあ」

「着ないの？」

「着ます」

ちくしように。簪の上目遣いは反則だろ。あれ仕込んだのは絶対に鈴だな。くつそ。今度ジュース奢ってやる。

で、着てみました。いや、悔しいんだけど。空調の効いた部屋だと快適だわこれ。手は肉球手袋に入れ自由で細かい動きにも対応してるし、全体的にゆったりしてるから動きに阻害感が無い。マジすげえ。

体をひねったりしながらふと頭に浮かんだのが、きつねのほほんさんが飛び跳ねたりしてるときに、きつねの中でのほほんさんのメロンが自由に動き回ってるわけで……。これ以上はやめよう。ただ、山田先生だったらこれ着ても見てすぐわかるんだろうなあ。

リビングに戻ったら四人にいつせいにうなづかれた。どうやらお気に召したらしい。それと歩いてて気がついたんだが、肉球はデザインンってだけじゃなくて、滑り止め効果もあるらしい。そしてフローリ

ングを歩くと『キュツキュツ』って鳴る。ちよつとファンシーだ。手袋の肉球も滑り止め効果があるらしく、鈴が手袋状態でコップを持つてる。本気でどこまでハイスペックなんだと問いたい。販売元頑張りすぎだろ。

「で、着替えてきたけど、どうすんだこれから」

夕食は五反田食堂で済ませてきた。鈴は久しぶりの、それ以外の三人は初めてのということもあって、紹介とかもあるからと忙しくなる前に行ってきた。

幸いというか予想通りというか、初対面の三人も五反田家に快く受け入れられていた。特に蓮さんは保護者センサーに引つかかったのか、初対面組を撫で練り回していた。

よくよく考えてみると、姉のせいで立場不安定の俺。姉のせいで天涯孤独となった簪。親のせいで国際規模で立場不安定のシャル。更識家取り潰しの煽りで一族存続の危機ののほほんさん。帰国後両親が離婚し、母親との折り合いも良くない鈴。傍から見ると不憫なグループ過ぎるだろ。まあ、みんな言うほど気にはしていないが。

食事の途中花摘みに立った鈴が、戻る前に奥で蓮さんに抱きついて泣いてたのは見なかったことにした。鈴は両親とも好きだったからな。色々溜め込んでたんだろう。他のみんなも気が付いていたようだったけど、誰も気が付かなかったことにしたようだ。

そんなこともあった夕食を済ませてすぐにこの流れだ。正直に言っただけは若干明るい。さすがに夏だ。

「何って、決まってるじゃない。ぐだぐだするのよ。寮だと消灯時間とかあって出来ないじゃない。この機会を逃す手は無いわよ」

鈴に同意するように三人もうなずいてるがな、力説するような内容じゃないだろそれ。ま、いいけどな。夏休みなんだし。

結局日付変わる手前までだらだらしゃべってた。自分も参加してあれだが、よく話題尽きないよな。

番外編04話

「すまない。相席いいだろうか」

「ええ、よろしいですわ……。あら？」

「む？」

不意に掛けられた相席の確認に返事をしたセシリアは、声の主を見て少しだけ驚いた。

食事の乗ったトレーを持ってそこにいたのは、篠ノ之箒だったからだ。

「オルコットか。すまないな、失礼する」

「構いませんわ。たまには一人じゃない食事というのもいいものですわ」

セシリアの自嘲めいた笑いに、箒も苦笑を返した。

「お互いにクラスであぶれてしまったからな。一人での食事が当たり前になっちゃったな」

「そうですわね。けどまあ、学園に来る前と変わりませんから苦痛とということも無いのですけれど」

「ふふ。私もだ。どこに行っても一人だったからな。今更だよ」

互いに苦笑を浮かべて食事の手を進める。

「箒さん。とお呼びしても？」

「かまわんよ。セシリア」

先に食事を終えたセシリアからの問いに、味噌汁の椀を傾けながら箒が応えた。

「これまでと、これからをお聞きしても？」

箒の手が止まり、ゆっくりと椀を下ろした。

「少し長くなる。先に平らげてもいいだろうか」

「ではお茶でもお持ちしますわ」

二人の表情は、苦笑だった。

箒のトレーも下げられ、紅茶のカップだけがテーブルにあった。

「そうだな。まずは私の原点を話そうか」
箒は一口だけ紅茶に口をつけると、ゆっくりと語り始めた。

私にとって姉である束は自慢であり、憧れだ。そう、現在進行形だよ。今でも自慢の姉で、憧れの人だ。

私に最大の愛を注いでくれて、勉強が出来て、何でも知ってて、優しくして。たぶん何も無ければ私はシスコンをこじらせた駄目な妹になったと思う。

そんな私の最大の失敗が、姉の隣に並び立つことを望んだことさ。滑稽だろう？あの天才に追いつこうとしたんだ。

勉強も頑張った。私の成績を知ってるか？これでも学年10位以内をキープしてるよ。それでも姉には追いつけない。私に学問という分野で、姉に追いつくだけの才は無かった。

だから私は武道に身を投じた。文の姉、武の妹。言葉にしたらかっこいいものだろう？実際私にはそっち方面に才能があつてな。実家が道場だったこともあつて、実力はすぐに実を結び始めた。私は舞い上がったよ。姉の横にいける道を見つけた気がしたんだ。

けどな、そこにはすでに立ち誇る人物がいた。わかるだろう？織斑千冬だよ。そこそこに頭もよく、女だてらに、子供のくせに、大人の圧倒する武を示した存在だ。私の敵だよ。

なあセシリア。私はどうしたと思う？簡単だよ。織斑千冬にくっついて回ったんだ。子供の考えそんなことだろう？嫌いなやつをまねて追い抜こうって算段だった。幸い私は気に入られてね。いや、ここは不幸にも、が正しいな。私は数年間織斑千冬と行動をともにしていた。小学校に上がる前からだよ。どうなったかはわかるだろう？

私は言葉より先に手が出るようになっていた。そう躰けられ、習慣付けられ、習性付けられた。私は私の武を制御できなくなってたんだよ。

果たして暴走しだした私は織斑、ああ一夏の方な。を巻き込み始めた。両親は一夏を遠ざけるために非常識に振舞った。そうすれば織斑は寄り付かなくなると判断してな。思惑通り、織斑は道場に近寄ら

なくなった。もっと大人な方法で織斑を遠ざけることも出来ただろうが、そうすると娘である私が傷つくと思われ、暴走の原因が織斑の姉である千冬だと知って織斑が傷つくと思われ、そうしたらいい。今はもう父も道場を畳んでしまったよ。私の暴走を防ぐことが出来なかったことと思うところがあつたらしい。申し訳ない限りだ。ああ、本当に申し訳ないと思ってるよ。

すまない。この話題になると涙もろくてな。続きを話そうか。といつても、もうそんなに話すことは残ってないんだが。

入学初日から一ヶ月、私はクラスメイトを遠ざけることに終始力を入れていた。すぐに手が出ると思わせてるのもその一環だな。今はもう自分の武を暴走させるなんてことはないんだよ。本当はな。

入学より少し前、姉さんと話をしたんだ。そう、篠ノ之束だよ。遠くない未来にISのあり方が変わると聞かされた。ああ、私は学園の誰よりも先に知っていたよ。ISが宇宙開発用にしか使えなくなることを。

姉さんは私に選択を迫った。姉さんとともに行くかどうかを。私は違う道に行くことにした。私は、私達篠ノ之の家は織斑一夏に迷惑をかけすぎた。これから先の未来には織斑の夢を叶える手伝いのできる、姉さんだけがればいい。だから私はいなくなるんだ。

ん？言葉通りだよ。顔も声も血液型さえも手術で変えて、まったく違う場所で生きていくことになっている。篠ノ之箒という個人はそう遠くない未来に事故に遭うことになっている。私は篠ノ之箒でいることに疲れてしまった。

そうだな、私のことはこんなところだ。

ああ、最後にこれだけは言っておこうか。姉さんと一緒に星空を見上げていた少年は、私の初恋の男の子だったよ。

初恋は実らないというのは本当だったと身を持って知ったよ。

番外編05話

「さて、私について話したんだ。セシリアも話してもらおうぞ。これまでと、これからを」

「最初からそのつもりですわ。けれど、わたくし話をまとめるのは苦手なので容赦してくださいまし」

わたくしの家は古い家柄で、両親も古い慣習をそのまま型に嵌めたような人間でした。家長である父が一番上で、後継の私が二番目。母はそれを影で助ける。理想の家族でしたわ。

その崩壊のきっかけがISの登場です。ご存知の通り、世界はあつという間に女性主導の風潮へと切り替わりました。イギリスも例には漏れません。そしてその波はわたくし達貴族社会にも影響を及ぼしました。多くの家が婦人によって実権を奪われ、家長はひどい所ですと謀殺されましたわ。そして、周囲に女性家長を強いてきました。お父様は最後まで苦悩しておりましたわ。早々に私に家長を継いで、いわゆる院政をとも考えたそうですが、お母様が反対しました。実権を握った他家の婦人達の魔手に私を晒したくないと。

その結果がお母様を仮初の家長に立ててのお父様による院政ですわ。うまく周囲をごまかしてやれていたんですよ。私の両親は優秀でしたから。

それでも隠し事はばれてしまうものです。そのあたりのどろどろした話は少し省きますわね。お父様は私達を守るために家を出てゆきました。重要なのはそこです。お父様は家長の座を母に譲るだけでなく、家を出て行ったんです。政府からの圧力で。

イギリスという国は表面上は貴族制度はなくなりましたが、実際は変わらず女王陛下と元老院、貴族で国の運営が行われています。ですけれど、長い事元老院は貴族達の傀儡ですの。

それで、貴族達を騙していた形になったお父様は元老院を通して他の貴族に家から追放されてしまいましたの。ええ、今でも思い出すだ

けで怒りに震えてしまいましたわ。

傀儡の元老院が言うには、他の貴族達と肩を並べるといふ慣習を守らなくてどうする事か。だそうですわ。

ええ、イギリスなんて古さしか誇る事がない国ですよ。慣習という言葉で全てが解決させられてしまいますの。伝統と誇りがあるから、他の国々より上に立っていると思つてますのよ。滑稽でしょう？さて、ここからが本題になるんですけれど、初日の日に織斑さんと口論の後にわたくし孤立しましたでしょう？イギリス貴族の典型のような態度で、日本という国を侮辱する事で。

イギリスが現在の世界情勢を理解せずに日本を侮辱する。この構図が重要でしたの。国際社会におけるイギリスの立ち居地を悪くするためには。

はい？ええ、はい。そうですね。わたくしの希望はイギリスというカビの生えた国の消滅ですわ。そのために織斑さんに喧嘩を売りましたのよ。イギリスが誇る、伝統と慣習に染まりきったイギリス人が、世界の情勢を鑑みることない発言をする事で国の破滅を推し進める。いい考えだったのですけどね。織斑さんにはその斜め上を行かれてしまいました、わたくしといえますかイギリスの立ち位置を決定的に崩壊させる事が出来なかつたものですから焦りましたわ。

けれど今回の I S の使用制限によつてイギリスの女尊男卑が終わるのは確実ですから、満足の一言ですわ。篠ノ之博士の事ですし、男性の使用もそのうち出来るようになるでしょうから、決定的ですわね。

これからについては殆ど考えていませんの。ですけど、イギリスには帰りませんわ。日本に留まるつもりでいますの。こちらに亡命するのもいいのではと思ひまして。だって食事がおいしいでしょう？今はそれくらいしか考えてませんわ。

え？織斑さん？そうですね。いろいろと大変な方ですわね。まあ、利用しようとした私が言うのもおかしいのかもしれませんがね。平穩を祈るばかりといったところですよ。

番外編06話

カランという軽快な音と共に入ってきた人影を見て、千冬は軽く手を挙げて招き寄せた。

「久しぶり、というべきなんだろうか」

「そうですね。お久しぶりです。織斑先生」

入ってきた人物、布仏虚は曖昧な微笑みと共に千冬の横に腰かけた。

「まさか、かつての教え子と酒を飲む一番最初がお前になるとは思っ
てなかったよ」

「そうですね。私は先生の熱烈なファンというわけでも、一夏さんと特別仲が良いわけでもありませんでしたから」

虚にグラスが出てきたところで、軽くグラスを合わせてから酒を飲む。

「だが今は一夏つながりだろうか？五反田夫人」

千冬のからかうような声に、虚は顔を赤くしながらも、グラスに口をつけることをごまかした。

「思い出話や、身の上話をしに来たわけでもないし、本題に入ってしまったか。何を聞きに来た？」

虚には目を向けず、グラスを睨むように見つめて千冬は声を絞り出した。

「全てを。あなたが知る全てを知りに来ました」

「全て、か。長い、長い話になる」

科学というものは発表されている技術と研究が進んでいる技術との間に大きな差が存在しているものだ。事の始まりは、ある男の欲望から始まる。

文明開化がそこそ昔の話になったころ、一人の男が経済界に姿を

現した。すでに名前は忘れられ、文献にすら残っていないその男は、日本という国の発展に大きく貢献をし、そして密かにその財を蓄えていった。

青年期が過ぎ、自身に老いを感じ始めたころ、男はある欲望に囚われた。まあよくある話、不老不死だ。

男は金に物を言わせて、不老不死に関するありとあらゆる情報を集めた。その中で男が一番興味を引いたのが、遺伝子科学と、そこから派生するクローン技術だった。

その当時ですら夢物語に近かったクローンという技術を、金をつぎ込み、無理矢理に技術加速させていった。

だが、ある程度研究が進むにつれ、男は個人での限界を感じ始めた。そこで男は、日本という国に目を付けた。クローンと遺伝子操作による優れた兵士の創造。世界進出に目を向け始めた日本という国はこれに飛びついてしまった。

数えきれない失敗を重ね、クローンではないがある技術が生み出された。

人格複写法。脳みその中身を全て、生まれて間もないまっさらな赤ん坊に上書きする、外道の技術だ。

男はこの技術によって実際に若い体を手にした。幼年期の若い脳は、新たな技術をスポンジが水を吸うかの如く身に着け、研究をさらに進めていった。

そして、遺伝子情報の部分的な改竄に成功してしまった。

なあ、お前は不思議に思ったことはないか？

なぜ、織斑千冬は生身でISの装備を振るうことが出来るのか、と。

私は、人格複写研究体参型、戦闘特化肉体対応人格、緊急特殊人格、名称『千冬』という。その男の生んだ技術の申し子だよ。

私は第二次大戦を生き抜くために特殊に設定された人格体だ。

幾千の冬をも乗り越えて生き抜くための人格、だから『千冬』。安直な名だろうか？

私は戦争を切り抜けるための戦闘技術と、残すべき科学技術の知識を詰め込まれた人格だった。

戦後、政府と密かに合流した私は、男が戦死したことを知り、そして政府にモルモットとして捕獲されることとなった。私は多くの技術を引き出され、新しい体を用意された。私に研究を引き継げということだった。

だが私には戦闘技術は豊富にあれど、科学は知識が殆どだった。故に、最低限しかない技術を持って、人格複写研究体壺型を蘇らせた。

海外からもたらされる科学技術と、壺型が持つ知識によって、クローンの研究は再び進み始めた。

研究が進む傍ら、壺型は自身の研究の恐ろしさを自覚してしまった。そして、全てを終わらせる計画を立てる。

外道によって生まれたモノは、外道によってしか滅ぼすことが出来ない。そのような考えのもとに生まれたのが、一体の人格複写体だ。同時にヒトクローンの成功例が誕生した。

壺型は研究に携わった全てを抹殺し、最後に、私の最後の人格複写を行った。

壺型は、私と新たに生まれた人格複写体をそれぞれある家庭に紛れ込ませた。と言っても、私の方は壺型の協力者だったようだが。

数年が過ぎ、複写人格が安定したころ、私は壺型の遺言とも言えるメッセージを見ることとなった。

もう一体の人格複写体には、知識と技術だけを複写し、ベースとなる人格は複写していないこと。クローン成功体は成長を凍結し、保存してあること。そして、協力者であった私の両親により壺型自身が抹殺されていること。

私はクローン体の凍結を解除し、家族として役所に届けさせた。ここまで話せばわかるだろう？

織斑一夏はヒトクローン技術によって生まれた試験管ベイビーだよ。織斑夫人に妊娠の事実は存在しない。

そして、もう一人の人格複写体こそ、篠ノ之束だ。

幼少より優れ過ぎた知識と技術を持つ子供が、自然に生まれると思うか？

壱型は優れ過ぎた知識を持つ子供が、世界というものに価値を見出さなくなることを予測していた。

そして予測の通り、束は自身が世界の歩みを推し進めることとなった。

だが、予想外の事態もあつた。束の行動が早すぎたんだ。私は焦つたよ。壱型が予測していた展開に、一夏という存在は不可欠だったのだから。

ん？一夏の役割？束の作る世界にいち早く適応することで、新しい世界の旗印になることだよ。一夏の成長ぶりの速さは目を見張るものがあつただろう？一夏はそういう風に作られているんだよ。

話を戻そう。私は、幼馴染の親友という立場を使って、束の足を引つ張ることにした。期限は一夏がある程度成長するまで。

そして一夏の高校入学を機として、私は束の枷を解き放つた。

あとは知つての通りだ。世界は束によって破壊され、再創された。このどさくさで、私は最後の使命を果たしてきたよ。日本政府でこの事実を知るものと、男の研究を知るすべてのものを抹殺すること。百何十年にも及ぶ男の不老不死の野望は終わりを告げたというわけだ。

「さて、と。長い話もこれで終わりだ。この事実はお前の胸の内にしまつておけ」

千冬は氷の解けた酒を一気に飲み干すと、二人分の代金を置いて席を立った。

「そうそう、私の体はもう長くはもたなくてね。戦闘用に調整された代償だな。もう会うことはない」

「一つだけ、聞かせてください」

虚の問いかけに、千冬は視線だけ返す。

「偽りの作られた関係であっても、あなたは一夏君を愛していたのですか？」

「何を当たり前のことを。あれは私の自慢の弟だ」

第37話

初恋は実らないというのは本当だったと身を以て知ったよ。
平穩を祈るばかりといたところすわ。
何を当たり前のことを。あれは私の自慢の弟だ。

「なんじゃそらーーーーー!」

自分でも驚くくらいの絶叫と共に飛び起きた。

いくら夢とはいえ、捏造にも程がある。大体家に両親の写真がちやんとある。妊娠してお腹が大きくなって、幼児期の千冬姉と手をつないだ家族写真が。

「ちよつとく。朝っぱらから何の騒ぎよ」

鈴たち四人が、慌てたように部屋に飛び込んできた。のほほんさんはまだ半分以上寝てるのか、目が開いてない。いや、普段からそんなにきつちり目が開いてなかった気もするが。

まあ、自分で驚くくらいの絶叫だったら、他の部屋で寝てた鈴たちにも当然聞こえてるよな。

「いや、悪い。あまりにもひどい夢を見てな。ひどすぎて叫びでツッコミ入れたみたいだ」

「はあ?なによそれ。まったく、目がさめちゃったじゃないの。ちよつと早いけど、朝食にしましょうか。一夏、あんたシャワー浴びてきなさいよ。その間にあたしたちで準備しといたげるから」

鈴に促されて、着替えを手に風呂に向かう。時計を確認したら7時前だ。いや、ほんとに悪い事をした。

「なんなら、簪と一緒に入って、目だけじゃなくて体も起こしてくる?」

「おいつ!」

「へうつ?」

俺の罪悪感を返せ。たぬきで顔を真っ赤にしてる簪を見れたから、

そこまで強くは言わないけど、女子がそんなあからさまな下ネタは言うもんじゃねえ！と言っておきたい。

「はあ？一夏。そんな夢見たの？確かにそんな内容だったらボクも飛び起きるなあ」

朝食後に見た夢の話をしたシャルの感想がこれだった。鈴はツボに入ったのか、テーブルに突っ伏して肩を震わせながら笑いをこらえている。

のほほんさんはまだ眠いのか、頭が揺れてるし。ってか、この状態でよく朝食食べれたな。そして、簪、なんかかわいそうな人を見る目で見えるな。本気で悲しくなる。

「ひいゝ苦しい。笑い過ぎて死ぬんじゃないかしら」

なんとか復活した鈴が今度は椅子にもたれてこっちを見た。だからお前もかわいそうな人を見る目をするなど。

「あれじゃない？昨日の夜に『怪盗三世の劇場版でどれが好きか』って話題したから」

「ああ。あれは盛り上がったからね。ボクはナポレオンのやつが一番好きなのは譲れないけど」

「クローン人間押しは本音だったよね」

「あたしは斬鉄剣だし、簪は風魔一族だっけ？」

「そう。一夏がワルサーだったよね」

「おう。あれが一番好きだな」

確かに昨日の夜にこの話題だけで結構な時間盛り上がったからな。だからクローンなんて夢見るのか。

「なんだかんだで疲れてるのよ、アンタは。だから話した内容に影響された夢なんて見るのよ」

「学園じゃ休まらないからなあ」

「男一人だしね。ボクも男装でそのまま入ってたら気苦労溜まって一夏みたいになったのかな」

「シャルの性格だと、どうやっても途中でばれたと思う」

「か、簪。きついこと言うね」

「まあ〜て〜。たいほだ〜」

視線がのほほんさんに集中する。

「寝ぼけすぎでしょ」

「夜一番はしゃいでたからね。仕方ないよ」

「起こす?」

幸せそうに寝ぼけているのほほんさを見て、しばらく放置で意見が一致した。

「そういえば一夏。今日は弾達とあっちで合流でしょ? 昼はどうするの?」

「途中で何か買って行けばいいだろ? 学園じゃ食べないの。バーガーとかバーガーとかバーガーとか」

「一夏、それってバーガー一択じゃないか」

「確かに食堂のメニューにハンバーガーないよね。おいしいのに」

「栄養管理も学園側の意向なんですよ。太られたら困るじゃない。寮生活で太ったとか言われたら、学園の生徒管理問題とかあるでしょ」

「ごもつとも。けど、たまに食べたくなるもんだろ、体に良くない高カロリーで。」

ピンポーン

あれ? 時計を見て8時過ぎだと確認してから、突如鳴った呼び鈴に首をひねる。

護衛の人たちが通過させている時点で問題のない人なんだろうけど、こんな朝から誰だ?

「はいはい」

「おはようございます」

虚先輩が立ってた。

「本音がこちらにお邪魔していると聞きました」

心配になって来てしまったと。まあ、信頼してた会長が盗聴なんてしてたら、過保護にもなるよな。

「えーっと、とりあえずどうぞ、上がってください」

「申し訳ありません。失礼します」

「あれ？虚先輩じゃない」

「本音のお姉さんだよな」

「みなさん。朝早くからお邪魔しますね。ああ、もう、本音。起きなさい。だらしのない」

「さっそく過保護全開。」

「簪お嬢様。申し訳ございません。本音がご迷惑をお掛けしてしまつて」

「簪。もうお嬢様じゃない。だから簪でいいよ」

「あ……。それでは、簪さん、で」

「うん。本音はもう少しこのままでいいよ。昨日夜ちよつとはしゃいでたから」

簪に止められて、本音をそのままにすると、鈴に促されて虚先輩も椅子に座った。

「虚先輩、朝早くからどうしたんです？」

鈴の問いかけに、虚先輩が気まずそうに視線を逸らした。

「いつも夏休み期間中は、あの人について仕事に追われていたので、いざ一人になったら何をしたいのか悩んでしまいました」

「高校生の時分から仕事に追われてたつて……」

「それで本音の様子見がてら、ボク達のところに来たんですね」

「恥ずかしながら……。お邪魔でなければご一緒させていただいてもいいでしょうか？」

「全然オツケーですよ。むしろ整備科の先輩にはぜひとも来てほしいわ」

「確かに、俺たちにそっち方面に詳しいのいなかったから、助かるな」

鈴と顔を見合わせて頷き合っていると、他の面々は首を傾げている。まあ、今日お披露目の予定だったから仕方ない。

それじゃあ、のほんさん起こして、のんびり向かうとしますか。

第38話

鈴を先頭にのんびりと目的地へ歩く。

ペースがかなり遅いのは、のほんさんがあっちへうろろうろ、こっちへちよろちよろしているからだ。その都度鈴が捕まえに行っている。頑張れ鈴。応援だけはしてやる。

「そういえば虚先輩。急に暇になつたつて言つてましたけど、ご実家の方は大丈夫なんですか？ 事の発端の自分が聞くのもアレなんでしょうけど」

「いえ、かまいませんよ。更識の家がなくなつたので、布仏の家は政府、正確には総理の直属となることに決まつたそうです。あの人の暴走を防ぐことのできなかつた私と本音は、今後家業に関わることを禁止されました。ですので詳しくは知らされていません。けれど、母から言われました。好きに生きなさいと」

寂しさと嬉しさの混ざつたような微笑みを虚先輩は見せた。

たぶんだけど、布仏家は補佐一族としてじゃなくて、補佐機関のトップとして政府に付いて、次代以降は一切関わらないんじゃないだろうか。更識家という諜報一族と共に布仏家という補佐一族も滅ぶ道を選んだんじゃないか。

虚先輩とのほんさんは、簪と同じように一族に関わりのない個人とすることでその柵から解放されただろう。

「私は、これでよかつたんだと思つています。篠ノ之博士が再び破壊したこの世界において、諜報なんて必要ないんですよ。きつと」
「なんか、すみません」

どうにか出た言葉がこれだった。虚先輩が納得しているとはいえ、虚先輩たちの家を壊した原因は俺にもあるんだから、なにか言うべきなんだと思う。けど、これ以外の言葉が見つからなかつた。

「本当は、その言葉もいらないうですけれど、受け取っておきますね」
そう言つて向けられた笑顔は、さつきとは違つて、慈愛に満ちた、蓮さんみたいな笑顔だった。

「へう~~~~」

会話が途切れたタイミングで聞こえてきた間の抜けた声に、視線を前方に向けると、のほほんさんが鈴に引きずられてた。

のほほんさんの後頭部を肩に乗せ、腰のベルトを後ろ手に掴んで見事に引きずってる。器用なもんだ。

のほほんさんはのほほんさんと、引きずられるのが楽しいのか、されるがままで。

「もう、本音ったら。また迷惑をかけて」

そういう虚先輩の顔は笑ってて、簪と目を合わせて頷く。虚先輩も楽しそうで何よりだ。

家から歩くこと十数分。川が近くに見える貸ガレージに到着。どうやら俺たちが最後だったみたいで、弾と蘭。そして久しぶりに会う数馬がすでに待っていた。

「遅かったじゃないか。ってか人数増えてるしよ！紹介しやがれ！」

「ん？ああ。こちらはのほほんさんのお姉さんで、布仏虚先輩だ。虚先輩、左から五反田弾、蘭の兄妹と、御手洗数馬です。地元の友人つてやつです」

「急に押しかけてしまつてごめんなさい。布仏虚といいます」

「い、いや。気にしないでください！人数多い方が楽しいですから！」

あ、これ弾のやつ惚れたな。

同じく察したらしい鈴と蘭が、スツと距離を開けて二人を見守るポジションに移動する。

「だつらしい顔してるわねえ。はたから見たら一発でわかるわよ」

「なんだかんだ言つても、女の人に免疫ないですから。アレ」

いや、自分の兄をさしてアレっていうのはどうよ。

「お姉ちゃんも男の人に免疫ある方じゃないから、ちようどいいんじゃないかな」

「お？数馬との挨拶はすんだんだ？」

「おう。御手洗だからみつちーって呼ぼうとおもったんだけど、だめっていうからかずくんになったよ」

いや、納得できるあだ名だけど、どこぞで反逆でもしそうだな。後ろを見るとシャルや簪とも挨拶は済んだらしい。

「よし、鈴。あのプチいちやらぶ空間を壊してこい」

「いやよ。なんであたしが」

「それじゃ、わたしがいってくるよ」

俺たちがとめる間もなく、のほほんさんが「ほっぷ　すてっぷ　じゃくんぷ」の声と共に弾にダイブした。虚先輩がのほほんさんを引きはがしながら、弾にひたすら謝ってる。弾のやつ、のほほんさんのメロン直撃うけて緩みそうになる顔を、虚先輩の前だからって必死で取り繕ってるな。

「カオスだな」

「一夏。のほほんさんを止めなきゃダメじゃないか」

「いや、まてシャル。のほほんさん担当は鈴だ」

「あんたこそ待ちなさいよ！いつあたしが担当することになったのよ！」

「最近ずっと鈴が本音のこと見てくれたから、助かった」

「よし。簪。あんたとは一度話し合わないといけないわね」

あ、こつちもカオスになってきた。

「あー。もう、そこまで、そこまで。とつと中に入ろう」

カオス空間二つを半ば無視するように、ガレージのシャッターを上げた。

そこには数か月ぶりを見る、羽根つきの自転車が、変わることなく鎮座していた。

第39話

「ねえ一夏。ボクこれに似たの見たことある気がするんだけど。魔女が配達するアニメに出てくるやつ」

「お、よく知ってるな。それをもとにデザインしてある」

「あれだよ。イナゴーラーって。あれ？バッターラーだっけ？」

いや、どっちも違うぞ。そんな名前の彼氏とか魔女子さんも願い下げだろ。

「トンボだよ。トンボ」

「そうそう。トンボだ」

ざっと見渡しても埃は被ってない。三人の内だれかが毎日必ず来てるんだろう。

「でもこれどうするの？」

「ねえ、シャル。ここに空を飛べるかもしれないマシンがあつて、その質問は愚問でしかないわよ」

鈴の言うとおりだ。こいつはそのために作ったんだから。

「飛ぶんだよこいつで。空を」

「ほんとに！コレ飛べるの?!」

おお。シャルの目が輝いた。なんだかんだでロマンわかるよなシャルって。

「まだ飛べん」

数馬がシャルの興奮に水を差す、けどまあ、確かにまだ飛べない。

奥のテーブルに広げられた設計図とも呼べない落書きを見せる。

「よくこの設計図でここまで作れましたね」

虚先輩の言うとおり、自分たちでもなんでここまでうまく作れたのかわかってないのがほんとなんだよな。

「最初は映画のまんまの見た目に作って、そこから全員で力学の本とにらめっこしながら翼を調整して何とかこの状態まで持ってきたんですよ」

「ちよつと弾。あんたはほとんど工作係で、実際に本とにらめっこしてたのは数馬と蘭でしょ」

「そこに自分を加えないあたりはえらいな、鈴」

俺と鈴は工作係兼パイロットだったからな。

「うっさいわよ一夏!」

「まあまあ鈴さん。一夏さんの毒舌にいちいち反応してたら疲れるだけですよ」

蘭も言ってくれる。

「けど、どこで飛ぶのさ。近くに見えた川だと、そんなに遠くまで飛ばせないでしょ?」

よくぞ聞いてくれた。

「シャルは知らないだろうけどな。日本には鳥人間コンテストってイベントがある」

「とり、にんげん?」

「そう、鳥人間だよ。こいつみたいな人力飛行機でどこまで飛べるのかを競う大会だよ。俺たちはいつかそこに出場したくてコレを作ったんだ」

「聞いたことがありますけど、まだやってたんですね」

ええ、虚先輩。まだやってたんですよ。

ISが登場して、生身で空が飛べるようになって大会の知名度はかなり下がっちゃったけど、まだちゃんと毎年やってる。

って、こういう時に一番反応しそうなのはほんさんの反応がない。とおもったら、簪と二人、いや数馬も入れて3人で設計図を真剣に覗き込んでる。

翼の角度はこのままでいいと思う。けどこれに一夏が乗るなら、もう少し翼の位置を下げた方がいいかも。かんちゃん、それだったらプロペラいじらないとだめだよ。ペラはあと3パターン作ってある。この凶面とこの凶面だ。角度が違うのと長さが違うやつだね。長さと角度両方違うやつもほしいかな。

盛り上がり半端ないな。そしてなにげにのほんさんの数馬に

対するくつつき度が高い。気に入ったな。あれは。恋に発展するかはわからないが。

「あちらはかなりの盛り上がりそうですね。シミュレーションをするためのパソコンと整備用具を自宅に取りに行つてきますね。本音と簪さんの必要になるでしょうから回収してきます」

虚先輩も思った以上に乗り気だな。ふむ。

「虚先輩。荷物持ちに弾をつけますんで、使ってください。協力していただけてほんとに助かります」

「いつ！おれ？」

「おう。頼んだぞ弾」

「あ、ついでに家に寄ってきて。母さんがお昼の弁当作ってくれてるはずだから」

蘭ナイスアシスト。

弾と虚先輩を見送って、鈴と蘭の三人で全員分の飲み物を買いに出る。設計図組は白熱したので放置だ。

シャルは羽根つき自転車をもつと見たいとの事でおいてきた。

「まさか弾に春が来るとはね」

「あんなきれいな人がアレになびいてくれるかどうか」

何気にひどいな二人とも。

「あとのほんさんがなあ」

「数馬に懐いてたわね」

「同じ領域で話せる男が珍しいってのもあるんだろうが、なあ」

「どう転ぶか気になるところね」

自販機で適当にチヨイスして一人三つ持つて戻る。

「簪たちが参加してくれてかなり現実味を帯びてきたわね。今までのままだったら、参加するのが何年後になるか分からなかったもの」

確かにな。参加するしない以前に飛ばなかったからな。

「あのう。ちよつと考えたんですけど、シャルさんをパイロットつてどうですか？鈴さんと一夏さんの丁度中間ぐらいの体格ですよ。ね。シャルさん基準で作ってしまえば、一夏さんや鈴さんにチェンジするときに対応しやすいんじゃないかって」

盲点だったわー。代表候補生やってるくらいだから体力もあるし、いけるんじゃない？ 本人も興味津々だったし。

「蘭。ナイスね。シャルを説得するわよ」

乗り気になって駆け出した鈴を早足で追いかける。

いつそ3人分作るのもありじゃね。とか思ったんだがどうなんだろう。

第40話

議論の熱中する三人を眺めながら、椅子を引つ張り出して隅に座る。

鈴は蘭と二人でシャルの説得に入っている。断るそぶりを見せながらも、目は興味に輝いてるから、そう時間もかからずに陥落するだろう。

俺たちが買い出しから戻ってしばらくしてから戻ってきた虚先輩と弾の距離が少し近くなってた。大方、弾が空回りしてテンパったところを虚先輩がフオローして、全力感謝した弾に男慣れしてない虚先輩がときめいたとかだろう。傍から見えて思うが、あの二人は純少女マンガ系だろう。よほどがない限りはうまくいくんだろうな。

最初は一人だったのに、いつの間にか大所帯になったもんだ。

小学校も高学年に差し掛かる頃には、一人での生活に慣れていた。家の事もしなくてはいけないのに、篠之乃の道場に無理矢理連れて行かれ、心身ともに追いつめられてただけはよく覚えてる。

学校の行き帰りや道場からの帰り道、空を眺めることが多かった。何も考えず、空を見上げて歩く。何の束縛もない自由を空に求めてたんだと今は思う。

そんな生活を続けていた時にISが世に出て、篠之乃の家は離散した。そして、今まで以上に家に帰らなくなった姉を忘れ、俺は弾の家でバイトさせてもらいながらの生活をしていた。

小5の夏、バイト仲間に鈴が増え、看板娘目的の客の増加でてんてこ舞いだったある日、食堂のテレビで流れていたのが、鳥人間コンテストだった。

ISの登場で女性の興味はそちらにほとんど移ったが、空を憧れる男たちの夢は、細々と、けれど消えることなく燃え続けていた。

人力で空を飛ぶ。ただそれだけ。たったそれだけのことなのに、ガ

ツンときた。

自分の求める自由がある気がした。

そこからは自分でも驚くくらい精力的に動いたとおもう。

資料をネットであさり、へたくそな図面をいくつも書いて、段ボールや割り箸で模型を作っていた。

俺のやつてることに興味を持った鈴が参加し、弾と蘭を引き込んできた。

今の形にしようと思ったのは鈴と蘭の、これってホントに飛ぶのか？と映画を見ながら放った言葉からだった。

中学に上がって、弾が数馬を連れてきて、さらに加速しだした。バイトの給料でガレージを借りた。中古の自転車も買った。資材も多く買って、とりあえず組み上げた1号機は、見事に川に沈んだ。

頭を突き合わせて話し合って、航空力学を知らないと話にならないということになって、専門書を買ってきて回し読みをしたけれど、理解できないことが殆どで頭を抱えもした。

ちょうどその頃、鈴と蘭から告白をされた。けど、俺には二人が仲間である意識が強すぎて、恋人には思えなくなってた。はつきりそう告げ、俺の前で泣くまいとこらえる二人には、すまないと思った。翌日、弾には一発だけ殴られ、数馬には肩をやさしくたたかれた。鈴と蘭は、目を真っ赤にしながらも、それまでと変わらずいてくれた。

この時から鈴は俺との関係をダチだというようになった。

程なくして、鈴が中国に帰国することとなった。鈴は、どんな手を使っても戻ってくる。これを飛ばすのは俺だけじゃなく、もう既にみんなの夢なんだからと宣言して去って行った。

そこで一度本格的な活動を休止することにした。受験に集中するためだ。受験との両立は不可能に近いと判断して、月に数回掃除に来るだけになっていた。高校に入ったらすぐにでも再開できるように。

まあ、その思惑も束さんと姉の目論見によって遅れたんだが。

けど、今はそれも必要だったんだと思う。束さんとの約束を思い出したことで、俺の空へのあこがれの原点に気が付いたんだから。

にしても、

「束さんなあ」

「これからさらに何をするのやら。」

「篠ノ之博士なら、先日来たぞ」

「はあっ?!」

俺のつぶやきに反応した数馬の言葉に、全員の視線が数馬に集中する。

「この間掃除に来た時に、ふらりと入って来て、これを散々眺めてから、『頑張れ若人』って笑っていなくなった。帰ってたんじゃない、目の前でいなくなったからさすがに驚いた」

あの人に対して俺のプライベートというものが存在するのかが本気で怪しくなってきたな。

「なによ。そんなこと言われたらやる気出てきちやうじゃない」

いや鈴よ。やる気が出るのはいいいんだが、シャドーなんかして誰と戦おうってんだ。

「夏の間はこちらに泊まり込みですね。学園と実家の方に連絡を入れておきますね」

「夏休み終わったら、学園でシミュレーター使って理想値探さない」と

「かんちゃんの出した理想値で私とお姉ちゃんモデル作るよ」

「じゃあ、その模型で合格ラインになったやつを、俺たちがここで作ればいいな」

「テストパイロットは私ですね」

みんなやる気だなあ。そうなると俺も燃えるじゃないか。

「それじゃあ、がんばりますか」

Another Episode

北欧の田舎。森と丘と数件の家と、小さな修道院だけのある村。風のそよぐ春の日、修道院の外に広げた敷布の上で、一人の修道女が、針仕事をしていた。

バンドーで覆い隠されている髪は、生え際から、珍しい銀髪だというのが分かる。だがそれ以上に彼女を目立たせているのは、顔の左半分を隠す大型の眼帯だろう。修道服に似合わない黒革製のそれは、異質ではあるが、彼女に良く馴染んでいた。

『こんにちは。眺めの良い場所ですね』

若干きこちなさのあるドイツ語でかけられた声に、彼女は顔を上げた。

そこには東洋人の若夫婦が立っていた。

『私は一日の大半をここで過ごすのですが、何年たっても見飽きることはありません』

彼女は針仕事の道具を脇に置くと、二人に体ごと向き直り、敷布に座るように促す。

『ドイツ語、勉強されたんですね。きこちないですが、綺麗に聞き取れます』

『そういつていただけると、勉強した甲斐があります』

そういつて、互いに黙り込んでしまう。

『ずっと、直接会って謝りたいと思っていました』

「あの日あの時、衝撃の出会いだったけど、シャルから言伝で聞いた言葉は、確かに俺に届いてたよ。謝罪は、充分に受け取っているさ」

彼女、ラウラーボーデヴィツヒはあの日から全てを失っていった。

隊長の地位を剥奪され、専用機を剥奪され、自身を特別足らしめる一因であった左目を剥奪された。そして、戸籍を剥奪され、軍を追われ、逃亡を防ぐために右足の腱も切られた。監視も兼ねてこの修道院に押し込められ、名もない一人の修道女となった。

豊かな自然と、争いのない日常が、壊れ果てた彼女の心をゆつくりと繋ぎ直し、そこで初めて一人の人間としてこの世界に産声を上げたのだ。実験体でも兵士でもない。ただ一人の、どこにでもいる少女として。

そして彼女は、自らの罪と向かい合った。兵士であつた自分が死ぬきつかけとなつた少年に、謝りたいと。そしてそれ以上に、礼を言いたいと。そう想い、願っていたのだ。

「あの時の俺たちは、自分以外のいろんなものに縛られて、もがいていただけなんだよ。俺が先に一歩抜け出して、お前は抜け出すのがちよつと遅かつた。それだけ、それだけなんだ」

すつと伸ばされた手に、頭を撫でられ、ラウラの瞳から涙がこぼれ出た。

泣き止んだラウラと改めて向かい合い、一夏は気になっていた疑問を投げかけた。

「口調、変えたんだな。偉ぶっている感じがなくなった」

「ここに来て最初に矯正されました。こんな口調の修道女などいたら礼拝者どころか神すら逃げ出してしまふと言われてしまつてな」

急に昔の口調に戻つたラウラの言う通り、修道服姿には全く似合つておらず、少し笑えてしまった。

「今ではこの口調の方がしっくりくるんです」

「あつてるよ。その方が、前の方は無理をしてたように感じたからさ」その話題を皮切りに、簪も交えて三人で、互いの近況や、他愛もない話で盛り上がる。

あの日、出会い方が違つたらありえただろう光景が、確かにそこにあつた。

「すまん。ちよつと手洗いに」

「でしたら案内をつけますね」

ラウラに断って立ち上がると、修道院の方から一人の修道女が近付いてきた。どうやら彼女が案内役らしい。

案内役の女性は、バンドーで目元以外すべてを覆っていて、素顔が分からないが、逆に釣り目がちな目ははつきりと見えていた。

建物の中に入ってから、案内役に声をかける。

「簪に、直接会わなくていいんですか」

一瞬、肩が震える。

「今日を逃せば、もう機会はありませんよ」

「私は、もう死んだ人間なの。会う資格もなければ権利もないのよ。私はそれだけのことをしてしまったのだから」

「俺から言えるのは、今ここにいるのは、姉だった人と、妹だった人がいるだけです。その二人が会って話すことに、資格も権利も必要ない。それだけです」

こうと決めたら一直線な人だ。だからこそあの時簪のために暴走して、今は自身を縛ってる。とても不器用な人だと、そう思う。

「まあ、のほほんさんとうつほさんに許されることはないのだけは、事実として受け止めておいてください。俺からはそれ“だけ”です」

それだけ言ってトイレに入る。戻りは大丈夫だからと伝えるのだけは忘れない。トイレ待ちされるとか恥ずかしすぎる。

夕方になって、ラウラに別れを告げる。

「もう、会うこともないんですね」

「そうだなあ。なんせ宇宙だからな」

そういつて三人で夕焼けの空を見上げる。

「さようならわが友よ。私はあなたの方を決して忘れません」

「さよならだ。俺たちも絶対に忘れない」

見送りに出てきたほかの修道女たちにも軽く頭を下げ、別れを惜しみながら歩き出す。

「簪」

「うん。わかってる。わかってるよ」

簪が自身に言い聞かせるようにつぶやくと、身を翻して駆け出した。その先に居るのは、案内をしてくれた修道女。

「頼みが、あります。私の知ってる人が、ここに来るはずですよ。その人に伝言を、お願いします」

修道女が小さく頷くのを見て、簪が続けた。

「あの事は、許してあげないけど、だけど、あなたからの愛情はわかってたから。私もちやんと愛してたから、ありがとう。私のたった一人のお姉ちゃん。それだけです」

言い捨てるように告げて、こちらに駆け戻ってきた。

「行く。一夏」

袖を引かれて歩き出す。後ろで崩れ落ちる音と、嗚咽が聞こえてくる。俺の手を引いて一歩先を歩く、小さい背中からも聞こえてくるのは聞こえないことにしよう。

「あいしてるよ。かんちゃん。私の大事な大事なかわいい妹」

最終話

「結局今年も本音と数馬とシャルが優勝ね」

端末から投影されてたニュースのホロヴィジョンを消して鈴は嘆息した。

「まさか本音とシャルが数馬めぐって対立するとは思ってもみなかったわ。数馬にはもったいないにも程があるでしょうに」

眩きながら放り出した端末が、ふわりと宙に浮く。まさか宇宙で生活する日が来ようとは。なんて考えつつ、無重力に任せて後ろ向きにくるりくるりと回りだす。

本音、シャル、数馬の3人は航空事業の会社を立ち上げ、開発から整備、果ては航空輸送と手広くしつつ、年に一度の鳥人間には欠かさず参加している。本音とシャルの間で話し合いがつき次第、重婚可能な国に移住するだろう。

弾と虚は無事結婚し、五反田食堂から暖簾分けした店を、知り合いの誰もいない街に出した。知り合いのいないところで腕試しをするんだと、夫婦で笑っていたのが印象的だった。

山田先生は鈴たちの世代が卒業した後、体を休めるために一年休業したのちに復職して、今では学年主任だそうだ。

千冬さんの最後は、ひどいものだった。休むことなく戦い続け、限界を超え、歩くことさえまもなくなくなっていった。一夏が、お疲れ様。と言うと、静かに息を引き取った。

東さんは宇宙ステーション、軌道コロニーをあつさり作り、果てに外宇宙探査コロニーを作って、人を募り、旅立っていく。

一夏と簪は高校を卒業する前に籍を入れ、卒業後に東の外宇宙探査コロニーのメンバーに揃って志願して、皆を置いて行ってしまふ。

あたしは蘭と二人で軌道コロニーで宇宙開拓事業に従事している。本当は一夏について行こうと思ったのだけれど、二人の子供を預かり、地球という星をたくさん経験させてから追いかけることにした。

東さんの探査コロニーは地球から6年ほど離れたところに中継基地を作るらしく、その資材運送団に3人して枠を確保している。

私たちの育った星をしつかり見せて、両親の功績を辿らせて、両親と一緒に更なる旅路をゆく。一夏達親子で充分話し合って決めたそうだから、預かってやることにしたのだ。

「鈴姉さん。下着見えてるよ」

不意にかけられた声に、ついつと視線を向けると、青みがかった髪をした10歳くらいの少年が、顔を赤くして視線を逸らしていた。

「マセガキ。あと10年してから言いなさい」

「その頃に鈴姉さんが変わらさず綺麗だったら言っただけよ」

「モモのくせに言うじゃない」

勢いをつけて少年に飛びかかり、頭を抱えて力いっぱい撫でまわす。

「わっ、わっ。やめてっば」

解放すると、真っ赤になって鈴から距離を取った。

(あたしも成長したもんだわ)

高校当時のシャルくらいには膨らんだ胸を見て、二度三度頷く。

「本音さんって、あの間延びした感じでしゃべる人でしょ？シャルさんと張り合えるの？あの真っ黒な人と」

「あんたどこでそんな知識覚えるのよ。まあ、問題ないわよ。本音もなんだかんだ言っ腹黒だから。まさかあのしゃべりが作ったキャラだなんて思いもなかったわよ」

少年が空中で膝から崩れ落ちた。淡い幻想でもあったんだろう。

「にしてもモモ、あんたも彼女くらいいいいの？最近の小学生は進んでるんでしょ？」

「いないよ。それより鈴姉さんこそ彼氏いないの？モテそうなのに」

「あたしと蘭は一生一人身よ。そう決めてるの」

少年は小さくそっか、そっかあと呟くと、話題を変えようと大きめの声を出した。

「それよりも！モモって言うのやめてよ。女の子みたいで嫌いなんだから」

その言葉に、鈴の目がスツと細くなる。

「もも、アンタ母親の名前漢字で書ける？」

「え？こうでしょ」

宙を指でなぞるように簪の文字を書き上げていく。

「父親の名前は？」

言われるがままに、一夏。と書く。

「一夏の夏の字の書き出し二画と、簪の字の最後の目を合わせて百。それに一夏の夏と千冬さんの冬の間を取って春。それで百春」

鈴は少年、百春の両頬を包み、目をしっかりと見て続けた。

「あんたの名前はね。一夏と簪の宝物だつてことと、一夏が千冬さんのことを許すことで乗り越えて、次に進むっていう誓いと、百年きつちりと生きてほしいという願いのもとに付けられたの。みんなで何日も何日も考えて付けたものよ。だから絶対にカツコ悪いものじゃない。誇りなさい。その名前を。あんたはみんなに愛されてるって証なんだから」

「……わかった」

「わかればよろしい」

鈴は百春の頭をやさしく撫でると、再び無重力に身を任せた。

「鈴姉さんも名前考えてくれたの？」

「あたしはね、あんたの名前を春にすべきだつて言ったの。一夏は千冬さんを許したから、夏と冬の間の季節にしようつてことになったのよ。そこであたしは春を押ししたの。時を遡るんじゃなくて、進むようになって。どんな時でも先に進めるようになってね」

あたしもたまには良いこと言うもんよ。と、百春に背を向けて言った。後ろからでも耳が赤く、照れているのがよくわかる。

「わかった。百春つて名前、好きになるように頑張るよ」

「そうしなさい」

鈴は手をひらりと振って応えた。

「あ、そうだ。モモ、面白いこと教えたいわ」

器用に宙で体をひねると、にんまりと笑って見せた。

「一夏つて、今でこそ落ち着いて簪といい夫婦してるけど、高校のとき結構溜めてたものが爆発しててね、当時担任だった千冬さんにかなり

反抗してたのよ。それも口がよく回るもんだから、ちよつと調子に乗っちゃてね。まあ、あたしたちもそれに便乗したんだけど、そのせいでアイツ、面白いあだ名がついてたのよ」

思いがけず始まった、父親の高校生の頃の話に、百春の目が輝く。「毒舌と、根回しと、腹黒さを取ってね。こう呼ばれたの」

ダークサマーって